

平成14・15年度

自然・人・地域に学ぶ

— 兵庫県立南但馬自然学校プログラム研究委員会のまとめ —

まつの館

兵庫県立
南但馬自然学校

HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

何をやるかではなく

プログラム研究委員会の毎年の研究紀要「自然・人・地域に学ぶ」、どんな風にご利用いただいているのでしょうか？ なるほどいろいろな活動が載っています。ある年は活動の進め方、留意点などが詳しく述べられていたり、自然、人、地域に分けてそれぞれに活動例があったり、子どもたちに5泊6日「何をやらせるか」を軸に作られていて、これを見れば自然学校ができる、なんて意気込みで作られています。

いろんな意見があるでしょう。子どもたちにとっては一回きりの自然学校なんだから、あまり「何をやるか」を考えずとも「前年と同じ」でいいのでは。一方逆に、活動例を並べられると、まるで教科書と指導要領。自然学校のよさが損なわれてしまうのでは。

今年はかなり方向を変えてみました。何をやるか、どうやるかよりも「どう考えてやるか」を重視しました。そして毎年冊子にまとめていたのを2年かけてじっくり考え、じっくり作りました。直接関わった人たち結構大変だったようです。

そんな間にちょっと目に付いてきたことがあります。活動やプログラム、いろいろな研修会の進め方などが少しずつ変わってきたのでは、と見え始めたのです。こんな活動を「する」ではなくて、何が目的、それは達成されたか、それには振り返りが大事、などなど、そんな観点が色濃くなってきたのです。

2年かけてじっくり研究してきたことが、みんなにそんな影響を残し始めたのでは、なんて考えています。

兵庫県立南但馬自然学校

校長 森 本 雅 樹

2003年8月、県立南但馬自然学校において、現場の指導者を対象に「プログラムデザイン」をテーマにした講習会が開かれました。そこでは、受講者は実際に企画者となってプログラムを考えるに当たって自らフィールドを歩き、想定される様々な体験を重ねた上で計画を練るという手法を用いました。マウンテンバイクで溪流に遠征したり、藪を掻き分け沢の源流までよじ登ったりと汗だくになって調査をしたのです。その結果、想定した以上の活動の可能性が見えてきたり、安全管理の要点や修正をせまられる点が分かったりと、体験から得られた情報の整理をすることで非常に具体的な生き生きとした活動計画が生み出されていきました。そしてなにより、受講者の指導者自身が生きた自然体験の感動を味わったことが大きかったように思います。

言い古されていることですが、指導の立場に立つ人は、自らが多くの直接体験をすることで初めてその感動を伝えることができます。自らの感じた同じ喜びを子どもたちと共有できるという素晴らしい場面を作ることができるのです。子どもたちは小さいときから大きくなるまで、質の高い自然とのふれあい、人とのふれあいという多様な体験を積み重ねることで、豊かな感性が培われていきます。

今年度のプログラム研究委員会では「プログラムデザイン」「体験学習法」「発達段階から見た自然体験活動等のあり方」という三つのテーマを設けましたが、ベースはいずれも体験から生み出されるものを大切にしたいということにかわりありません。大人になった指導者も労力を惜しまずさらなる体験を積み重ねたいものです。

兵庫県立南但馬自然学校プログラム研究委員会

委員長 山田 誠

も く じ

発達段階から見た自然体験活動等のあり方

本研究の目的	2
1 自然体験活動の分類から見えること	3
2 発達段階から見える体験活動（自然体験）のねらいと実際	6
3 宍粟郡一宮町の実践から見た自然体験	12
(1) 小・中学校連携による「森のゼロエミッション」体験学習	
(2) 小・中・高等学校合同クリーン作戦	
(3) 「家原塾」を活用した体験活動	
4 県下高等学校での野外活動の実態	26
5 高校生リーダーと小学生の自然体験プログラム	28
6 県内民間団体の取組	30
7 県内小学校の自然体験活動事例	32
8 本研究のまとめ	33

プログラムデザイン

はじめに	38
1 学校における自然学校のさらなる充実のための取組	38
2 自然学校プログラムデザインについて	40
3 プログラムデザインの手法を生かした取組事例	44
4 プログラムデザインを有効に機能させるための資料集	54
5 学校教育におけるプログラムデザインの活用（例）	75

体験学習法

はじめに	82
1 体験学習法	82
2 体験学習法的前提条件	83
3 体験学習法の循環過程	84

4	体験学習法のための環境づくり	87
5	ファシリテーターとは	88
6	プログラムの組み立てと流れ	89
7	体験学習法を取り入れた例	90
8	自然学校受入施設の自主事業及び教科学習等の実践事例について	96
	「これがキャンプだ！ 原始人」	
	「自分・新発見！ ～夏山にチャレンジ～」	
	「試しのゲーム後の『分かち合いタイム』」	
	「アイマスク体験後の『分かち合いタイム』」	
	「養護老人ホーム訪問後の『分かち合いタイム』」	

発達段階から見た

自然体験活動等のあり方

本研究の目的

- 1 自然体験活動の分類から見えること
- 2 発達段階から見える体験活動(自然体験)のねらいと実際
- 3 宍粟郡一宮町の取組から見た自然体験
- 4 県下高等学校での野外活動の実態
- 5 高校生リーダーと小学生の自然体験プログラム
- 6 県内民間団体の取組
- 7 県内小学校の自然体験活動事例
- 8 本研究のまとめ

本研究の目的

本県の「自然学校推進事業」が実施されてから本年度で16年を経過しようとしている。この間、関係各位の努力により「兵庫の自然学校」は多方面から注目をあび、評価される事業に育った。県内小学校5年生にとっては心待ちにする行事となり、保護者の間にも一定の評価が得られるようになった。しかし、「イベント化」「マンネリ化」などの負の声が聞かれるようになったのも事実で、今後の自然学校のあり方が問われる時期にきている。

一方で、1996年7月に公表された第15期中央教育審議会による第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」では、これからの社会を「変化の激しい、先行き不透明な、厳しい時代」ととらえ、子どもたちに「生きる力」を育むことの必要性が強調され、体験活動の機会を広げていくことが打ち出された。現在進行中の教育改革、教育施策はこの答申に沿って具現化されているもので、とりわけ2002年度から始まった新学習指導要領では、各教科にまたがった形での総合的な学習の時間を中心として、体験的な学習を積極的に進めることが明示されている。

体験学習の必要性を先導的に具現化したのが兵庫県の「自然学校」「トライやる・ウィーク」「クリエティブ21」と言えるが、現在、相互が有機的、系統的に結びついた事業であるかという点、まだまだ改善の余地はみられる。小学校では自然体験、中学校では就業体験、高校では地域とのふれあい体験と、様々な体験活動に目先が向いてはいるが、それぞれの前段階の積み上げを基礎として次の体験が成り立っているか、熟考すべきである。

自然学校関係者にとって、小・中・高等学校を通して自然体験を柱とした活動ができないかという視点に立って体験活動を考え、自然学校で体験した学びを生かして中・高等学校ではさらに「人間関係の改善、人間と自然との相互関係の改善」へとステップアップした自然体験の場を提供できないだろうかなどその可能性をさぐることは至極当然である。自然学校をスタート台として中・高校生になっても長期の自然体験の中で深い学びを獲得するためには、ただ機会を提供するだけでは十分とは言えない。発達段階に応じたねらいとプログラムが示されて初めて系統的、有機的な学習環境が整うと言える。

本章では系統的な自然体験活動に着目し、発達段階に応じた自然体験プログラムのあり方、異年齢集団で構成される自然体験プログラムの可能性を探るために、以下の切り口でアプローチすることとする。

「自然体験活動の分類化」

自然体験活動は教育の視点から見た場合、直接体験による感性学習（自然の中で）、自然という教育自然を用いて（自然によって）、学校で学ぶことを中心とした知識・技術学習（自然について）、問題解決のための行動・参加学習（自然のために）という四つの目的を有する。

これらの目的はあらゆる発達段階の自然体験の場で必要な視点であるが、あるステージでは特に強調される必要がある。例えば幼児期では草木の名前を覚えることより五感を用いて興味・関心と呼び覚ますことが必要であろうし、学齢期には知識・技術の習得の時間も増えてくる。成人期には問題解決に向けた行動に参加するよう働きかけることが必要になってくる。

ここでは兵庫県内で行われている自然体験活動を四つの類型に分けてみることで、どの発達段階にどのような活動が行われているのかという特徴を浮き彫りにしようと試みた。

「子どもの成長過程と体験活動の工夫」

たとえば小学生と中学生がアウトドアクッキングという同じ活動内容を行った場合にも、その活動に求められるねらいは発達段階によって自ずと異なることが予想されるが、実際は小学生も中学生も単に飯ごうでご飯を上手に炊くことを目的にしていることはないだろうか。ここでは子どもの成長過程から見た体験活動の意義について整理することにより、発達段階によるねらいや目的の違いを明確にした。また、発達段階による自然体験活動の意義そのものの違いについても考察を加えた。

「宍粟郡一宮町の取組から見た異年齢プログラムの可能性」

文部科学省「豊かな体験活動推進事業」推進地域に指定された宍粟郡一宮町の取組を紹介し、異学年での体験活動の取組、小・中・高校生が一つの体験活動に取り組む様子をレポートする。その中から今後、小・中・高等学校一貫した自然体験活動のプログラム作りの示唆を得る。

「県下高等学校での野外活動の実態」

実施状況・内容の概要と傾向を把握し、県下3校の取組を紹介する。

「高校生リーダーと小学生の自然体験プログラム」

財団法人兵庫県青少年本部が実施した「青少年活動（野外活動）初級リーダー養成研修」を紹介する。

「県内民間団体の取組」

自然体験活動は、学校教育に限った場合、必要性が認知されながらもまだまだプログラムは少ない。ここでは社会教育の場にも範囲を広げ、先進的な取組を行っている民間団体を紹介する。

「県内小学校の自然体験活動事例」

兵庫教育大学附属小学校の取組を紹介する。

1 自然体験活動の分類から見えること

(1) 分類について

自然体験をテーマにして、何を学ぶのかを観点として次の四つに分類する。

ア 自然から学ぶ (in) ……教室では味わえない本物にふれるカリキュラム

- ・直接体験を取り入れる方法→身近な自然体験、動植物の飼育・栽培、地域の特産品や民芸品・花や野菜づくりなどの体験活動、伝承遊びやものづくりを通しての体験活動など
- ・制作活動を取り入れる方法→自然物を使っての制作活動
- ・豊かに表現された教材を取り入れる方法→豊かな自然、生命の尊さを表現した詩や物語、資料

イ 自然について学ぶ (about) …自然について理解を深めるカリキュラム

- ・直接体験を取り入れる方法→感性に訴えるものから知識へ

インタープリター（解説員）や書物、デジタル資料から学ぶ

ウ 自然のために学ぶ (for) ……自然に積極的に関わるためのカリキュラム

- ・自然環境保全のための諸活動、調査、討論

エ 自然による教育 (by) ……自然環境を有効に利用したレクリエーション活動や、グループダイナミクスを活用したカリキュラム

- ・パッケージドプログラム、ASE、ネイチャーゲームなどの自然体験など

(2) 自然体験活動の分類

校種	自然から学ぶ (in)	自然について学ぶ (about)	自然のために学ぶ (for)	自然による教育 (by)
小 学 校	登山 自然観察 自然散策 ナイトハイク けもの道探検 生き物・植物観察 星の観察 テント泊 牛の見学 地引き 網体験 川遊び カヌー体験 ビオトープを利用した活動 昆虫採集 植物採集 魚つか み サツマイモほり 田植え 体験 火おこし体験 野外炊 事 秘密基地づくり アクセ サリー作り 石の文鎮づくり 押し花パウチ 思い出クラフ ト 思い出の玉手箱作り 木 のペンダント 草木染め 熊 笹茶づくり 自然工作 竹馬 づくり 竹クラフト 凧づく り ミニリース作り 木工ク ラフト 焼き板 わら細工 スケッチ キャンプファイヤ ー キャンドルサービス 基 地遊び ターザンごっこ	登山 自然観察 自然散策 ナイトハイク けもの道探検 生き物・植物観察 星の観察 昆虫採集 植物採集 城跡ハイク バードウォッチング 水質調査	環境調査 水質調査 枝打ち間伐体験 源流探検	施設探検マップ作り ウォークラリー オリエンテーリング 雪で遊ぼう（そり） 雪山探検(冬山登山) 自然観察ビンゴ アニマルトラック イニシアティブゲーム コミュニケーション ゲーム ネイチャーゲーム ふれあいゲーム ナイトアドベンチャー
中 学 校	登山 自然観察 自然散策 スキー教室 星の観察 テン ト泊 ナイトハイク 磯巡り 夜光虫観察 カヌー体験 ビ オトープを利用した活動 野 外炊事 絵葉書作り 焼き板 作り サンドアート ペンダ ント作り キャンプファイヤ ー	登山 自然散策 星の観察 水質調査 夜光虫観察	地元の山を調査 水質調査 枝打ち間伐体験 クリーン作戦	ウォークラリー スタンプラリー スケッチ
高 等 学 校	登山 自然観察 自然散策 星の観察 スキー教室 スノ ーモービル体験 カヌー体験 テント泊 ビオトープを利用 した活動 野外炊事 体験工 作 キャンプファイヤース タンプ大会	登山 自然散策 星の観察 水質調査	水質調査 クリーン作戦	ウォークラリー 散歩

※この分類表に掲載されたものは、昨年度、兵庫県下の自然体験活動施設で実際に各小・中・高等学校で行われたものを中心である。

(3) 考 察

ア 自然体験の活動量及び種類は、小学校が圧倒的に多く、中学校、高等学校と学校種が上になるほど少なくなっている。

これは、兵庫県下全ての小学校5年生が自然学校を体験しているので、当然の結果とも言える。中学校や高等学校においても、それぞれの学校がその必要性を認識した上で、教育課程の中で自然体験を含め、学校内では体験できない様々な体験活動を行うため、2泊3日程度の自然体験活動を学校行事として実施しているところもある。

また、この傾向は兵庫県に限ったことではなく、全国的にも同じような傾向がある。(「体験活動事例集 豊かな体験活動の推進のために」平成14年10月文部科学省初等中等教育局参照)

発達段階によって、自然体験の持つ意味は違ってくる。詳しくは次の項で述べることとなるが、小学生は、中学生や高校生と比べると自然体験の重要性が大きいと言える。

子どもの学びの過程は、生活の中での体験とこれまでの科学的・法則的にとらえた概念とをキャッチボールしながら(統合的思考)、さらに思考を深め新しい認識の枠組を獲得していく。

この過程において、体験が十分でない子どもの学びの過程は、思考・概念の段階からいきなり始まることになる。実体験がないままで、抽象化され、概念化された理屈を覚え込む以外に、学ぶ手立てを失っていく。知ることの喜び・意欲も失われていく。また、成人に近づくにつれ、概念を組み合わせたり抽象的なシンボル操作のみにより、認識を深めるだけになる。

したがって、小学校の方が直接体験としての自然体験の機会を多くするという教育的意図が強いとされる。

イ 小学校、中学校、高等学校のいずれの学校種でも行われている自然体験は次の11種である。

- ・登山 ・自然観察 ・自然散策 ・星の観察 ・カヌー体験 ・ビオトープを利用した活動
- ・スキー体験 ・野外炊事 ・キャンプファイヤー ・水質調査 ・ウォークラリー

これは、その活動を実施する意図から次の3タイプに分けられる。タイプごとにそれぞれの学校種での活動について述べていく。

<普段の学校生活では体験できにくい自然体験>

- ・登山 ・自然観察 ・自然散策 ・星の観察 ・カヌー体験 ・スキー体験
- ・野外炊事 ・キャンプファイヤー ・ウォークラリー

これらの自然体験は、広く世間一般でも行われている。普段の生活の中では味わえない爽快感や充実感を味わい、自分の生活をリフレッシュすることができる。これは、自然が持つ本質的な力と言える。そして、これらの活動をグループ等で実施することにより、仲間づくりにつながるという側面も持っている。

学校種による違いを考えると、年齢が上になるほど自分の興味・関心が固まってくる傾向があるので、例えば、星の観察をする場合も熱心に取り組む子どもとそうでない子どもとの差が大きくなると考えられる。したがって、高校生が星の観察をする場合は、それなりの課題を持ってできるようなしかけ(課題の内容、観察器具等)が必要となってくる。

<学校で学習した（する）こととのつながりを持つ活動>

・水質調査

総合的な学習の時間や理科で環境を扱う学校が多く見られる。環境を考える一つの手法として水質調査が行われる。山間部あるいは海岸近くの自然豊かな場所にある施設では、学校近辺の河川等で行う水質調査とは違う結果を得ることができる。

中学校や高等学校になるほど、より高度な調査や考察が可能となる。

<自然環境が減少していることから取り組む活動>

・ビオトープを利用した活動

自然体験活動を十分に行うことを目的とすると、山間部や海岸近くの施設に一定期間滞在しての実施が必要となる。しかし宿泊を伴う自然体験でも、長期間、継続して自然について観察したり、調査したりすることは難しい。また、都市部を中心に野生生物が姿を消しつつある。このような現状の中で、敷地内に野生生物の生息の場所、ビオトープをつくり、継続的な観察・調査を行っている学校がある。

ウ 分類表の四つの項目に二つ以上関わってくる自然体験活動がある。

自然体験活動	活 動 の 意 図	
登 山	自然から学ぶ (in)	自然について学ぶ (about)
	山の中を歩くことや、山頂から見える景色などによって自然の雄大さを感じることができる。	実際に山道を歩くことで、山に咲く花、緑生い茂る草木、また、鳥や虫を目にすることも多い。まさに生きた教材と言える。
星の観察	自然から学ぶ (in)	自然について学ぶ (about)
	澄んだ空気の中で満点の星を眺めるだけで何とも言えない気分になることができる。子どもたちも様々な感想を持つであろう。	教室等での学習と比べて、はるかにダイナミックに星や星座等について学習を深めることができる。

※自然観察、自然散策、ナイトハイク、けもの道探検、生き物・植物観察、昆虫採集、植物採集についても、上の二つと同様、豊かな自然の中で実施することにより、子どもたちが五感を通して様々なことを感じたり、学習したりできる。

2 発達段階から見える体験活動（自然体験）のねらいと実際

(1) 子どもの成長過程と体験活動の工夫

ア 小学校低学年—体験活動から「気づき」が生まれる時期

小学校低学年で展開される体験活動は、幼稚園時代の体験活動と類似しながらも、そこからの発展が見られる。例えば、生活科では、幼稚園と違って授業の間隔が空いた時間で活動が行われるが、子どもたちはそれを記憶の中でつないでいけるようになる。

そして、これらの活動の中で「自立への基礎を養う」ことが、この段階の子どもにとって

重要になる。

***この時期における体験活動を工夫するための観点**

- ・子どもの中で活動がつながるようにする。(時間の間隔が多少空いても、類似したり関連の深い活動を続けていくことで、気づきが定着し、やがて理解として成り立っていく。)
- ・場になじみ安心して活動できるようにする。(子どもたちが活動の場に親しみ、安心して活動できることにより、より多種多様な気づきが生まれる。)
- ・自分たちの生活や活動とつながるようにする。(子どもたちの体験活動にふくらみをもたせるためには、活動を単独の孤立したものとせず、普段の生活や活動とつながるようにすることが大切である。)
- ・物事の本質に根ざした気づきが生まれるようにする。(体験活動を通して何かを考えてほしい場合には、その時期なりの気づきを大事にする必要がある。気づきには多種多様なものがあり、成長に応じてできる限り本質に根ざしたものが生まれるようにすることが大切である。)

イ 小学校中・高学年—社会に広がっていく時期

小学校中学年以降になると、幼児期を離れ、物事をある程度対象化して認識することが可能になってくる。対象との間に距離を取って分析できるようになり、知的な活動も生かした追求が可能になる。自分のことも距離を取ってとらえられるようになることから、自分と対象との関わりが新たな意味を持つようになる。

***この時期における体験活動を工夫するための観点**

- ・自分との関わりを明確にし、主体的に取り組めるようにする。(自己が明確になり自覚されるようになる時期においては、自分がやりたいと考え、自ら選択し、繰り返しそれについて思いをめぐらし、その展開の中で活動が深まり達成感が得られるのである。)
- ・社会に目を向け、多くの人々と関われるようにする。(この時期の子どもたちは、社会的な広がりが増し、世の中の人々の生活などの様子が目に入ってくるようになる。また、自分の活動を世の中の人々の活動と重ね合わせ、つながりを感じることができるようになる。そして、自分たちの体験活動に本気で取り組めるようになる。)
- ・体験活動と教科等での学習をつなげていく。(中・高学年の時期になると、体験で印象に残ったことを教科の学習活動で事例として用い、理解を深めることも可能になる。体験と知識の両立と関連が可能になることは、この時期以降の体験活動のあり方を大きく変えることになる。)
- ・体験活動を振り返り、意味を考える。(体験活動を整理し、時間をかけてその全体を振り返り意味を考えることを通して、体験活動の価値はより高いものになっていく。)

本県においては、小学校5年生対象に5泊6日の「自然学校」を実施している。

この事業は、学習の場を教室から豊かな自然の中に移し、児童が人や自然、地域社会とふれあい、理解を深めるなど、様々な体験活動を通して、自分で考え、主体的に判断し、行動

し、よりよく問題を解決する力や、生命に対する畏敬の念、感動する心、共に生きる心を育むなど、「生きる力」を育成することを目的として実施している。5年生の時期の子どもたちは心身ともに発育、発達が著しいときで、自然環境に恵まれた中での集団宿泊生活を経験することは心身の調和的な発達上望ましいと考える。

ウ 中学校—内面との結びつきが意味を持つ時期

思春期に入り、親や周りの友だちと異なる自分独自の内面の世界があることに気づいていく。また、内面の世界が周りの友だちにもあることに気づき、友だちとの関係が自分に意味を与えてくれると感じる。大人社会と関わる中で、大人もそれぞれ自分の世界を持ちつつ、社会で責任を果たしていることの気づきへと広がっていく。

*この時期における体験活動を工夫するための観点

- ・自分の内面の世界を表現する。(この時期の変化は一般的な知識としては理解されても、自分の変化がどのようなものなのか、自分がどのように変わっていくのか見当がつかない。そのような時期に、内面を自分なりに位置づけていくには、自分の内に生まれる思いを何らかの表現手段により表していくことが重要である。)
- ・級友と共に活動し心を揺さぶられる体験をする。(対等な関係の中で、共同して新たなものを発見したり作り出したりする関係をどのように構築できるかが重要である。自分たちが探索し、考えていくことで、他では得られない新たなものを、自分たちの力で見出せたという実感が得られるようにすることが大切である。)
- ・大人の世界に加わり一定の役割を果たす。(大人の世界に加わり、大人と共に働き、一定の役割や責任を担う体験をすることを通じ、社会のあり方を垣間見て、苦労もあるが生き甲斐もあることなどを理解するようにすることが大切である。)
- ・自分たちの取組を社会に発信していく。(自分が学ぶことと大人の仕事などの距離を、自分たちが考えて取り組んだことの成果を社会に発表し提案していくような活動を通して、できる限りつなげていくことが大切である。)

本県においては、中学校2年生を対象に「トライやる・ウィーク」を実施している。この事業は、時間的・空間的なゆとりを確保し、地域や自然の中で、生徒が主体的に様々な活動や体験を行うものである。豊かな感性や創造性などを自ら高め、自分なりの生き方を見つけることができるよう支援するなど、「教」より「育」を中心に据えた「心の教育」が確実に推進できていると言える。この実績等を踏まえ、ともすれば知育に偏りがちな教育を是正するとともに、地域に学び、共に生きる心や感謝の心を育み、自律性を高めるなど、「生きる力」の育成を図ることを趣旨として実施している。

エ 高等学校—大人の世界を展望する時期

高校生になると、思春期の混乱から脱しつつ、大人の世界を展望するようになる。自分は大人の世界でどのように生きるのかという課題に出会い、進学や就職といったそれぞれの人

生を左右する重大な岐路に立つ。進学を過度に意識して準備に追われたり、自らの将来について真剣に考えることを放棄して、目の前の楽しさだけを追い求めたりすることに陥る者もいる。大きく力が伸びる高校生の時期においては、体験活動はその視野を広げ、社会の中で責任を持って生きることへと目を開かせていくことが期待される。

***この時期における体験活動を工夫するための観点**

- ・ **自分の力を伸ばす挑戦をする。**(体験活動を通じて、自らの限界に挑戦することにより、将来社会の中で生きて働く力を伸ばせる機会をもつことが期待される。)
- ・ **実際の現場を知り社会の問題について考える。**(社会のあるべき姿に関心をもち、大人になり社会でどう生きるかという課題に出会う時期においては、社会の問題についてそれぞれの実際の現場の状況を踏まえ、考える機会を提供されることが大切である。)
- ・ **人に尽くしたり社会に役立つことに取り組む。**(生きることの意味について思い悩み、自分と他者や社会との関係について考えを深める時期において、人に尽くしたり社会に役立つことのやりがいを感じられる体験をすることが重要である。)
- ・ **自分がかげがえのない存在であることを実感する。**(他者と比較し優劣を競うことではなく、自分は独自に自分であり、自分なりにできることがあると理解できることが大切である。そのために、自分で選び、自分で発想できる時間が用意され、精一杯自分の力を発揮できる体験活動を用意することが望まれる。)

本県においては、地域の特性を生かしながら、高校生が主体的に地域での行事に参加したり、意欲的に活動するなど、学校・家庭・地域との連携を一層推進しながら学校独自の諸活動を積極的に推進し、生徒の夢や大志を培ったり、学校ごとの特色ある文化・スポーツ活動や国際交流等の推進、生徒会活動や部活動等の充実を図るなどして、新しい学校文化の創造を目指す「クリエイティブ21」を実施している。この事業によって、体験活動や心の教育を推進している。

(2) 自然体験活動の意義について

第15期中央教育審議会の第一次答申(平成8年7月)では、問題解決学習と並んで「体験の重視」を繰り返し強調し、豊かな人間性、自ら学び自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成長の糧として体験が押さえられている。つまり、思考や実践の出発点あるいは基盤として体験が必要であるとされている。また、思考や知識を働かせ、実践して、よりよい生活を創り出していくためにも体験が不可欠だとしている。中でも直接体験がなければ、生きる力を育むことは困難であると考えられている。

学校教育において的確なねらいをもち、まとまりのある体験活動を実施することの意義については、具体的には次のようなことが考えられる。

ア 現実の世界や生活などへの興味・関心、意欲の向上

- ① 自然にふれる喜び・感動する心を味わう

- ② 不思議なことに遭遇することにより、研究心を養う
- ③ 文化的な生活のありがたさを知る
- ④ 規則正しい生活習慣や規律・規則を身につける

イ 問題発見や問題解決能力の育成

- ① 直接体験のすばらしさを知り、行動力や問題解決力を養う
- ② 限られた施設や装備で生活することによって、創意工夫する力を養う
- ③ 様々な条件の中で活動することによって、幅広い適応力を身につける
- ④ 自然体験に必要な用具等が適切に使用できる
- ⑤ 自然体験に適切な場所の設定ができる
- ⑥ 自然体験の目的に応じた計画・運営ができる

ウ 教科等の「知」の総合化と実践化

- ① 実施場所の地域の理解を深める
- ② 自然の中で活動する際の知識や技術を習得する
- ③ 自然の中で楽しく活動するための知識や技術を習得する

エ 自己との出会いと成就感、自尊感情の獲得

- ① 努力することで得られた成功体験によって自己発達を促す
- ② 厳しい自然や様々な活動を通して、つらいことに耐える力を身につける
- ③ 生きている喜びを実感することによって、人生に前向きに取り組む態度を養う
- ④ 活動を成し遂げる喜びを知る
- ⑤ 活動を自分たちで行うことにより自立心を高める

オ 社会性や共に生きる力の育成

- ① 集団生活における人間関係（リーダーシップ等）について学ぶ
- ② 様々な活動場面で協力することの大切さを学ぶ
- ③ 共通体験によって参加者間の友情を育む

カ 豊かな人間性や価値観の形成

- ① 自然への愛情を育むことによって心の優しさを養う
- ② 仕事の役割分担などによって責任感を養う
- ③ ものを大切にする力を養う
- ④ 自然の生態について、自然保護や自然愛護の精神を養う
- ⑤ 自然の営みに接することにより、感動する心を養う
- ⑥ 自分や仲間の生命を守ることを最優先にし、生命尊厳の価値観を体得する

キ 基礎的な体力や心身の健康の保持増進

- ① 自然や仲間と接してストレスを解消し、気分のリフレッシュを図る
- ② 活動を通じて体力を高める
- ③ 危険の予測と回避の仕方について学ぶ
- ④ 危険な動植物の見分け方について学ぶ
- ⑤ けがや病気に対する救急法について学ぶ

校種	学 習 内 容 及 び 活 動 内 容
全校種 共通	<p>自然にふれる喜び・感動する心を味わう（ア－①）</p> <p>自然や仲間と接してストレスを解消し、気分のリフレッシュを図る（キ－①）</p> <p>直接体験のすばらしさを知り、行動力や問題解決力を養う（イ－①）</p> <p>危険の予測と回避の仕方について学ぶ（キ－③）</p> <p>自然の営みに接することにより感動する心を養う（カ－⑤）</p> <p>自然体験に必要な用具等が適切に使用できる（イ－④）</p> <p>自然体験に適切な場所の設定ができる（イ－⑤）</p> <p>集団生活における人間関係（リーダーシップ等）について学ぶ（オ－①）</p> <p>規則正しい生活習慣や規律・規則を身につける（ア－④）</p> <p>共通体験によって参加者間の友情を育む（オ－③）</p> <p>活動を通じて体力を高める（キ－②）</p>
小学校 低学年	<p>努力することで得られた成功体験によって自己発達を促す（エ－①）</p> <p>自然への愛情を育むことによって心の優しさを養う（カ－①）</p> <p>危険な動植物の見分け方について学ぶ（キ－④）</p> <p>様々な活動場面で協力することの大切さを学ぶ（オ－②）</p> <p>ものを大切にできる力を養う（カ－③）</p>
小学校 中学年 高学年	<p>厳しい自然や様々な活動を通して、つらいことに耐える力を身につける（エ－②）</p> <p>限られた施設や装備で生活することによって、創意工夫する力を養う（イ－②）</p> <p>けがや病気に対する救急法について学ぶ（キ－⑤）</p> <p>自然の生態について、自然保護や自然愛護の精神を養う（カ－④）</p> <p>不思議なことに遭遇することにより、研究心を養う（ア－②）</p> <p>実施場所の地域の理解を深める（ウ－①）</p> <p>自然の中で活動する際の知識や技術を習得する（ウ－②）</p> <p>自然の中で楽しく活動するための知識や技術を習得する（ウ－③）</p> <p>仕事の役割分担などによって責任感を養う（カ－②）</p> <p>文化的な生活のありがたさを知る（ア－③）</p> <p>活動を成し遂げる喜びを知る（エ－④）</p>
中学校	<p>生きている喜びを実感することによって、人生に前向きに取り組む態度を養う（エ－③）</p> <p>様々な条件の中で活動することによって、幅広い適応力を身につける（イ－③）</p> <p>自分や仲間の生命を守ることを最優先にし、生命尊厳の価値観を体得する（カ－⑥）</p> <p>活動を自分たちで行うことにより自立心を高める（エ－⑤）</p>
高等 学校	<p>自然体験の目的に応じた計画・運営ができる（イ－⑥）</p>

3 宍粟郡一宮町の取組から見た自然体験

(1) 小・中学校連携による「森のゼロエミッション」体験学習

兵庫県宍粟郡一宮町立一宮北中学校

ア 一宮町及び学校・校区の概要について

(ア) 一宮町の概要について

一宮町は、兵庫県の北西部、宍粟郡の北東部を占める。南は山崎町及び安富町、西は波賀町、北は大屋町、生野町、大河内町及び夢前町に隣接している。町政の中心地は安積地区にあり、JR姫路駅から国道29号線を北へ44kmで約1時間、中国自動車道山崎インターチェンジから北へ14.2kmで約20分のところに位置している。人口は11,008人（平成14年9月1日現在）で、町単位として兵庫県の中で最も広い面積（213.84km²）をもつ。人口密度は、51.7人/km²である。町の92%を山林が占め、そのうちの72%が杉、ヒノキなどの人工林である。

(イ) 学校・校区の概要について

本校は、一宮町の北部に位置し、生徒数は、186名（男子100名、女子86名）で、四方山々に囲まれ、揖保川の清流と緑豊かな自然に恵まれた環境にある。校区は下三方小学校、三方小学校、繁盛小学校の3地区からなり、国道・県道沿いに南北約20kmで、支線も多く、広がりのある地域である。地域は、山間部で過疎化傾向である。地場産業として素麺業が盛んである。近年地域おこしとして、福知溪谷の観光化や家原遺跡公園の施設の充実等が進められている。また、町による森を核とした地域の活性化や資源循環型社会づくり施策も進められている。校区の人々の学校に対する愛着は強く、教育活動、学校行事等への協力・支援は積極的である。

(ウ) 生徒の実態について

美しい自然環境に恵まれ、静かなたたずまいの中で健やかに育った生徒は、温厚篤実で、しかも健康的である。清掃や作業など、作業を嫌がらず、生徒会活動や部活動にも積極的に参加する。長距離の通学や冬期積雪時の通学は厳しいものがあるが、頑張って通学している。特に遠距離通学の生徒には冬期の間（12月から3月）、「御形寮」が設備され、寮生活をしている。

イ 「森のゼロエミッション構想」について

一宮町は「兵庫県森のゼロエミッション構想」モデル地域として指定を受け、小・中学校連携による環境学習を実施している。

「ゼロエミッション」とは、生産－流通－廃棄の各段階で、排出物（エミッション）を限りなくゼロに近づけることにより、“循環型社会”を築いていこうというもので、1994年に当時国連大学学長顧問であったグンター・パウリ氏が中心となり、国連大学が提唱している考え方である。

(ア) 一宮町の「森のゼロエミッション」の基本的な取組

- a 「森のゼロエミッション」によるまちづくり
環境保全実施活動、情報発信都市との交流
- b 地域資源循環システムの構築
森林整備・木材の活用、環境適合型農業の推進、環境に配慮した事業活動
- c 再生可能エネルギーの活用
自然エネルギーの有効活用（太陽光、風力、ミニ水力、木質バイオマス等）

(イ) 一宮町の「森のゼロエミッション」の具体的な取組

- a 一宮北中学校校寄宿舎「御形寮」の完成（平成12年12月）
木造建築、太陽光発電最大20kw、環境学習の拠点
- b 町営住宅の完成（平成13年3月）
町内産を中心とした在来工法による木造建築。入居者に配慮した環境にやさしい建物、20戸。
- c 森林と水の地球環境学入門講座の開校（平成12年度～）
- d 森林王国拠点エリアの整備（平成13年度～）
一宮町千町地区をエリアとして森のゼロエミッションと森林環境教育の活動フィールドとして整備。

その他、「森のコンテスト」の開催、「森のゼロエミッション倶楽部」の発足、ゼロエミッション型道路照明の実証、「いちのみや温泉まほろばの湯」のオープン、ミニ水力発電の整備、ISO14001の認証取得、木質バイオマス発電の導入などに取り組んできた。

ウ 「森のゼロエミッション」体験学習について

(ア) 実施概略

- a 目的
 - ・「一宮町森のゼロエミッション構想」に基づき、郷土の森や関連施設を徒歩で巡り、また間伐材の裁断等の林業体験学習をすることによって、資源の循環型社会のあり方を学ぶ。
 - ・小学生と中学生が、地域の人々と共同で体験学習をすることによって、集団の一員として守るべきルールやマナーを身につける。
- b 期日 第1期 平成14年10月 3日(木)
第2期 平成14年10月24日(木)
- c 場所 森のゼロエミッション拠点地区
「一宮町千町(せんちょう)総合作業施設」



d 参加児童・生徒

第1期	下三方小学校5年生	18名 (男子 4名、女子14名)	
	一宮北中学校1年1組	26名 (男子13名、女子13名)	合計44名
第2期	三方小学校4年生	14名 (男子 7名、女子 7名)	
	繁盛小学校4年生	14名 (男子10名、女子 4名)	
	一宮北中学校1年2組	25名 (男子12名、女子13名)	合計53名

e グループ編成

第1期は、5班編成とし、1班の構成人員は、小学生・中学生混成の8~9名とする。

第2期は、6班編成とし、1班の構成人員は、小学生・中学生混成の8~9名とする。

f 引率教諭及び指導員

第1期 下三方小学校教頭、教諭2名 (内養護教諭1名)、一宮北中学校教諭2名
一宮町役場ゼロエミッション室3名、指導員 (地域ボランティア) 2名

第2期 三方小学校教頭、教諭2名 (内養護教諭1名)、繁盛小学校教諭1名
一宮北中学校教頭、教諭2名
一宮町役場ゼロエミッション室3名、指導員 (地域ボランティア) 2名
一宮町森林組合より1名

g 行動日程

9:00 各学校出発

9:30 講話 一宮町役場 森のゼロエミッション推進室係長
指導員紹介
小学校児童代表あいさつ

10:00 作業場へ移動

10:15 作業説明 指導員

10:30 林業体験学習

体験学習後 一宮北中学校生徒代表お礼の言葉

12:00 昼食

12:50 小学生帰校

中学生 ボランティア活動

14:00 中学生帰校



(イ) 児童事後作文

わたしたちは、はんせ小学校の4年生と、一宮北中学校の1年2組の人と、千町に「林業体験学習」に行きました。千町に行ったら、中学生と班を組んで、開こう式をしました。そして、役場の人や森林組合の人に話を聞きました。三方からは、宮本さんがきてくださいました。開こう式が終わったら、山を登りました。登る時に木の枝があったり、木がたおれているのがたくさんあって登りにくかったです。

山を登ると、最初に木の切り方や注意を聞きました。その後、班に分かれて木を切りました。わたしはよっちゃんといっしょの班でした。最初は、たおれる方をくの字に切りました。ノコギリで切るのは大変です。くの字に切るとき最後は、役場や森林組合の人がしてくださいました。

その後は、くの字に切った反対側のところを追い切りしました。わたしが切る番になったときは、まだ、少ししか切れてなかったです。わたしはノコギリで切ったけれど、大変だったので少ししか切れませんでした。その後、何人が切っていると、上の方が少しゆれだしました。それから、また、何人が切っていると、やっと切れました。でも、近くの木にひっかかってしまいました。だから、「チェンソー」で切ってもらいました。すると、木がたおれました。

その後は、たおれた木を切ってもって帰ることになりました。わたしは、木の少し細くなっているぐらいのところを切りました。その後、先生が太いところを切ったのを何まいかもっていたので、1まいもらいました。

今日、木を切ったところは、どの木を切ってもいいのではありませんでした。それは、木が大きくなると太陽の光があたらなくなって、大きくならないので、光があたるように考えて、木を切らないといけなかったからです。

それから、山をおりました。下には木でつくったところがあって、そこでお弁当を食べました。お弁当が終わったら、休けいでした。その間、私はみんなともってかえる木の皮をむきました。その後、お礼を言って、小学生は帰りました。

今日は、いろんなことが分かってよかったです。

エ 御形寮を利用した体験学習

(ア) 御形寮について

御形寮は、旧3中学校（三方、下三方、繁盛）統合の条件として、冬期通学の困難な生徒のために、昭和44年12月に総面積519㎡、収容人員70名で建設された。その後、老朽化が目立ち、地元自治会・PTAを中心とした寄宿舎の改築の要望が実り、平成12年12月に、総面積609㎡、収容人員40名の新しい寄宿舎が完成した。新寄宿舎は、1・2階ともに談話室、寮室予備室を備えて、入寮生徒がゆとりを持って生活ができるように設計されている。また、一宮町が取り組んでいる「森のゼロエミッション」事業の一環として、木造建築に太陽光発電システムが導入されている。これは、寄宿舎の傾斜屋根を利用して太陽の光エネルギーを電気エネルギーに返還するもので、最大20kwの電力を供給することができる。寄宿舎の負荷電力として使用し、余剰電力が生じた場合は、電力会社に売電するシステムである。太陽光発電の導入は、環境問題に対する生きた教材となっている。

(イ) 家原塾宿泊体験学習

a 目 的

- ・共同生活をする中で、友だちとの友情を深め、また共同生活をする上で、集団の一員として守るべきルールやマナーを身につける。
- ・一日の流れの中で、家庭での過ごし方や、家庭学習の習慣を正しく身につける。
- ・家原塾自体が自然にやさしく、太陽光発電で寮の電気をまかなっていることを知り、太陽光発電についての理解を深める。

b 期 日 平成14年6月3日(月)～7日(金)

1年1組…6月3日(月)～6月5日(水) 2泊3日

1年2組…6月5日(水)～6月7日(金) 2泊3日

c 宿泊場所 家原塾 (一宮北中学校内)

d 参加生徒及び担当教諭

参加生徒 第1学年 51名 (男子25名、女子26名)

6月3日～6月5日 1組 男子13名 女子13名 計26名 教諭 3名

6月5日～6月7日 2組 男子12名 女子13名 計25名 教諭 3名

e 行動日程

月 日	時 間	活 動 内 容
6月3日(月)	7:30～ 8:00	<ul style="list-style-type: none"> ・1年1組カバンを各部屋に持っていく。 ・学校へ登校、普通授業、部活動 ・1年1組家原塾へ入塾、清掃、荷物の整理 ・夕食、空いた時間は自由時間 ・学習時間 ・入浴、自由時間 ・点呼 ・消灯、就寝
	8:00～17:45	
	18:00～18:30	
	18:30～19:30	
	19:30～21:30	
	21:30～22:30	
	22:30～	
	22:35	
6月4日(火)	6:00～ 7:00	<ul style="list-style-type: none"> ・起床、点呼、洗面、登校準備 ・朝食、登校 ・朝練習 ・学級朝会 ・バスへ移動 ・名水めぐり (北中校区内をバスで見学) ・給食 ・感想文記入 ・学級会活動 ※1年2組は通常授業 ・部活動 ・清掃、荷物の整理 ・夕食、空いた時間は自由時間 ・学習時間 ・入浴、自由時間 ・点呼 ・消灯、就寝
	7:00～ 7:15	
	7:15～ 8:00	
	8:15～ 8:25	
	8:30～	
	9:00～12:00	
	12:20～13:10	
	13:10～14:00	
	14:10～15:00	
	15:40～17:45	
	18:00～18:30	
	18:30～19:30	
	19:30～21:30	
21:30～22:30		
22:30～		
22:35		
6月5日(水)	6:00～ 7:00	<ul style="list-style-type: none"> ・起床、点呼、洗面、荷物の整理と片付け、登校準備 ・朝食、登校 ・朝練習 ・学級朝会 ・1組、2組とも通常授業 ・1年生全員で学級対抗球技大会 ・部活動 ・1年1組は下校
	7:00～ 7:15	
	7:15～ 8:00	
	8:15～ 8:25	
	8:30～12:20	
	13:10～15:00	
	15:40～17:45	
	18:00～	
	18:00～	

(ウ) 御形寮多目的活用事業（一宮町教育委員会主催による体験学習）

a 趣旨

平成12年度に建設した御形寮の休館期間（4月から11月）を利用し、小・中学生が親元から離れ、異年齢での共同生活や地域での体験活動を行うことによって、自主・自立の精神を養うとともに、異なった価値観にふれることによって心身ともに調和のとれた児童・生徒の育成を図る。

b 事業の概要

(a)ミニ「自然学校」

小学校4年生対象 町内5小学校 2泊3日

学習の場を教室から豊かな自然の中に移して、みんな仲良く力を合わせて生活することにより、お互いの信頼関係を深め協力する心、最後までやり抜く心や体を育てることを目的とする。

(b)異年齢交遊塾

小学校4年生から中学校3年生対象 町内5小学校、2中学校

8月3日(土)から8月11日(日) 8泊9日 28名（男子10名、女子18名）参加

- ・ 普段体験することの少ない異年齢での集団生活をする。
- ・ 学校生活では気づかない友だちの良さを見つける。
- ・ 地域の方々に協力していただくとともに交流を深める。

(c)通学合宿

小学校4年生から中学校3年生対象 町内小学校、2中学校

10月19日(土)から10月26日(土) 7泊8日 40名（男子18名、女子22名）参加

新しい仲間と共同生活を体験することにより、望ましい人間関係の育成や自主自立の精神を養うことを目的とする。

オ 今後の取組について

この体験学習は、「総合的な学習の時間」に位置づけた、小学校と連携した異年齢集団による環境学習活動である。企画した当初は、けがをした時の対処の仕方、ボランティア指導員の確保、輸送方法、トイレの確保など様々な不安や戸惑いがあったが、児童・生徒たちが一宮町の自然にふれ、森を取り巻く現状や地域産材の活用方法を身をもって経験したことには大きな意義があった。また、中学生が小学生を指導し、小学生の補助をするなど協同意識が芽生えたのも大きな成果である。今後は、高等学校とも交流し、来年度は小・中・高等学校合同の体験学習を実施したいと考えている。また、一宮町ゼロエミッション室との連携を深め、教科学習との関連を具体化し、さらに充実した体験学習へと発展させていきたいと考えている。

(2) 小・中・高等学校合同クリーン作戦

兵庫県立伊和高等学校

ア 目的

一宮町立の各小・中学校及び県立伊和高等学校では、平成14年度より文部科学省指定の「豊かな体験活動推進事業」を推進している。この活動では小・中・高等学校の連携を図った体験活動の実施を目的としており、昨年度より様々な活動を行っている。今年度は小・中・高等学校と地域の自治会が連携してクリーン作戦を行った。これは、一宮町が行っている「森のゼロエミッション」活動の趣旨にも合致したものである。

イ 実施報告

(ア) 事前準備

- ・主に一宮町教育委員会及び各小・中学校が指揮をとり、一宮町全ての自治会長にクリーン作戦の趣旨を知らせた。
- ・一宮町の小・中学生と本校生徒の自治会ごとの名簿を作成し、各自治会長に配布した。各自治会にクリーン作戦の指揮をとっていただくよう依頼した。

(イ) 事前指導（伊和高等学校の実施例）

- ・6月30日(月)の全校集会において今回の事業の趣旨を説明し、参加するよう生徒に連絡した。
- ・7月17日に行われた学年集会において各生徒及び保護者に対しての文書を配布し、生徒に参加を促した。
- ・終業式の校長訓話において本活動の意義を再度説明した。

(ウ) 実施方法

ア 実施日時

- ・平成15年8月17日(日) 9時より

イ 実施内容

- ・自治会ごとに地域住民、小・中・高等学校児童・生徒、小・中・高等学校職員が公民館に集合する。
- ・自治会長の指示によりクリーン作戦を行う。
- ・クリーン作戦の内容については各自治体により様々である。地域のゴミ拾いが主なものであったが、公民館の清掃、地域のカーブミラー拭き、公園の除草作業などの活動を行った地域もあった。

(エ) 実施報告

- a 参加生徒
- | | | | | | |
|-----------------|-------|-------|-------|--------|----------|
| ・一宮町全小学校児童 | | | | | |
| 染河内小学校 | 繁盛小学校 | 神戸小学校 | 三方小学校 | 下三方小学校 | |
| | | | | | 計683名 |
| ・一宮町全中学校生徒 | | | | | 452名 |
| ・一宮町在住の伊和高等学校生徒 | | | | | 131名 |
| | | | | | 総計1,266名 |

b 生徒の反応

小・中学校の児童・生徒の場合、このような行事には慣れ親しんでいるため、全ての

子どもたちが参加していた。高等学校の生徒の場合、これまでこのような行事の経験が全くなかったために参加者が得られるか危惧していたが、ほぼ全ての生徒の参加を得た。これは事前指導の効果もあったのだろうが、この地域の生徒が小・中学校のときからこのような活動に慣れ親しんでいた結果であろう。生徒は自主的に、真剣な態度で活動していた。生徒の表情はとてもよく、熱心に取り組んでいることが伝わってきた。活動終了後には生徒が地域住民の方にお茶を配るなど、地域の一員としてとけこんでいる姿を見かけることができた。

ウ 中学校生徒の感想文

今年から始まったクリーン作戦。小、中、高の合同だった。朝の9時から公民館に集まって各班に別れてゴミ拾いを始めた。小雨が降っていたので、とてもやりづらかった。雨がいきなり強くなってきたので、皆カッパを着て行った。道路も一面水びたしで、ゴミを拾うのが大変だった。燃えるゴミ、燃えないゴミ、アルミ缶、ペットボトル…。色々な種類に分別した。ジュースの缶や、ペットボトル、お菓子の袋が多いと思っていたけど、実際は、タバコやビール缶、酒のビン等のまさに大人のゴミだった。

特にタバコの吸いがらがすごかった。よく車から捨てている人を見るけれど、車に灰皿がついているのにわざわざ捨てなくてもいいと思う。

ゴミというものは少しずつたまるけれど、気づいたときにはものすごいことになっている。一日一日のまさに積み重ねだと思う。

自然環境の悪化が目立つ中、こういった普通の人が出来ることをしていかないと、ダメだと思う。このクリーン作戦に参加して、このようなことが感じ取れただけでも良かったと思う。地球の人々が、少しでもこんなことを考えてくれたのなら、地球の自然には、明るい未来が見えるのではないかと僕は思う。

自分が住んでいる所をキレイにすることは私たち住人のすることである。でも、自分がもう必要ないからといってゴミをどこにでも捨て、何とも思わないような人が捨てた物を小さな子どもたちが拾っていることもおかしいことである。だから、自分の物には最後まで責任を持って捨ててほしいなと思った。

拾ったゴミの量はかなり多かったと思う。今度クリーン作戦をしたときは、今の量よりはもっと減っていてほしい。

エ まとめ

「森のゼロエミッション」の自然体験の一環として行ったクリーン作戦では、ゴミを拾うことによって、一宮町の豊かな自然、森林を大切にする姿勢を養うことができた。また、多くの生徒が社会体験としての一面を感じることができ、さらには地域住民との共同作業の体験において、地域の一員としての自覚を養うこともできた。一宮町地域の高校生は都市部の生徒と比較して、このような取組を数多く体験しており、作業への積極性や地域住民との関わりが良好である。

しかし、少しずつ地域のつながりは減少傾向にあることは否めない。高校生がこれまでこのような活動に学生として全く参加していなかったことを考えると、意義のある活動であった。

(3) 「家原塾」を活用した体験活動

兵庫県宍粟郡一宮町立下三方小学校

ア 趣旨

子どもたちが親元から離れ、異年齢での共同生活や地域での体験活動をすることによって、自主・自立の精神を養うとともに、異なった価値観にふれることによって心身ともに調和のとれた児童・生徒の育成を図る。

イ 事業の概要（平成14年度）

(ア) ミニ「自然学校」	小学校4年生対象	町内5小学校	120人参加	2泊3日
(イ) お泊り保育	幼児	一宮ひかり保育所	16人参加	1泊2日
(ウ) 合宿訓練	(一宮北中学校のレポートの中で詳細記述)			
(エ) 異年齢交遊塾	小学校4年生から中学3年生対象		28名参加	8泊9日
(オ) 通学合宿	小学校4年生から中学3年生対象		40名参加	7泊8日

ウ 事業内容

(ア) ミニ「自然学校」

学習の場を教室から豊かな自然の中に移して、みんな仲良く力を合わせて生活することによりお互いの信頼関係を深め、協力する心、最後までやりぬく心や体を育てることを目的とする。

各学校の主な実施内容（2泊3日）

神戸小学校	1日目 2日目 3日目	家原遺跡公園、まほろばの湯入浴、太陽光発電システムの学習 家原遺跡公園で竹細工、木工細工、歴史資料館見学 クリーン作戦
染河内小学校	1日目 2日目 3日目	消防署と警察署、黒太郎工場の見学、サンパティオ図書館、星座の観察 学習時間、家原遺跡公園、まほろばの湯入浴と歴史資料館見学 学習時間
下三方小学校	1日目 2日目 3日目	太陽光発電システムの学習、黒太郎工場の見学、家原遺跡公園資料館 一宮町の名水めぐり、東公文ホタルの観察 千町ゼロエミッション拠点エリア見学
三方小学校	1日目 2日目 3日目	家原遺跡公園資料館、黒太郎工場の見学、サンパティオ図書館 宍粟環境美化センター見学、太陽光発電システムの学習 一宮町の名水めぐり
繁盛小学校	1日目 2日目 3日目	黒太郎工場の見学、星の観察 ハイキング(御形神社、天神さん、不動滝、農村舞台)歴史資料館見学 家原遺跡公園(ねんど細工)

(イ) 下三方小学校の實踐

a ミニ「自然学校」の趣旨

現代社会は、人々の努力により物質的には豊かになってきた反面、心の貧しさに起因し様々な問題が多発し『心の教育』のあり方が問われている。人間関係の希薄化や大自然の中での体験不足・マスメディアの影響など、子どもたちをとりまく環境も大きく変化し、人間相互の心のふれあいや大自然の中での感動体験などが不足している。

そこで、学習の場を教室から豊かな自然の中に移して、子どもたちが人とのふれあいや地域・自然とのふれあいを深め、体験を通して思いやりの心やたくましく生きる力などを養うために、一宮町では小学校4年生を対象に自然学校を実施している。

b ミニ「自然学校」のねらい

☆一宮町の自然とのふれあいや地域社会での活動を通して、学校ではできない体験をしよう

- ・大自然の中で五感を使って様々な体験をし、自然に対する関心を高める。
- ・地域社会の自然を生かした生活や文化を体験し、生きた学習をする。

☆「御形寮」での集団宿泊生活を通して、みんな仲良く協力し、心の交流を深めよう

- ・家庭を離れた共同生活を通して、自主・自立の心を育てる。
- ・仕事の役割分担を通して、責任の大切さを学び連帯感を深める。

☆大自然の中での活発な体験を通して、楽しく心と体を鍛えよう

- ・自分で計画したことをやり遂げることで、自主性・自発性を喚起する。
- ・自分自身の健康や安全についての意識を高め、仲間と楽しく過ごす。

c 実施時期

平成15年 6月18日(水)～20日(金) 2泊3日

d 場 所

一宮町立一宮北中学校寄宿舎「御形寮」

e 参加児童

下三方小学校 4年生 22名 (男子13名、女子9名)

f 引率教職員

校長 教頭 4年担任

g 利用交通機関

一宮町のマイクロバス

h 日程表 6月18日(水)~20日(金)

時刻	1日目 (6/18・水)	2日目 (6/19・木)	3日目 (6/20・金)
	<ul style="list-style-type: none"> ・学校出発 ・入塾式 ・森の体験学習 (千町ゼロエミッション拠点) 	<ul style="list-style-type: none"> ・森のゼロエミッションで学習してきたことのまとめ ・自炊にチャレンジ ・ホテルの観察 	<ul style="list-style-type: none"> ・クリーン作戦 ・ミニ自然学校のまとめ ・退塾式 ・帰校
6:00		起床・洗顔・掃除・準備	起床・洗顔・掃除・準備
7:30	平常通り登校 健康観察(教室)	朝食 健康チェック・日程説明	朝食 健康チェック・日程説明
8:00	学校出発		
9:00	到着 入塾式 オリエンテーション	森のゼロエミッション 見学のまとめ	ミニ自然学校のまとめ
10:00	太陽光発電について		クリーン作戦
11:00			
12:00	昼食(家原塾で給食)	昼食(家原塾で給食)	昼食(家原塾で給食)
13:00	千町へ出発 森の体験学習	自炊にチャレンジ ・夕食の計画	退塾式 塾出発
14:00	森のゼロエミッション 推進室(世良 智先生)	・買い物	学校到着
15:00		サンパティオまで	下校
16:00		・準備	
17:00	帰塾 夕食	夕食	
18:00	ミーティング 入浴	ミーティング 入浴	
19:00	学習タイム	学習タイム ホテルの観察	
20:00			
21:00	班長会議 消灯・就寝	班長会議 消灯・就寝	

(ウ) お泊まり保育

ひかり幼稚園 (1泊2日)	ライオン組(4、5歳) キャンプファイヤー、家原遺跡公園ハイキングと虫取り
------------------	--

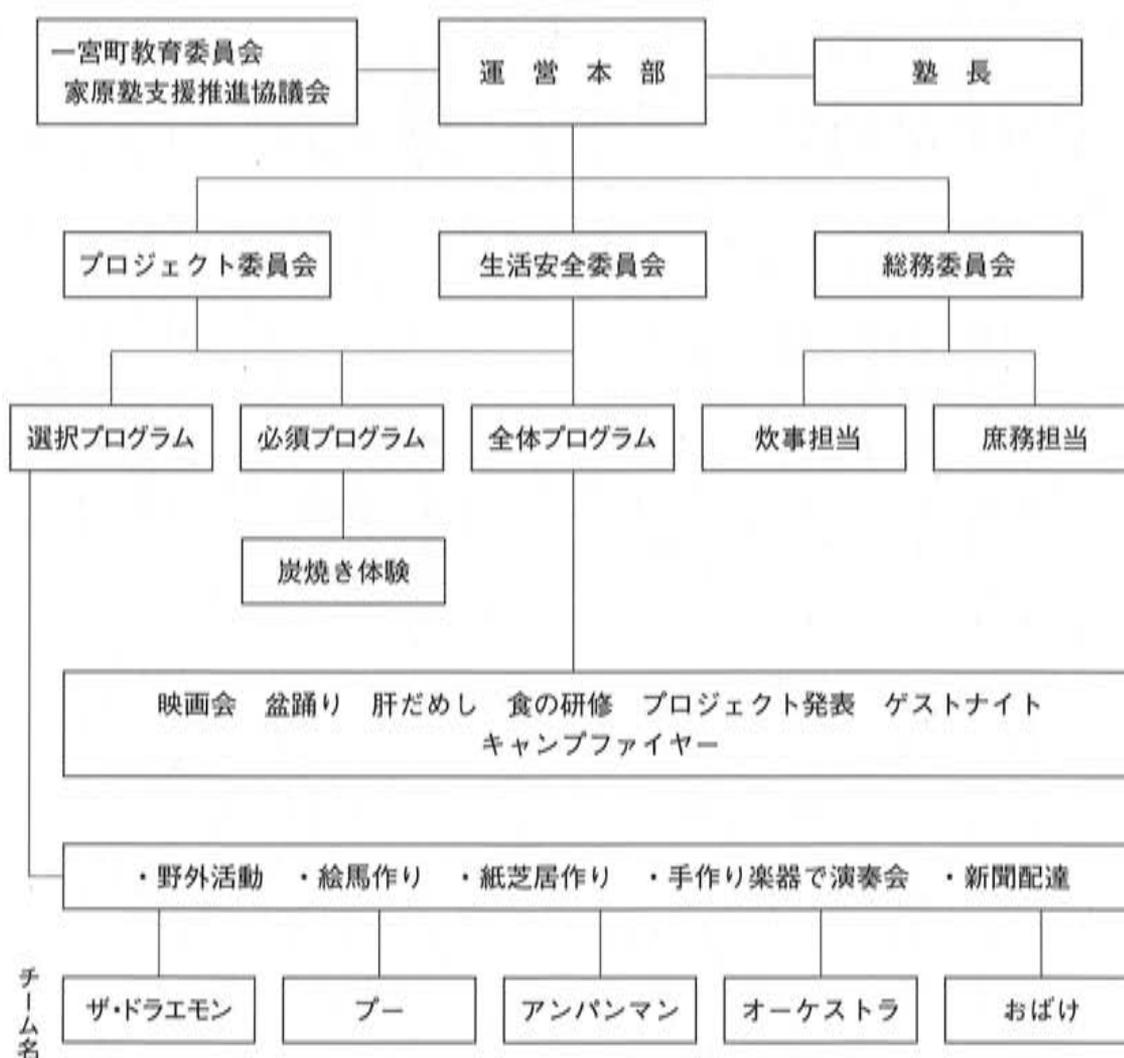
(エ) 異年齢交遊塾

- ・ 普段体験することの少ない異年齢の集団生活をする。
- ・ 学校生活だけでは気づかない友だちの良さを見つける。
- ・ 地域の方の協力をいただくとともに交流を深める。

※参加状況

	小4年生	小5年生	小6年生	中1年生	中2年生	中3年生	合計(人)
女子	3	10	3	2			18
男子	2		6	2			10
合計	5	10	9	4			28

※組織と運営



※日 程

	チーム名	午 前	午 後	夜
1日目			開校式 オリエンテーション	歓迎の営火 全体会議 スタッフ会議
2日目	ザ・ドラエモン ブー アンパンマン オーケストラ おばけ	サイクリング 班旗作り 御形神社 御形神社・卓球	水泳 家原遺跡公園 絵馬作り 班旗作り キーホルダー作り	映画会 全体会議 スタッフ会議
3日目	ザ・ドラエモン ブー アンパンマン オーケストラ おばけ	炭焼き 不動滝へハイキング 買い物・バドミントン 水泳 キーホルダー作り サンパティオ図書館	班旗作り・水泳 水泳 絵馬作り 水泳 まほろばの湯	全体会議 スタッフ会議
4日目	ザ・ドラエモン ブー アンパンマン オーケストラ おばけ	炭出し 炭焼き 炭焼き・絵馬作り インターネット クッキー作り材料買出 紙芝居作り	食料事務所に よる食の研修会 クワガタ調べ アスレチック 絵馬作り 歌の練習 歌の練習	全体会議 スタッフ会議
5日目	ザ・ドラエモン ブー アンパンマン オーケストラ おばけ	サンパティオ図書館 歌の練習 学習の時間 歌の時間 歌の時間	合同ドッチボール 合同ドッチボール 合同ドッチボール クッキー作り・歌練習 合同ドッチボール	盆踊り 全体会議 スタッフ会議
6日目	ザ・ドラエモン ブー アンパンマン オーケストラ おばけ	サイクリング 炭焼き・図書館 サイクリング 炭焼き 炭焼き	魚のつかみ取り クワガタ取り バレー・アスレ 資料館 歌の練習 買い物	全体会議 スタッフ会議
7日目	ザ・ドラエモン ブー アンパンマン オーケストラ おばけ	サイクリング テレビ塔へハイキング 御形神社 炭出し 炭出し	サイクリング 水泳 水泳 まどか園で発表 まどか園で発表	肝だめし 全体会議 スタッフ会議
8日目	ザ・ドラエモン ブー アンパンマン オーケストラ おばけ	水泳 プロジェクト準備 絵馬作り 卓球 プリン作り	プロジェクト準備 プロジェクト準備 絵馬作り ストーンペイント プロジェクト準備	プロジェクト キャンプファイヤー ゲストナイト 全体会議 スタッフ会議
9日目	ザ・ドラエモン ブー アンパンマン オーケストラ おばけ	サンパティオ図書館 後片づけ 後片づけ 絵馬奉納 ストーンペイント シャーベット作り 後片づけ	閉校式	

※異年齢交遊塾を振り返って（アンケートより）

（保護者の意見）

- ・持ち帰った竹炭を、ご飯を炊くときや冷蔵庫に使用しています。
- ・家では何もしない子が、塾では全部自分でしなくてはならなかったことが、とてもしんどかったようです。でも、目玉焼きを焼くのを覚えて自分でよく焼いています。
- ・大学生のお姉さんたちと交流できたことがとても楽しかったようです。帰ってきた時は、少し大人びたような気がしました。
- ・もっと多くの子どもたちに参加してもらえたら。
- ・食べ物の好き嫌いが激しいため、友だちの家に泊まることもためらう子でしたが、自分から行くと決めたので、喜んで見送りました。帰ってくるなり、「あと1から2ヶ月家原におりたかったわ。」でした。理由を聞くと、家原塾の毎日のスケジュールがいっぱいで、退屈する間がなかったとのことでした。
- ・帰宅後、次から次にと9日間のことをいろいろ話してくれたので、毎日の様子がとてもよく分かりました。その中で、全日程を班別で計画して行動するということが大変だったようですが、それが子どもたちの大きな力になったように思います。

（家原塾に参加した児童・生徒の意見）

- ・今まで行ったことのない所へ行き、いっぱい友だちやリーダーと仲良くなれた。悲しいこと、楽しいこと、うれしいこと、全てが大事な思い出。
- ・家庭では経験できないことを経験した。異年齢の集団は、学校生活では経験できない。家庭に帰ったら、少し大人っぽく、頼りになる存在になったような気がする。
- ・8泊9日は長すぎだと思う。後半で、一人になってしまう子もいた。班は行動別に分かれたけれど、人数の多いところは、今一つまとまりが難しい。

（オ）通学合宿

新しい仲間と共同生活を体験することにより、望ましい人間関係の育成や自主自立の精神を養うことを目的とする。

- ・各学校へは、通学バスを利用する。
- ・夜は、班行動・星の観察・学習・音楽の夕べ・夜間ハイキング・お別れ式等の行事がある。
- ・学校が休みの日は、囲碁ボール大会や大河内町内のエル・ビレッジ見学を実施。

エ 支援協力体制（団体）

一宮町連合PTA、一宮町子ども会育成連絡協議会、一宮町小中学校長会、一宮町連合自治会、ボーイスカウト宍粟第3団、一宮町婦人会、一宮町体育協会、一宮町文化協会、一宮町老人クラブ連合会、一宮町ボランティア連絡協議会、三方町自治会、県立伊和高等学校

オ 事業の成果と課題

(成果)

- ・団体行動をすることで、他人の気持ちを考えて行動する大切さを学んだ。
- ・異年齢集団の中で、自分の意見、自分の行動を積極的に表現できるようになった。
- ・長い共同生活で、洗濯や掃除など自分でしなければならないという自覚が芽生えた。
- ・子どもたちが企画したプログラムをやりぬくために、自立心が芽生え、またチームワークの大切さや楽しさを学んだ。
- ・長期間家族から離れ、食事、洗濯、掃除をすることで、家族への感謝の気持ちが表れた。
- ・目標達成へのやる気の大切さを知り、達成感を味わうことができた。
- ・やりぬくためにあきらめないことを学んだ。
- ・健康と安全への大切さを学んだ。

(課題)

- ・子どもたちの安全性を確保するためのスタッフの確保と事前研修によるスタッフ教育の徹底が重要である。
- ・班のプロジェクトを企画するにあっては、日程・運営・安全対策など計画性に配慮させる必要がある。
- ・子どもたちに任せて班の構成をしたが、知っている子ども同士になったので、公平に振り分け、多くの子と友だちになり、同じ時間を共有することで協調性を学ばせることが大切である。
- ・指導者とスタッフ等の連絡を密にする必要がある。
- ・小学生と中学生との参加であるため、学習時間に差が生じ、活動に無理が生じるケースがあったので、計画の練り直しも大切なことである。
- ・友だちをつくることに神経質になりすぎる子どもがいたので、緊張感や雰囲気や和ませるような配慮や活動の挿入を考えていく必要がある。
- ・異年齢という縦の関係を十分生かしたプログラム作りが大切である。

4 県下高等学校での野外活動の実態

(1) 実施状況

県下の高等学校では、宿泊を伴う野外活動を実施した学校は、約65%にのぼる（全日制）。学年としては1年生での実施が多く、時期的には4月から5月の実施が大半を占める。実施場所としては、鉢伏高原、嬉野台生涯教育センター、淡路青年の家、大山・氷ノ山、広島県みろくの里等を利用している。

(2) 実施内容

活動については、1年生のオリエンテーションを兼ねた野外活動として取り組んでいる場合が多い。内容についても、集団訓練的なもの、高校生活に慣れるためのガイダンス的な内容に

重点がおかれ、その中の一コマに野外炊飯、登山、キャンプファイヤーを実施している傾向が見られる。また、耐寒登山、マリン実習、体験ダイビングなどを実施している学校もある。

(3) 野外活動の授業

総合学科や体育科を置く学校の中には、「野外活動」を選択科目として取り入れるなど、体育の授業に位置づけて取り組んでいる学校がある。実施内容については、飯ごう炊飯、キャンプファイヤー、イニシアティブゲーム等の活動の他に、救急法、心肺蘇生法、ピバーク技術等を取り入れるなど、危機管理的な面での授業内容も見られる。また、実習だけの受け身的な活動で終わるのではなく、キャンプファイヤーや野外活動を自らが企画していく内容も実施されている。

野外活動の知識・技能を習得するとともに、厳しい自然の中での行動の仕方を身につけ、自然に親しむことができる資質や能力を育てることを主なねらいとしている。

(4) 事 例

ア 県立神戸甲北高等学校

教 科 等 保健体育・野外活動 2単位

授業内容

登山、野外炊飯、集団訓練、救助実習、ペットボトルによるイカダづくり、手旗信号、火おこし道具の製作・竹馬の製作、アルミ缶による飯ごう炊飯、焼き板、オリエンテーリング・ネイチャーリングゲーム等

イ 県立有馬高等学校

教 科 等 保健体育・野外活動 2単位

授業内容

自然観察（植物観察、バードウォッチング、植物採取）
ネイチャークラフト（はし、スプーン作り・竹とんぼ作り）
野外炊事（野外炊事の楽しみ方、実施上の注意事項とマナー、かまどづくり）
スポーツフィッシング（歴史、技術と歴史、注意点とマナー、実習）
オリエンテーリング（歴史、必要な知識と技能、注意点とマナー、実習）
キャンプ（歴史、種類と形態、必要な知識と技術）
キャンプファイヤー（企画と運営、ファイヤーの組み方、実習）

ウ 県立社高等学校

教 科 等 保健体育・野外活動 2単位

授業内容

野外活動の基礎知識

- ・ 野外活動の概要
- ・ 野外活動の計画と準備、自然界における危険と安全、野外活動におけるルール・事故・責任

- ・救急法、野外活動と気象
- 野外活動を楽しむための知識と技術
- ・テント設営とピバーク技術、野外炊事、キャンプファイヤー、野外ゲーム、ロープワーク
 - ・イニシアティブゲーム、ネイチャーゲーム、コンパスワーク
- 活動種目の実際
- オリエンテーリング、サイクリング、スキー、雪上ゲーム、ネイチャークラフト

5 高校生リーダーと小学生の自然体験プログラム

(1) 事業内容

主 催 財団法人兵庫県青少年本部

事業名 「青少年活動（野外活動）初級リーダー養成研修」

募集内容 「いつもとちがう夏休み、新しい自分を見つける夏」

みどり豊かな自然の中で、いつもの生活とちがう体験をしてみませんか。子どもたちのお兄さん・お姉さんとしてキャンプを楽しんでみませんか。

(2) 事業概要

本事業は、平成12年度に実施した青少年育成事業（活動）調査の結果をもとに、高校生世代の社会参加を促すために翌年度から始められた事業で、当初、受験やクラブ活動等の影響で参加者が集まりにくいのではと心配していたが、学校外での体験活動が注目を浴びる中、定員を超える応募者が集まるようになってきた。この3年間でのべ93名が修了し、その中から次代の青少年指導者が育ちつつある。

本事業は、下記のとおり三つの活動内容で実施された。

事前研修会では、“ひょうご少年少女キャンプ大会”でサポート隊員となる高校生が集まり（県内の高校生30名を募集）事業の目的、野外活動の基本的な知識・技能の習得、グループワーク実習、児童理解等の研修が行われた。自分たちが実際にキャンプ活動を体験することにより、どのような支援を子どもたちにしていけばよいのかを予め知る機会ともなっている。また、サポート隊員同士のチームワークを深める場ともなっていた。

本キャンプでは、小学生のお兄さん・お姉さん役となり、キャンプをサポートしていくリーダーとして、様々な活動の指導・支援者として活躍した。小学生は、県内の4年生から6年生、50名が参加した。

事後研修会では、サポート隊員の高校生が本キャンプの振り返りを行い、成果と課題を検証した。

事前研修会	野外活動の基本的な知識及び技能の習得等	1泊2日（7月）
本キャンプ	「ひょうご少年少女キャンプ大会」でのリーダーとして活躍	2泊3日（8月）
事後研修会	本キャンプの振り返り	1日（8月）

*本キャンプは(財)兵庫県青少年本部が小学生を対象として実施する“ひょうご少年少女キャンプ大会”と合同実施

(3) 本事業の考察

ア 子どもの目線にたったサポート

子どもたちを前にして「どのように子どもに接したらよいのか」。サポート隊員（高校生）の大きな課題となった。事前研修会でも「子ども理解」という内容で研修を深めてはいるが、「次々と質問してくる子ども」「仲間に入れたい子ども、なかなか心を開いてくれない子」最初のうちは大変戸惑う姿が見られた。しかし、ゲームをしたり、共に汗を流し活動をしていくうちに徐々にお互いにうちとけていく姿が見られた。子どもにとっては、お兄さん、お姉さんの存在として目に映ったようである。

イ 異年齢での取組の成果

高校生と小学生という年齢差が最高8年から4年程度離れている。

高校生にとっては、初めて出会う小学生を目の前にして、リーダーとしての自覚と責任ある行動を要求される2泊3日であった。事前研修会のように、学年が近い者同士の野外活動であれば、それぞれが役割分担を行い自分自身も楽しんで活動できる余裕もあった。しかし、本キャンプでは常に班の子どものことを考え、活動を準備し実施していかなければならない。このような立場におかれた時、下記のような行動が見られた。

- ・活動を実施していく中で、自らが責任をもち判断し行動していく。
- ・子どもたちの話を子どもの目線にたち聞いたり、グループに入れたい子に優しく接したりリーダーとして「思いやり」のある言動がとれた。
- ・子どもに口先だけで伝えても、子どもは動いてはくれない現状を目の当たりにした。子どもと共に汗を流し、子どもの話に耳を傾け、共に行動する姿勢が子どもたちを動かしていく原動力となることを感じたリーダーが多い。
- ・いままで体験してきたことを生かすよい機会となるとともに、子どもとの交流を深める中で、自分自身のよさに気づいたり自己の成長につながっていく機会ともなった。
- ・子どもたちを常にサポートするという立場におかれることにより、「思いやり」のある言動で接することができた。「責任」のある行動で手本を示しリーダーとして活動をサポートしていく場面が見られた。このような体験を行うことにより、自分自身のよさに気づいたり自己の成長に気づく機会とも成り得ている。

ウ 共に感動する喜び

感想の中に「寝る前には雲の間から見える月を子どもたちに見せてあげたら歓声をあげて喜んでいた。」何気ない一コマであるが、子どもたちと共に過ごし感動を共にすることで、心の交流の深まりが感じられた。

最終日「ありがとう。この班でよかった。」と小学生が感想を書ってくれたこと、子どもたちのすばらしい笑顔に出会えたこと、寄せ書きをしているときにジンときたこと等、2泊3日のキャンプで新しい自分を見つける体験ができた。

(4) 高校生（サポート隊員の感想から）

- ・私が目指したのは家族のようなグループです。班のみんなが仲良くなってほしいという思いがありました。うまく輪に入れない子がいれば声をかけていきました。
- ・リーダー同士のチームワークが難しいと感じました。
- ・他の班の子どもにも話しかけることをがんばってやってみました。もともと人見知りする私にとってはかなりの挑戦でしたが「自分がリーダーや」という自覚のもと積極的に話しかけることができうれしかったです。
- ・この3日間のキャンプに参加して、高校生として責任のある行動をとらなければいけないということを小学生と行動を共にすることで改めて気づかされました。
- ・いつも文句ばかり言うてくる子が「ありがとう。この班でよかった。」と言ってくれて本当にうれしかった。
- ・子どもたちの心のつかみ方というものが少し分かったような気がしています。
- ・子どもたちのたくさんの笑顔に出会えて大変うれしかった。
- ・心を開いてくれない子が少しずつ話してくれるようになってきたことが大変うれしかった。
- ・子どもたちがふれ合ってくれるのを待っているから、私たちの方から積極的にふれ合っていかなければならないと思った。また、許せる時と厳しくしていく時の判断が少しずつできるようになった。
- ・私は将来保育士になりたいと思っていましたが、今回のキャンプに参加してやっぱり保育士になりたいという決意を新たにしました。

6 県内民間団体の取組

(1) 事業紹介

本団体「生涯学習サポート兵庫」は、特定非営利活動法人の指定をうけ、下記の事業を実施している。

- ア 地域団体への活動支援事業
- イ 青少年指導者の養成及び研修に関する事業
- ウ 機関紙などを使った生涯学習の普及事業

各種団体、学校、企業などの生涯学習行事の委託運営や出張指導を行っている。「あそべない子をあそべる子に、あそべない大人をあそべる大人に」が本団体のテーマでもある。

(2) 活動支援事業

ア 子どもたちには

野外料理、ハンドクラフト、室内ゲーム、キャンプファイヤー、ネイチャーゲーム、ハイキング、チャレンジウォーク、ポイントハイク、自然観察、ニュースポーツ、環境教育プログラム、おもしろ雷遊び、スノートレッキング、スキー教室

イ 親子には

レクリエーションゲーム風親子ふれあい体操、父と子のふれあいキャンプ、親子クッキング、ハイキング、自然観察、野外料理、ハンドクラフト、スノートレッキング

ウ 高齢者には

ハンドクラフト、ニュースポーツ、痴呆予防のレクリエーションゲーム

エ お母さん、お父さん、指導者の方には

レクリエーションゲームの指導者養成、各種指導者ワークショップ、人間関係トレーニング

(3) 各種事業の参加募集要項

ア テーマ 海のキャンプでいかだづくり

期 間 2泊3日 (7月)

行き先 兵庫県立母と子の島

対 象 小学校4年生以上

内 容 いかだづくり、ナイトハイク、野外炊事、キャンプファイヤー

イ テーマ 山のキャンプでサバイバル

期 間 2泊3日 (8月)

行き先 こぶしの村キャンプ場 (宍粟郡一宮町)

対 象 小学校4年生以上

内 容 火打ち石作り、野外炊事 (毎食)、清流での川遊び・魚取り

ウ テーマ 氷ノ山に遊びに行こう (氷ノ山登山)

期 間 1泊2日 (9月の土・日)

行き先 若桜氷ノ山ユースホテル

対 象 小学校4年生から中学生

内 容 登山

エ テーマ 氷ノ山に遊びに行こう (スノーシューハイク)

期 間 1日 (2月)

行き先 氷ノ山自然ふれあい館

対 象 小学校4年生から中学生

(4) 考 察

本団体の特徴は、乳幼児から高齢者まで幅広い層に応じて様々な体験活動を提供できることにある。また、体験活動のリーダーとして活躍できる人材の養成も行っている。単なるイベント的な活動に終わるのではなく、生涯を通して様々な体験活動を提供していくという体制が整っている。

実施内容では、小学生では、ネイチャーゲーム、自然観察、チャレンジウォークなど直接自然とふれあう体験内容が多い。「海のキャンプでのいかだづくり」「氷ノ山登山」「スキー教室」など、各季節に応じた活動が提供されているのも大きな特徴である。

今後は、地域、家庭、学校とどのように連携を図っていくかが大きな課題である。

7 県内小学校の自然体験活動事例

(1) 実施校

兵庫教育大学附属小学校

(2) 体験活動成立の4要素

- ア 多様な自然体験を準備する
- イ 全身全霊をかけた体験活動に仕立てる
- ウ 自己理解に根ざす活動に仕立てる
- エ 学校全体で取り組む

(3) 指導にあたっての留意点

- ア 体験活動の特質に合わせ、目標、内容、方法を子どもの実態に即して再設定する
- イ 一つ一つの活動の反省を必ず行い、記録に残す
- ウ 指導法を共有化できる場所を設ける

(4) 取組内容

ア 4年生

(ア) ねらい

- a 2泊3日の宿泊体験を通して、豊かな自然に親しむ心情と態度を育てる。
- b 飯盒炊さんやキャンプファイヤー等の活動を仲間と協力しながら責任を持ってやり遂げる。
- c 仲間と寝食を共にし、集団生活のルールやマナーを学ぶ。

(イ) 実施場所

県立南但馬自然学校

(ウ) 事前学習

- a 飯盒炊さんの火おこし練習、調理メニューづくり
- b キャンプファイヤーの計画及び練習
- c 宿泊訓練のしおりづくり等を進める中で、宿泊訓練に関わる準備並びに意欲づくり

(エ) 主な活動

飯盒炊さん、キャンプファイヤー、テント泊、カートンドック、ウォークラリー、自然にどっぷりとつかる活動

イ 5年生

(ア) ねらい

- a 自然の中での様々な体験を通して、進んで自然に立ち向かい、強い体をつくる。
- b 仲間と活動する中で、お互いを理解し合うとともに、集団生活のルールとマナーを学ぶ。
- c 山にふれて、培った経験を他教科等の学習に関連づけていこうとする。

(イ) 実施場所

氷ノ山

(ウ) 事前学習

- a 氷ノ山周辺をフィールドとし、総合的な学習、教科、道徳と関連させた事前学習
- b 登頂モニュメントの制作
- c マインドファイヤーミーティングや学級タイムの計画及び練習
- e 林間学校のしおりづくり等を進める中で、林間学校の意欲づくり

(エ) 主な活動

自然散策、マインドファイヤーミーティング、氷ノ山登山

ウ 6年生

(ア) ねらい

- a 刻々と変化する海からの脅威やストレスに負けることなく、遠泳を最後までやり遂げる強い精神力と真の泳力を身につける。
- b 仲間と宿泊を共にする中で、お互いを理解し合うとともに、体験を通して集団生活のルールとマナーを学ぶ。
- c 諸寄海岸で働く人たちとのふれあいを通して、海や海辺の生活のよさを見つける。

(イ) 実施場所

諸寄海岸

(ウ) 事前学習

遠泳をするのに必要なレディネスを身につけるための水泳学習

(エ) 主な活動

水泳訓練、自己申告会、ミニ遠泳、大遠泳

|| 8 本研究のまとめ

本章では系統的自然体験活動に着目し、発達段階に応じた自然体験プログラムのあり方、異年齢集団で構成される自然体験プログラムの可能性をさぐるために様々な文献、資料を収集し、考察を加えた。そこから次のことが明らかになった。

- (1) 中学校、高等学校では、宿泊型の体験活動にとらわれず、「自然学校」での興味や学びをさらに深める機会を用意していくことが必要である。

小学校では自然体験の活動量及び種類が圧倒的に多く、中学校、高等学校と学校種が上になるほど少なくなっている。これは就業体験、ボランティア体験など自然体験以外の体験活動の比重が多くなることから予想はされたが、極端に少なくなることが分かった。中学校、高等学校では、宿泊型の体験活動にとらわれず総合的な学習の時間など普段の授業に密接にリンクさせ、自然学校など自然体験での興味や学びをさらに深める機会を用意していくことが必要である。特に高等学校では環境問題や人間関係構築など社会的テーマに自分たちが具体的にどう取り組んでいくのかを自然体験を通じて考えていく場として取り入れたい。

(2) 同じ体験活動でも発達段階に応じたねらい、指導方法をもって実施されることが重要である。

小・中・高等学校のいずれの学校種でも共通に行われている自然体験活動がある。それぞれの活動の詳細な内容やねらいは分からないが、小学校より中学校、中学校より高等学校と活動のレベルや学びの深さを考慮して課題設定がされないと年齢が高くなるにつれ、その活動から得られる満足感は低いものとなる。学習指導要領には各教科の「自然」に対する系統的な学びの指針が示されている。同じ体験活動でも発達段階に応じたねらい、指導法をもって実施されることが重要である。

(3) 小学校5年生での「自然学校」の体験・経験を生かし、さらにステップアップした自然体験活動を創造し、中学校、高等学校と体験を積み上げることが重要である。

中・高等学校では集団宿泊訓練、ガイダンスの中に「野外活動」という名称で取り込まれ、親睦をねらいとした活動として野外炊飯、登山、キャンプファイヤーなどを実施している傾向が見られる。

しかし、総合学科を置く学校などでは「野外活動」を正規の授業に位置づけ取り組んでいるところがあり、自然体験に関する知識・技能の習得や人間関係の構築を積極的に求めたり、危機管理の面からのスキルアップを図るというねらいで実施しているところもある。

「自然学校」で自然体験のおもしろさや気づきがあり興味が高まってきても、次の段階で訓練、合宿と位置づけられ、自然体験イコール野外料理やキャンプファイヤーと活動が限定されてしまうようでは、「自然学校の対費用効果」は低いものとなる。「自然学校」の体験が生かされ、ステップアップした自然体験活動の創造が求められる。

(4) 異年齢で構成する自然体験活動推進においては、体制整備と組織づくりが重要である。

子どもたちの「生きる力」を育てていくためには、地域社会の中で大人や様々な年齢の友だちと交流し、様々な生活体験、社会体験、自然体験を豊富に積み重ねることが大切であると、第15期中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について（第一次答申）」（平成8年7月）で提言しており、第16期中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機―」（平成10年6月）においては、長期の自然体験活動の振興など異年齢集団の中で子どもたちに豊かで多彩な体験の機会を与えることの重要性について指摘している。

また、第4期生涯学習審議会答申「生活体験・自然体験が日本の子どもの心を育む」（平成11年6月）では生活体験や自然体験が豊富な子どもほど道德感・正義感が充実している傾向が見られることをふまえ、異年齢の友だちや地域の人々との関わりの中で、様々な体験の機会を意図的・計画的に提供していくことにより、子どもたちに「生きる力」を育てていくことが重要であると指摘している。

このような観点から、平成14年度より完全学校週5日制が実施されたこともふまえ、学校が休業となる土曜日などにおいて、学校外活動の充実を図ることが重要な課題となっている。地域における子どもたちの体験活動の機会と場を充実させるとともに、地域全体でそれらの活動を推進するための体制整備などを進めていく必要がある。

一宮町の異年齢交遊塾の取組に見られるように、異年齢集団で実施することにより、上級生、下級生の立場から、人との関わり方、他人を思いやる心、社会生活の基本等を学び、耐性や社会性を培う機会ともなる。

学校だけではなく、地域やNPO、民間等との連携を図った新しい組織づくりが望まれる。

(5) 体験活動には「テーマ」が必要であり、体験が自分たちの日常に反映されることが重要である。

一宮町の取組からは自然体験活動における小・中学校の連携、小・中・高等学校の連携、学校と地域の連携の可能性が示唆された。

一つは「ゼロエミッション」という活動の骨組みとなるテーマを掲げることによって、具体的連携の方策やねらいの到達点が明確になっている。どんな体験活動にも「テーマ」が必要なことが分かる。もう一つは子どもたちが主体的に動ける、動かなければならない状況をうまく作り出されている点にある。通学合宿では自分たちの「生活」そのものであり、クリーン作戦も自分たちの地域の環境づくりに大きく貢献できる。自分たちの行ったことが形になって見える、周囲から評価されるということも重要である。

(6) 小学校、中学校、高等学校までを見通した教育課題を検討したり教職員の交流を行うなど、連携を図った教育を推進する必要がある。

小・中・高等学校の連携を進める上で最も重要なことは、相互理解であり、行事や交流はその手段である。相互理解としては、授業参観、地域行事への参加、情報交換会、他校種の行事への参加等が考えられる。次の段階としては、相互交流である。合同研修会、地域への学校公開、部活動での交流、合同行事の開催等が挙げられる。さらにステップアップすると、相互連携の段階となる。他校種の教員による指導、地域との連携、生徒指導体制の確立、合同での体験活動等が予想できる。しかし、このことにこだわる必要はなく、地域や子どもの実態、学校のねらい等を十分に踏まえ、その地域に合った切り口からスタートし、さらなる連携のあり方や方法、ねらいを達成するための施策を模索していくことが重要である。

(7) 最後に

自治体職員や教師は一般的に自然体験に乏しく、理論的背景や指導ノウハウを学ぶ機会が

ほとんどないまま現場を指導しなければならない実情がある。その不足部分を支援するために南但馬自然学校をはじめとする教育機関が専門職員を配置し、教員研修会の実施や参考資料集の作成等を行っている。

何でも学校や教師だけでやろうとする傾向が教育界に根強く残っているが、それは時として学校、教師、何よりも子どもたちにとって、マイナスになることがある。民間の個人、団体には自然体験活動のプロたるべく日々努力し、実績を上げている人たちが出てきている。政府の構造改革の一貫として民間の活用が盛んに言われているが、自然学校も専門家の民間団体との連携を本気で考える時期にきているかもしれない。

今、子どもたちの知識レベルはかなり高いところにあり、中途半端な体験に楽しさを感じ、興味を示す子どもは少ない。やはり本物にふれることによる魂の揺さぶりが必要である。

「自然学校」の中で「プロ」から指導を受け、多くのことを感じ、学び、中学校の「トライやる・ウィーク」ではその道の「プロ」に出会い、あこがれ、高校生で「プロ」を目指すために自分で道を切り開く、このような流れのスタートとして「自然学校」があればよいと考える。

プログラムデザイン

はじめに

- 1 学校における自然学校のさらなる充実のための取組
 - 2 自然学校プログラムデザインについて
 - 3 プログラムデザインの手法を生かした取組事例
- 4 プログラムデザインを有効に機能させるための資料集
- 5 学校教育におけるプログラムデザインの活用（例）

はじめに

自然学校のプログラムを構成する上での現状の問題点は、ねらいの曖昧さ、指導方法・指導形態の画一性にあると思われる。

プログラムの構成を手がけていく場合、目的、指導方法・指導形態、活動種類・評価方法等全体を考え進めるべきである。

しかし、現状の自然学校では、子どもたちが喜ばばよいとか、単に体験させることが大切であるなど、どのような種類の活動ができるのかという点ばかりが先行し、何のために、どのような方法でというねらいに迫る部分が軽視されがちである。

したがって、プログラムが各活動の羅列、寄せ集めになってしまっていると同時に、自然学校の実践の場においても、時間内に淡々と活動をこなすことに力が注がれている傾向にある。

プログラム全体には大きなねらいがあり、それに基づき、学年・学級の活動あるいはグループ・個々の活動といったそれぞれのねらいがあるべきである。そのねらいを達成するにあたり、最も適した指導方法・指導形態、活動内容等を考えることが必要である。ねらいや指導方法等が明確にされていてこそ振り返りや評価が実施できる。

また、事前準備や事前打合せ、事後の発展的・系統的な学習も重要であり、今後、それらも視野に入れたプログラムの構成が求められる。

1 学校における自然学校のさらなる充実のための取組

学校においては、地域との連携と適切な役割分担を図りながら、自然学校を学校の教育計画に適切に位置づけて実施する必要がある。その際、次のことに配慮することが重要であると考えられる。

1) 学校としての体制づくり

活動の窓口となる担当を明確にし、校長の指導の下に全教職員が協力して校内推進体制を整備する。

2) 教職員の意識・能力の向上

教職員一人一人が自然学校の意義や理念を正しく理解し、これらの活動に係る指導の力量を高めていくことが不可欠である。

教職員一人一人が自信を持って指導に当たることができるように、校内の研修はもとより、教育委員会等が実施する研修等に積極的に参加する。

3) 活動実施上の配慮

◇教育活動全体を通じた自然学校の充実

発達段階に応じた適切な活動の機会の提供が行われるよう、自校の教育目標や地域の実情を踏まえ、学校として活動のねらいを明確にする。

◇興味・関心を引き出し、自発性を高める工夫

発達段階や活動の内容に応じ、活動の企画段階から子どもを参加（児童の参画）させ

るとともに、子どもが選択できるよう多様な活動(選択活動)を用意することが望まれる。

◇事前指導・事後指導

活動前に、自然学校を行うねらいや意義を子どもに十分理解させ、子どもたちがこれから取り組む活動についてあらかじめ調べたり、準備をしたりすることを通じ、意欲を持って活動できるようにする。

活動後は、感じたり気づいたことを振り返り、まとめたり発表したりする。

◇活動の円滑な実施のための配慮

活動を効果的かつ安全に行うために必要な知識・技能等の習得のための指導者の事前研修が必要である。

受け入れ先との綿密な連絡調整など企画段階での配慮、活動を実施する際の留意点などについての十分な調整、児童への周知、活動を支援する指導補助員等との十分な打合せ、活動を振り返り次の活動につなぐ手立ての工夫等が重要である。

◇活動の適切な評価

自然学校の評価については、点数化した評価ではなく、児童の良い面を積極的に評価し、どのような資質や能力が育っているのかという視点を重視して適切に行う必要がある。振り返りが大切である。

その際、児童の感想・意見、保護者の感想・意見、受け入れ先の感想・意見等を把握するなど適切な評価を行うための工夫をするとともに、その結果を次年度以降のプログラムの内容や活動のあり方に反映させる。

◇事故発生時の備え(リスクマネジメント)

緊急時対応マニュアルを作成するとともに、必要に応じた地域警察・消防署等への事前の連絡、医療機関への事前連絡、緊急時の連絡先リストの作成などの準備、保険の利用を行うことが必要である。

そこで、上記のことをふまえ、以下充実した自然学校とするため、プログラムのあり方に視点をあて、プログラムデザインの手法について述べる。

2 自然学校プログラムデザインについて

プログラムとは、一つ一つのアクティビティ^{注1)}を組み合わせ、目的を持った一連の流れのある全体の活動をいう。

そして、プログラムデザインは、自然学校の目的（ねらい）を実現するためのプログラムづくりであり、「思い」「ねらい」「テーマ」をアクティビティ（活動）という目に見える「動き」「形」を用いて構成するものである。

プログラムをデザインする中で一番大切なことは、何を感じて何を考えてほしいかというテーマであり、留意することは、参加者の気持ちに配慮した流れである。効果の高いと思われるアクティビティの羅列では、よいプログラムにはならない。

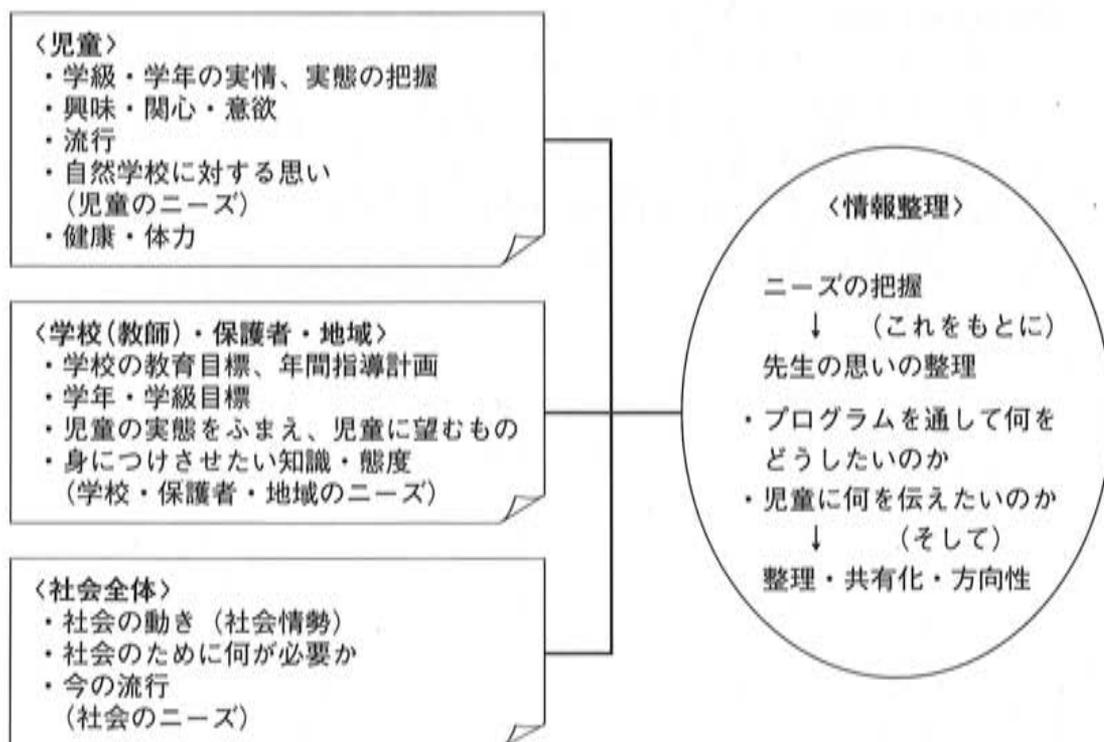
プログラムデザインとは、個々のアクティビティをどのようにして相手の心の動き・要求に合わせて組み合わせるかという技術のことである。

さらには、行ったアクティビティの経験を次のアクティビティに生かす工夫が望まれる。一つ一つのアクティビティにつながり（流れ）を持たせるプログラムの組み立てを考えることが重要である。

自然学校プログラムデザイン

(1) コンセプト（ねらい）の明確化（デザインの核）

「プログラムを構成する上でのコンセプト^{注2)}」を明確にする。



注1) アクティビティ 自然体験などの活動の一単位のこと。プログラムの部品のようなもの。

注2) コンセプト 概念・考え方。自然学校を実施する上での「ねらい」。

(2) 資源の整理

デザインをしようと思っているフィールドなどの資源^{注3)}について整理する必要がある。



(3) 自然学校プログラムデザインの留意点

ア プログラムの「ねらい」の明確化

イ 5年生児童に何を伝えたいのかを整理し、方向性を決め、目的の共有化を図る

ウ 実施する内容とねらいの一致を図る

エ 「何ができるか」ではなく「何のために行うのか」に留意する

オ プログラム実施手順、流れ（5泊6日の流れ）

つかみ（導入）～本体（展開）～振り返り・分かち合い（まとめ）

カ 欲張らず絞り込む（ゆとりあるプログラム）

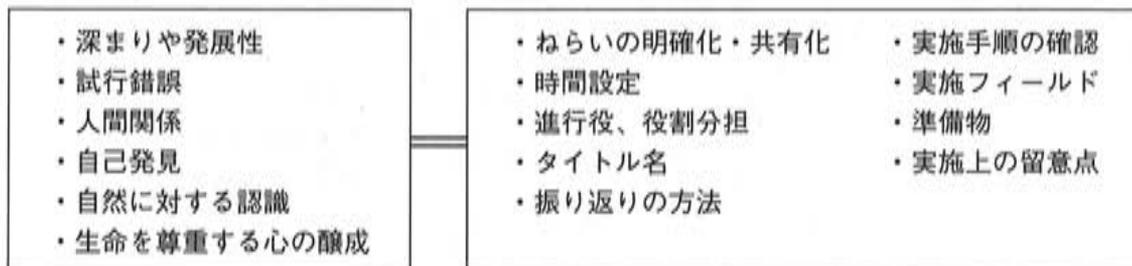
キ 児童の期待するものをくみ取りプログラムを組み立てることも大切（児童の参画）

ク フィールドポテンシャル^{注4)}の調査

ケ 児童への効果的な情報提示 下見時のVTR・デジカメ写真・ガイダンスVTR・6年生の話等

(4) 自然学校プログラムを構成する上でのアクティビティデザイン^{注5)}の留意点

【アクティビティで求められる要素】

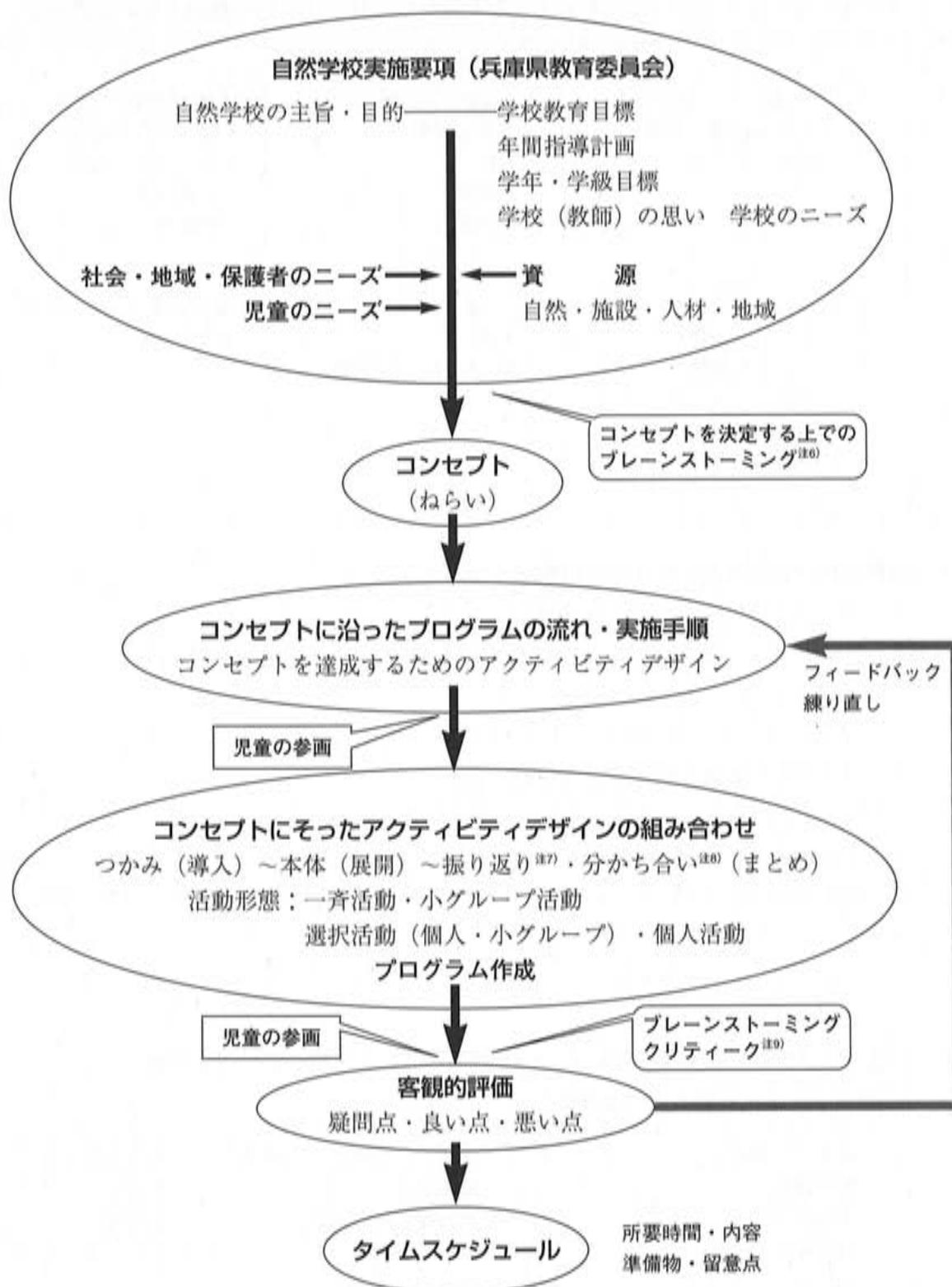


注3) 資源 自然学校を運営していく上での諸条件（施設、環境、人材資金等）。

注4) フィールドポテンシャル 活動場所の持つ潜在的能力及び可能性。

注5) アクティビティデザイン アクティビティ（活動）を構成し作ること。

(5) プログラムデザインの構図



注6) ブレインストーミング 他の人の発言を批判することなく全員が自由に発言を行い、独創的なアイデアを引き出す話し合いの一手法。

注7) 振り返り 振り返りシートを使用し、自分が行った活動を振り返ってみること。

注8) 分かち合い 小グループにて個人の振り返りをもとに、ブレインストーミングを行う。

注9) クリティック 「評価」、「批判」を受けること。

(6) 実施要綱

実施要綱作成のためには、以下の手順が必要である。

作成日：平成〇〇年〇〇月〇〇日

作成者：〇〇小学校 〇〇 〇〇

○ 6W2H

<p>What (名称・概要)</p> <p>平成15年度 〇〇小学校自然学校</p>	<p>Why (ねらい)</p> <p>豊かな自然の中で、 人や自然、地域社会と ふれあい、様々な体験 を通して「生きる力」 を育む。</p>	<p>When (いつ)</p> <p>平成15年 〇〇月〇〇日(月) ～〇〇月〇〇日(出) (5泊6日)</p>
<p>Who (事業の仕組み)</p> <p>〇〇小学校5年生の年 間指導計画に位置づけ 実施。「生きる力を育む 体験活動」等、県教育 委員会の作成した資料 等を参考。学校では味 わえない感動体験。</p>	<p>実施要綱・6W2H コンセプト</p> <p>お互いに協力し、最後ま でやりとげる力を培う。</p> <p>(協力) (達成感)</p>	<p>Where (どこで)</p> <p>県立南但馬自然学校 兵庫県朝来郡山東町 迫間字原189</p>
<p>Whom (対象者)</p> <p>〇〇小学校5年生 〇クラス 〇〇名</p>	<p>How (手法、手段)</p> <p>山を主体とした自然 体験活動を実施。 一斉プログラム 選択プログラム 児童参画プログラム</p>	<p>How much (予算・経費)</p> <p>県からの補助金 市町からの補助金 個人実費徴収 〇〇〇円×人数分 (宿泊費・食費等)</p>

3 プログラムデザインの手法を生かした取組事例

感動体験から達成感を求めて

明石市立魚住小学校

(1) はじめに

ア 児童の実態

魚住小学校は、明石市の西部に位置し、水豊かなため池の点在する広々とした田園地帯や、金ヶ崎自然公園、市内西部最大のため池である17号池などがあり、比較的自然に恵まれた地域である。

5年生の子どもたちは、このような豊かな自然の中でのびのびと育ち、穏やかで優しい性格の子が多い。また、教えられたり練習を積んだりしたことには素直に進んで取り組むことができる。しかし、今まで体験したことがないものに出会ったときには、何をどのように解決していけばよいのか考えられなくなる傾向がある。また、興味・関心が途中で切れたり、粘り強く最後まであきらめずに取り組むことには苦手で、困難に直面すると教師や大人に頼りがちで、自ら課題を解決する力やたくましさに欠けるところが見られる。自然との関わりについては、生き物などには高い関心を示すが、自然の良さに気づいたり、自然を大切にしていこうという意識はまだ低い。

イ 「教師のつけさせたい力」と「児童の願い」

本校では、学校教育目標を「自ら学ぶ 心豊かな子どもの育成」とし、学校教育活動全領域において「生きる力」の育成に努めている。また、校内研究のテーマを「ふれあい認め合う子ども」とし、総合的な学習の研究を進めている。

5年生の1学期で総合的な学習を進めてきた結果、今回の自然学校では、子どもたちに自然のよさを感じ取らせ、美しいものに感動する心を育て、自然との調和を図らせることが大切であり、そのためには、自然の中で「仲間と協力し、たくましく生活していく力」「ねばり強く課題を追求し、最後までやりとげる力」をつけさせたいと考えた。

また、児童に参画させ、協働の意識を持たせて意欲的に活動させるために、児童の願いや希望をできるだけ取り入れて自然学校を計画した。そのために、児童に自然学校事前アンケートを行い、「自然学校で学びたいこと」、「自然学校でしたい活動」、「自然学校でつけたい力」を調査した。

この結果は、別紙のとおりである。

ウ 児童の事前アンケート集計

アンケート回答人数 149名 (3項目とも複数回答)

【自然学校 児童事前アンケート集計結果】

1 5泊6日の自然学校でどんなことを学びたいですか

・自然（ふれあい）や環境（生き物とのふれあい、野鳥観察、星座観察など）	77人	51.7%
・みんなと助け合い、友情を深める	47人	31.5%
・野外炊飯の仕方	11人	7.4%
・その他（のこぎりなどの道具の使い方など）	17人	11.4%
計	152人	

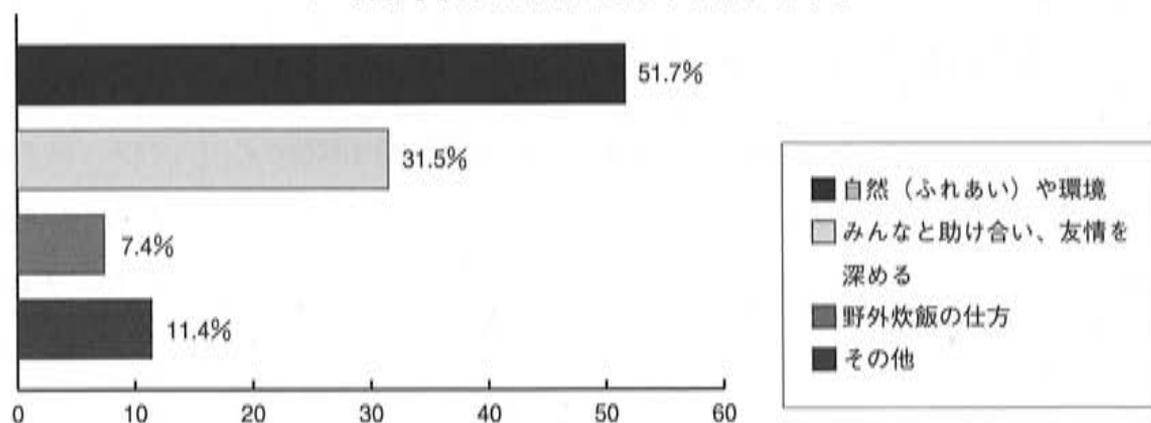
2 自然学校でどんな活動をしてみたいですか

・木や森を生かしてできる遊び（基地づくり、クラフト、ターザンごっこなど）	109人	73.1%
・登山、ハイキング、探検	33人	22.1%
・キャンプファイヤー	25人	16.8%
・野外炊飯	19人	12.8%
・その他（テント生活、きもだめしなど）	26人	17.4%
計	212人	

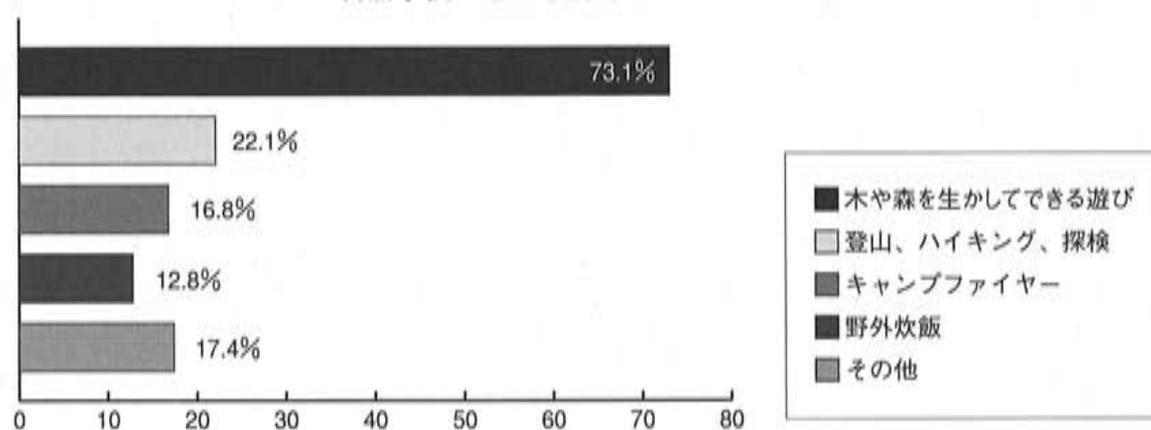
3 自然学校を体験して、どんな力をつけたいですか

・みんなと協力したり助け合う力	46人	30.9%
・自分のことは自分でできる力	21人	14.1%
・体力（足の力）	20人	13.4%
・自然と仲良くできる力（自然のよさや大切さ）	19人	12.8%
・あきらめず何かをやりとげる力	16人	10.7%
・自分で考えて行動できる力	9人	6.0%
・その他（自分の弱いところを強くする力、整理整頓、自分の身を守る力など）	22人	14.8%
計	153人	

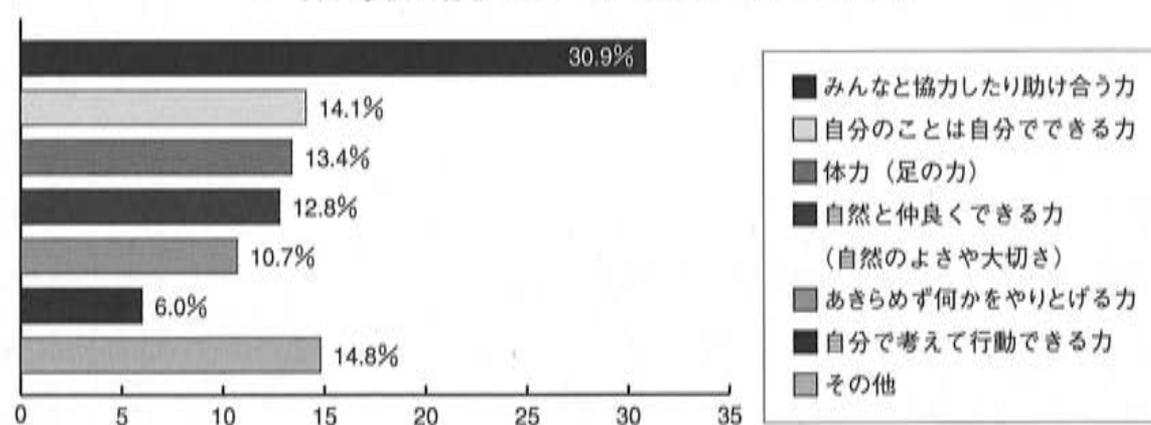
1 自然学校でどんなことを学びたいですか



2 自然学校でどんな活動をしてみたいですか



3 自然学校を体験して、どんな力をつけたいですか



この調査によると、児童は自然学校で、基地づくりやキャンプファイヤー、野外炊飯などの活動を通して、自然とふれあい、仲間と協力し合い、立派に自然学校をやり遂げたいという願いがあることが分かった。

(2) 自然学校のねらいと活動プログラム

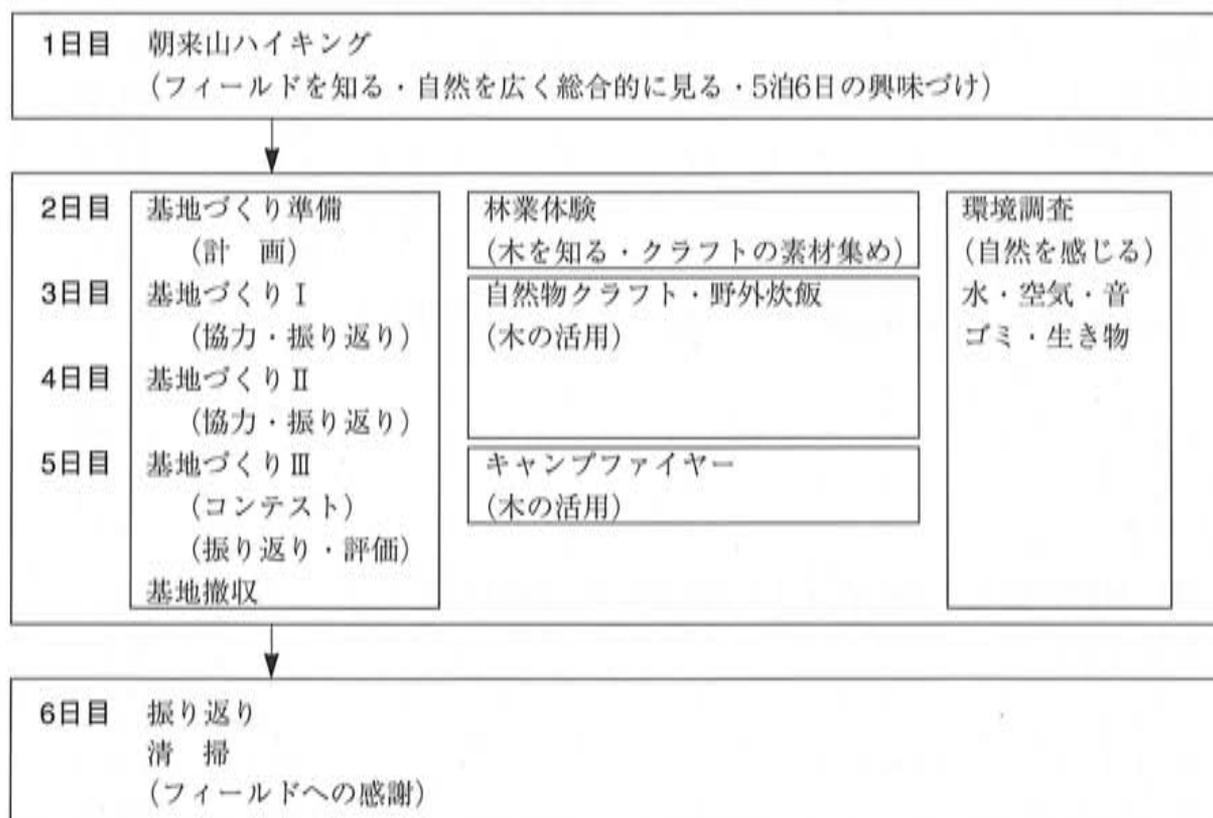
自然学校で教師が子どもたちにつけさせたい力と子どもたちの願いを考えた結果、自然学校の目的を以下のように設定した。

- ア 自然に関心を持ち、自然から学ぶ。
- イ 自然の中で仲間と存分にふれ合い、助け合いの心を育てる。
- ウ 考えて最後までやり抜く力を育てる。

そして、以下三つの観点を中心に活動プログラムを計画した。

- ア 6日間を通して基地づくりりをメインに取り組み、仲間と協力して、工夫し、達成の喜びを味わわせる。
- イ 2学期の総合的な学習（環境学習）に関連・発展させるため、基地づくりに使った木をキャンプファイヤーに活用したり森の中で活動することによって、魚住との環境の違いに気づかせ、環境調査へ発展させる。
- ウ 自然学校初日に朝来山登山をし、南但馬の環境を全体的に把握し、魚住町との環境の違いを実感させる。

【明石市立魚住小学校 自然学校プログラム構成図】



(3) 自然学校を終えて

ア 自然学校事後アンケート

自然学校を終えて1週間後、児童と保護者に事後アンケートを実施した。

この結果は、以下のとおりである。

(ア) 児童の事後アンケート集計

参加人数 149名

アンケート回答人数 147名

(問3～問5は複数回答)

【自然学校 児童事後アンケート集計結果】

問1 自然学校は自分にとってどうでしたか。

1 とてもよかった	118人	80.3%
2 よかった	19人	12.9%
3 ふつう	9人	6.1%
4 よくなかった	1人	0.7%

問2 自分のめあては達成できましたか。

1 大体できた	63人	42.9%
2 まあまあできた	76人	51.7%
3 あまりできなかった	8人	5.4%

問3 プログラムでよかったものは何ですか。(複数回答)

キャンプファイヤー	121人	82.3%
基地づくり	115人	78.2%
林業体験実習	89人	60.5%
野外炊事	81人	55.1%
基地づくりコンテスト	74人	50.3%
環境調査	59人	40.1%

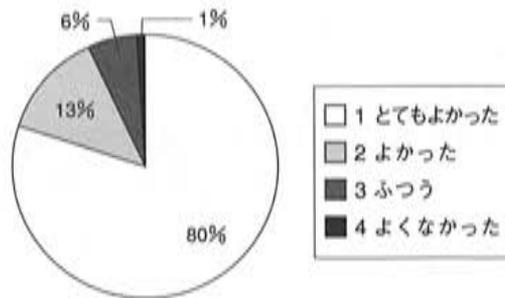
問4 プログラム以外で楽しかったことは何ですか。(複数回答)

友だちとの交流	122人	83.0%
指導補助員の先生との交流	100人	68.0%
食事の時	99人	67.3%
ねる時	96人	65.3%
その他	9人	6.1%

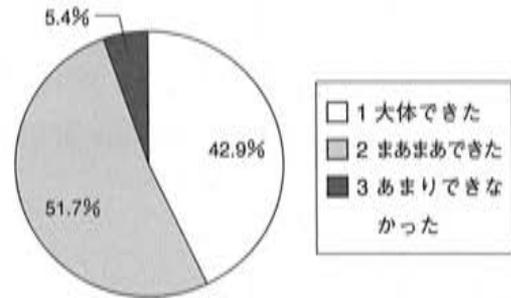
問5 自然学校でどんな力がついたと思いますか。(複数回答)

友だちと仲良くなった	118人	80.3%
生活がきちんとできるようになった	93人	63.3%
自然と仲良くなれた	87人	59.2%
最後までがんばりとおす力がついた	75人	51.0%
積極的になった	33人	22.4%
家族や他の人にやさしくなった	25人	17.0%
その他	4人	2.7%

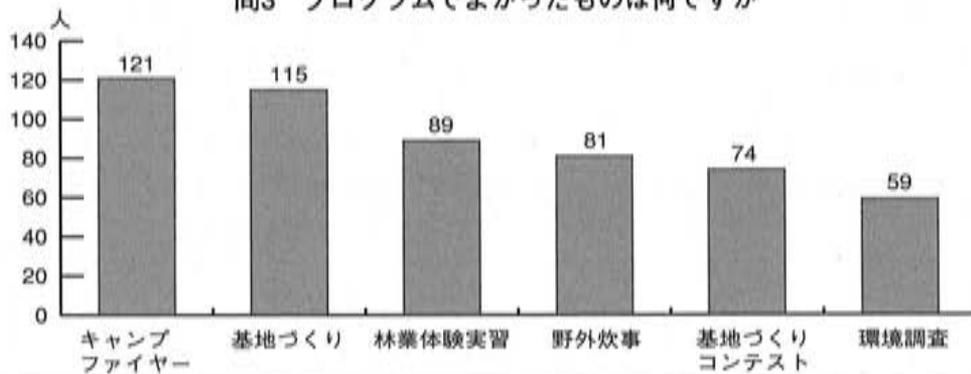
問1 自然学校は自分にとってどうでしたか



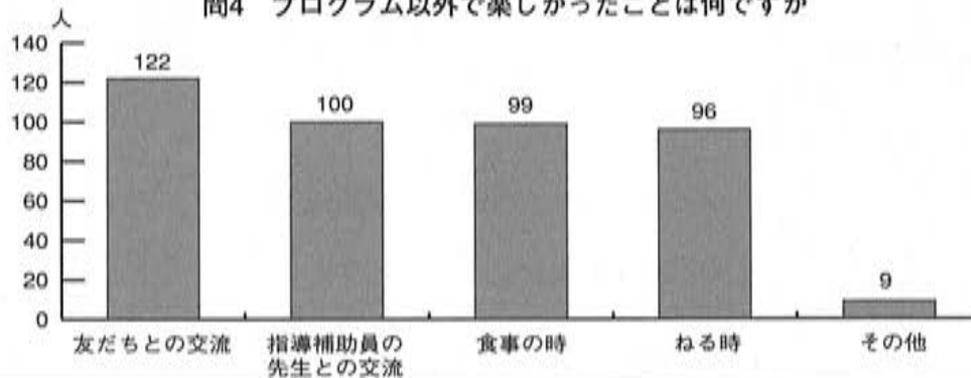
問2 自分のめあては達成できましたか



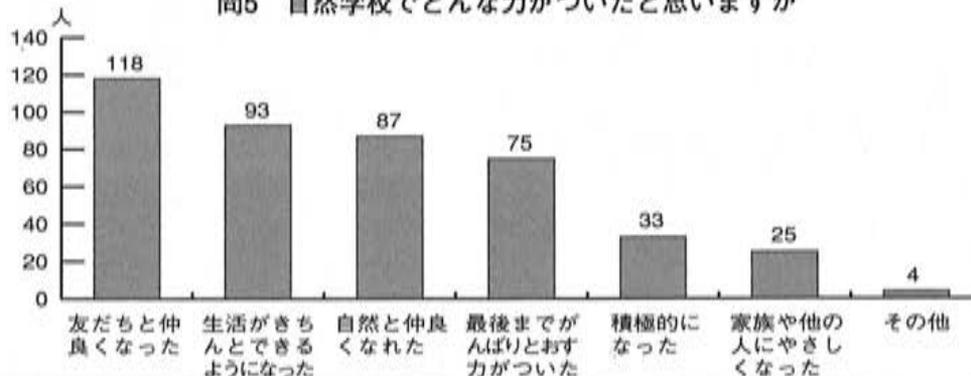
問3 プログラムでよかったものは何ですか



問4 プログラム以外で楽しかったことは何ですか



問5 自然学校でどんな力がついたと思いますか



(イ) 保護者の事後アンケート集計

アンケート回答人数 132名 (問1、問2-1、問3-2は、複数回答)

【自然学校 保護者事後アンケート集計結果】

問1 お子さまが自然学校から帰られたあと、どのような話をしましたか。(複数回答)

食事のこと	111人	84.1%
指導補助員のこと	90人	68.2%
友だちのこと	86人	65.2%
プログラム(活動内容)のこと	83人	62.9%
集団生活のこと	64人	48.5%
宿舎建物のこと	60人	45.5%
自然とのかかわりのこと	53人	40.2%
先生のこと	28人	21.2%
南但馬自然学校職員のこと	12人	9.1%
その他	12人	9.1%

問2 お子さまに自然学校を体験させてよかったと思いますか。

思う	125人	94.7%
思わない	1人	0.8%
どちらでもない	6人	4.5%

問2-1 よかったと思う理由(複数回答)

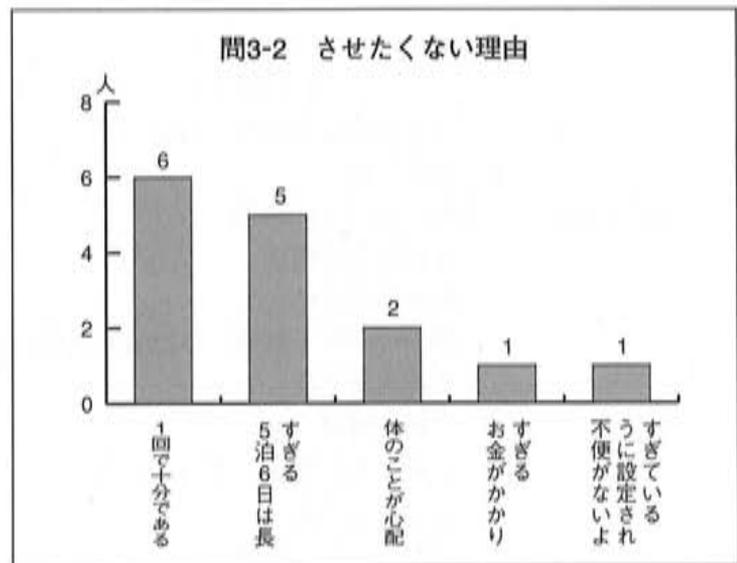
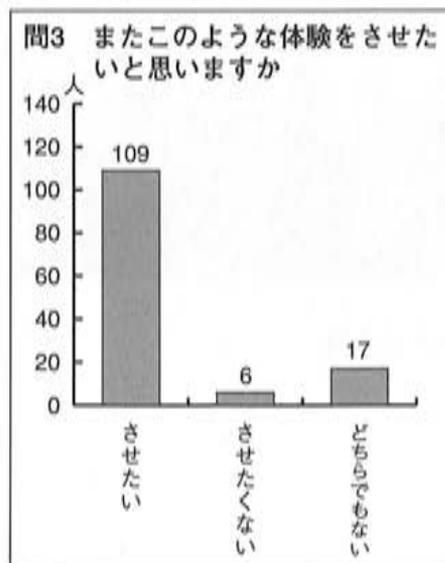
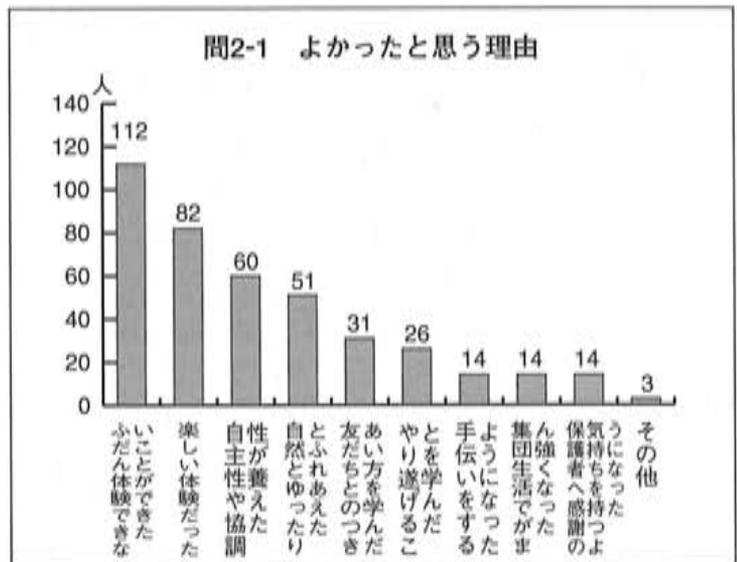
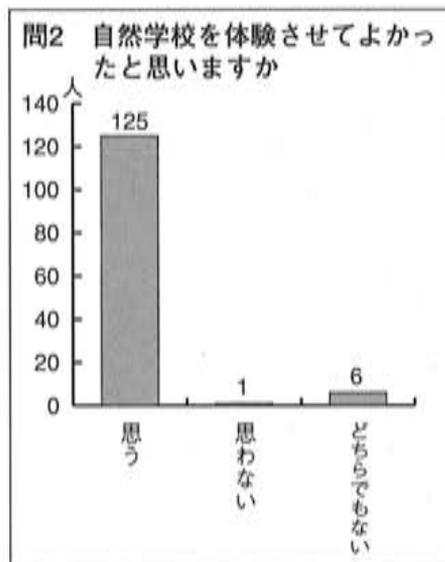
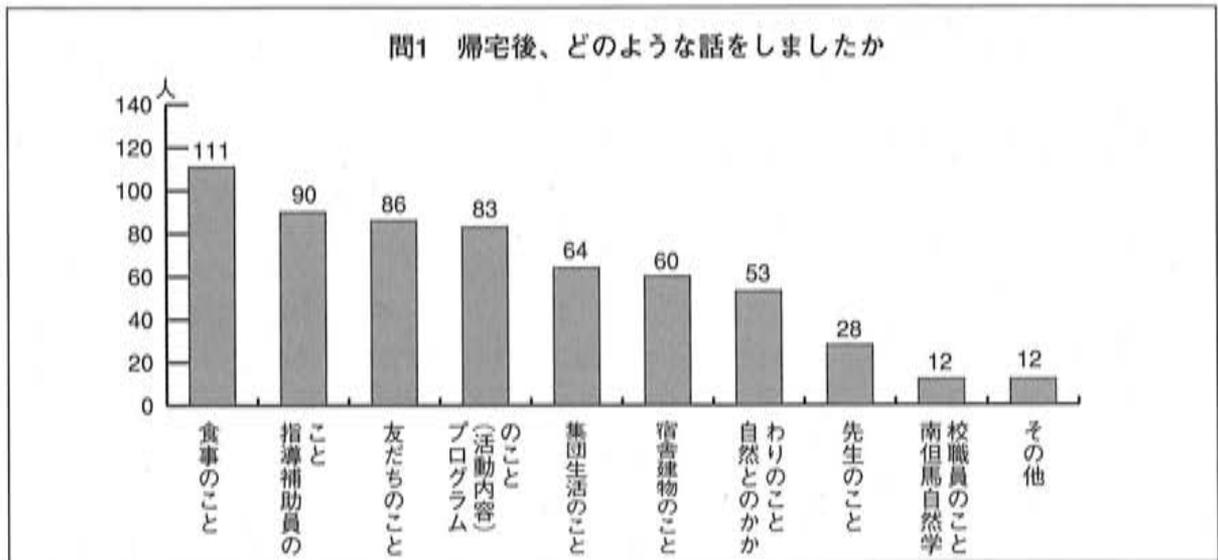
ふだん体験できないことができた	112人	84.8%
楽しい体験だった	82人	62.1%
自主性や協調性が養えた	60人	45.5%
自然とゆったりとふれあえた	51人	38.6%
友だちとのつきあい方を学んだ	31人	23.5%
やり遂げることを学んだ	26人	19.7%
手伝いをするようになった	14人	10.6%
集団生活でがまん強くなった	14人	10.6%
保護者へ感謝の気持ちを持つようになった	14人	10.6%
その他	3人	2.3%

問3 もう一度自然学校のような体験をお子さまにさせたいと思いますか。

させたい	109人	82.6%
させたくない	6人	4.5%
どちらでもない	17人	12.9%

問3-2 させたくない理由(複数回答)

1回で十分である	6人	40.0%
5泊6日は長すぎる	5人	33.3%
体のことが心配	2人	13.3%
お金がかかりすぎる	1人	6.7%
不便がないように設定されすぎている	1人	6.7%



(4) 南但馬自然学校における自然学校実施に至るまでの概要

自然学校実施期間：平成15年10月27日(月)～11月1日(土)

5月 第1回 南但馬自然学校事前相談及び下見

(初めての南但馬自然学校の利用であるため、プログラム検討をする上で下見を兼ねた事前相談に出向く)

- ・プログラムの組み立て方について相談
自然学校のねらいの明確化、活動エリアの把握、児童の参画、ゆとり、活動手法、スタッフ間の意思統一、指導補助員との連携等
- ・下見(活動エリアとなる場所の把握及び確認)
- ・必要提出書類について

6月～7月 校内検討

- ・第1回相談事項についての整理
- ・自然学校プログラムを構成していく上での手順について検討及び確認
- ・自然学校の目的についての検討及び決定
(児童の実態把握、児童につけさせたい力、学級・学年でつけさせたい力等をもとに検討)：教師
(児童自らが今までの自分を振り返りこの自然学校でどんなことを学びどんな力をつけたいのかを調査)：児童
(7月の学期末懇談会にて子どもたちにどんな力をつけさせたいのか話の中で情報収集)：保護者
- ・目的達成に向けてのプログラムについて調査・検討
(どんな活動がしてみたいのか調査)：児童
(事前相談の事柄を前提にプログラムを検討)：教師
- ・児童の意見も取り入れながらプログラムを検討
コンセプトに添ったプログラムとなっているか、流れのあるプログラムとなっているか検討(ブレインストーミング)
- ・仮プログラム完成

8月 第2回 南但馬自然学校事前相談及び下見

- ・プログラムの具体的相談
(自然学校の目的の明確化)
(各活動の具体的相談)
- ・各活動場所の調査・確認
- ・講師確認

8月～10月 実施に向けての準備

- ・指導体制の確立
- ・実施要項の作成
- ・指導補助員・講師・救急員等との打合せ及び確認
- ・児童事前指導
- ・活動準備物
- ・保護者事前説明会準備・実施
- ・緊急体制の確立
- ・健康・安全面についてのチェック



10月27日
11月

- ・活動調査・計画
(しおりづくり等)：児童
- ・生活準備物
- 自然学校スタート
- 自然学校振り返り(反省・報告会)
- ・企画面
- ・実践 ・指導面
- ・健康 ・安全面
- ・保護者説明 ・報告
- ・評価面等



自然学校を実施するにあたり、南但馬自然学校と連絡を密にとり、プログラムを構成する上での留意点等指導・助言を受け進めていった。その指導・助言をもとに児童や学校(教師)・保護者のニーズを整理し、学校としてのコンセプトを明確にすることから取り組んだ。プログラムについては、児童の意見も取り入れながらコンセプトを中心に据えた活動、また5泊6日に流れのある活動を試行錯誤しながら組み立てた。活動エリアとなる場所については、活動時間が確保できる場所であるか、安全面についてはどうか、子どもたちのニーズが十分満たされる場所であるか等、あらゆることを想定しながら念入りに下見を行った。

下見については、プログラムを作る上で一度行い、そのプログラムの具体化に向けて再度南但馬自然学校の指導・助言を受けた際、もう一度活動エリアとなる場所の二度目の下見を行った。この指導・助言と下見をもとにもう一度プログラムを見直し、活動の具体化を進めていった。

自然学校の核となるコンセプトを決定し、プログラムの具体化を図る際にブレインストーミングを行った。特にプログラムの活動の具体化を図る際は、幾度となくフィードバックを繰り返した。

このブレインストーミングを数多く行ったことで、指導者の自然学校に対する姿勢はもちろんのこと、コンセプト、活動の流れの周知徹底、指導のあり方の統一等、指導者(教師)間の自然学校に対する共通理解が図れた。

児童にも、自然学校のプログラムを構成する際、意見を述べることにより参画しているのだという意識が芽生え、自然学校を実施していく上での意欲の向上につながった。また、自分たちの自然学校をつくり上げるという意識の高揚にもつながったと思われる。

コンセプトを明確にし、流れあるプログラムを構成したことにより、指導者(教師、指導補助員、救急員)、児童、双方が自然学校のねらいを明確に捉えることができ、一日一日充実した活動ができた。また、児童の活動の振り返りも次の活動に生かすことができ、グループ単位での活動ではあったが、その中で一人一人が成長する過程を目にすることができた。

評価面においても、コンセプトを明確にすることにより視点を持った評価ができ、指導者間の共通理解も図れたように思われる。

今回の自然学校を実施していく上で、プログラムを構成する一手法を学ぶとともに、プログラムを構成する上での過程がいかに大切であるかを痛感した。

|| 4 プログラムデザインを有効に機能させるための資料集

資 料

- (1) 自然学校におけるコンセプトとアクティビティ（例）

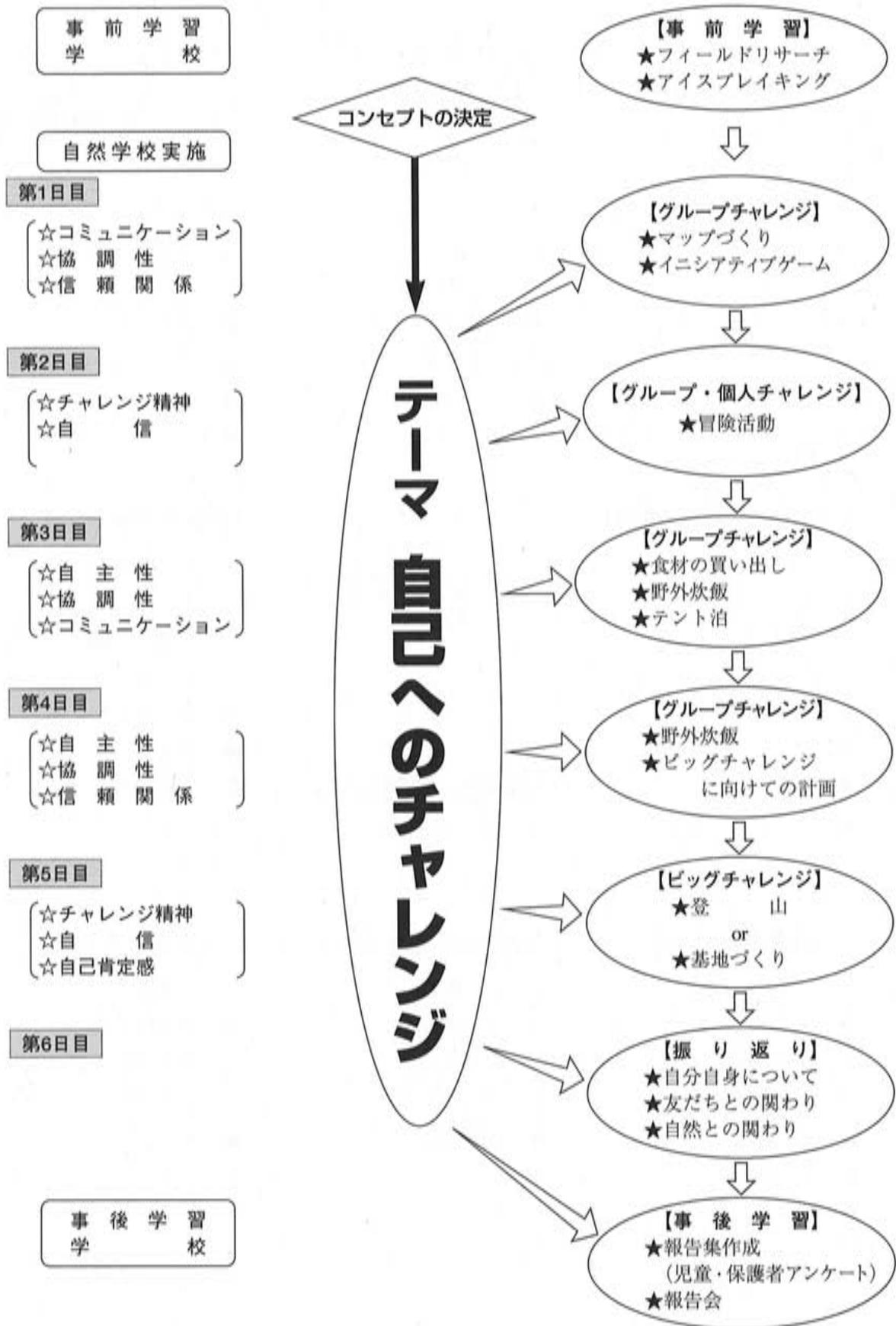
- (2) コンセプトにそったアクティビティデザイン（例）

(1) 自然学校におけるコンセプトとアクティビティ (例)

<p>【協調性を高める】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 協力 ☆ 団結 ☆ チームワーク ☆ 相互理解 ☆ 共感 ★ 野外炊飯 ★ 基地づくり ★ 漕艇体験 ★ オリエンテーリング 	<p>【信頼関係づくり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 共感 ☆ 思いやり ☆ 協力 ☆ 団結 ☆ 葛藤 ★ 冒険活動 ★ 野外炊飯 ★ テント生活 ★ 基地づくり 	<p>【コミュニケーション能力を高める】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 思いやり ☆ 相互理解 ☆ 表現力 ☆ 聞く ★ 冒険活動 ★ イニシアティブゲーム ★ ウォークラリー ★ マップづくり
<p>【チャレンジ精神の高揚】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 決断力 ☆ 自己との対峙 ☆ 達成感 ☆ 信頼 ★ 冒険活動 ★ ソロテント生活 ★ カヌー ★ サイクリング 	<p>  コンセプト と アクティビティ </p>	<p>【創造力を豊かにする】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 感性を磨く ☆ 表現力 ☆ 自然への関心 ★ 自然観察 ★ 自然物クラフト ★ 基地づくり ★ 草木染め
<p>【自信をつける】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 成就感 ☆ 達成感 ☆ 成功体験 ☆ 自己との対峙 ★ 登山 ★ 冒険活動 ★ ソロテント生活 ★ 火おこし体験 	<p>【自己肯定感を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 充実感 ☆ 成功体験 ☆ 共感 ☆ 自己との対峙 ★ 冒険活動 ★ 登山 ★ イニシアティブゲーム ★ カウンシルファイヤー 	<p>【自主性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 積極性 ☆ 問題解決能力 ☆ 適応行動 ☆ 相互理解 ★ テント生活 ★ 野外炊飯 ★ 基地づくり ★ イニシアティブゲーム

☆コンセプト ★アクティビティ

(2) コンセプトにそったアクティビティデザイン (例)



資 料

(3) チェックシート

- ◇ プログラムデザインチェックシート
- ◇ 自然学校運営チェックシート

(4) 振り返りシート

- ◇ 活動振り返りシート

プログラムデザインチェックシート

- 児童をどのように把握していますか？
- 先生方の思い、学校のニーズを要約されていますか？
- 保護者・児童のニーズを把握していますか？
- 実施場所は？ 実施場所の下見・調査、確認はできていますか？
- この自然学校で行うプログラムのねらいは何ですか？
- ねらいに近づくアクティビティ（活動）となっていますか？
- プログラムにゆとりや流れ（ストーリー性）がありますか？
- 「振り返り」や「分かち合い」の場面を確保していますか？
- プログラム実施手順の確認はできていますか？
- プログラム実施手順がスタッフ・児童に伝わりますか？
- プログラムの進行役は誰ですか？
- プログラム実施時の役割分担は決まっていますか？
- 指導補助員の確保、事前打合せはできていますか？
- 必要な道具・準備物は大丈夫ですか？
- 必要なワークシート等の用意はできていますか？
- 自然学校の最初の導入は大丈夫ですか？ まとめの仕方は？
- 救急体制（緊急対応マニュアル等）の確立とスタッフへの周知徹底は？
- 評価方法は？
- 事前説明会の資料作成、会場設営、役割分担は？
- 交通機関との交渉、連絡、確認は？
- 救急員の確保、事前打合せはできていますか？

自然学校運営チェックシート

◇ 指導補助員の雇用

- 1 指導補助員の雇用計画を立てましたか？
- 2 雇用契約書またはそれに代わるものを作成しましたか？
- 3 指導補助員に対して自然学校の概要、目的、内容、日程などを説明しましたか？
- 4 雇用前に指導補助員のもつ技能、資質についてチェックをしましたか？
(採用基準を明確にしていますか？)
- 5 事前に指導補助員の健康チェックをしましたか？

◇ 救急員の雇用

- 1 救急員の雇用計画を立てましたか？
- 2 雇用契約書またはそれに代わるものを作成しましたか？
- 3 救急員に対して自然学校の概要、目的、内容、日程などを説明しましたか？
- 4 緊急体制について説明しましたか？
- 5 雇用前に救急員のもつ技能、資質についてチェックをしましたか？
(採用基準を明確にしていますか？)
- 6 事前に救急員の健康チェックをしましたか？

◇ 児童把握

- 1 性格や好み、心の状態（心理状態）についての把握
- 2 自然体験度についての把握
- 3 交友関係についての把握
- 4 現在及び過去の疾病の把握
- 5 アレルギーについての把握
- 6 体温、睡眠、便通など体調の把握
- 7 児童一人一人の自然学校に対する目的・目標の把握（児童のニーズの把握）

8 児童一人一人の興味・関心・意欲のある活動の把握（児童のニーズの把握）

◇ 評価

○ 児童

- 1 児童の反応は豊かであったか。
- 2 児童に対し、ゆとりある適切なプログラムであったか。
- 3 目的・目標に近づくプログラムであったか。
- 4 児童の健康管理・健康状態を把握できていたか。
- 5 児童に対し安全教育ができていたか。
- 6 各活動の振り返りや分かち合いを実施し、次の活動に生かしたか。
- 7 一人一人の児童は生かされていたか。
- 8 児童同士の信頼関係が築けたか。
- 9 児童一人一人が新しい自分を発見できたか。
- 10 児童は自然にどっぷりと浸り、楽しむことができたか。
- 11 責任感・満足感・達成感等、児童に味わわせることができたか。
- 12 自然学校の目的・目標、個々の目的・目標に対しどの程度達成できたか、この自然学校でどのような力が培われたのか、アンケート等で個々の思いを把握することができたか。

○ スタッフ（教員・指導補助員・救急員等）

- 1 教員間の自然学校に対する共通理解がなされていたか。
- 2 スタッフの確保は適正にできたか。
- 3 スタッフの配置、役割分担は適切であったか。
- 4 スタッフ間の信頼関係は築けたか。
- 5 スタッフにプログラムのねらいを明確に伝え、理解させることができたか。
- 6 スタッフに対し明確な指示ができたか。
- 7 ミーティング時に反省事項、打合せ事項、引き継ぎ事項等記録し、児童に適切な

指導ができるよう周知徹底がなされたか。

8 プログラムに対する安全管理について適切な指示がなされていたか。

9 スタッフの健康管理はできていたか。

10 児童の活動の振り返り、分かち合いの際のファシリテーター^{注10)}としての役目が果たせたか。

11 児童一人一人の行動観察ができていたか。

○ 保護者

1 プログラム（活動）の趣旨を理解してもらうことができたか。

2 活動内容について明確に説明し、伝えることができたか。

3 安全管理に対する説明が明確になされたか。

4 児童の健康状況等の情報は収集できたか。

5 児童の事故、けが等に対し発生状況及び対応処置等、保護者に的確な説明・報告がなされたか。

6 負傷者等への誠意ある対応がなされたか。

7 自然学校終了後、自然学校で培った力等、児童の変化について保護者に対しアンケート等で情報を得る手立てがなされたか。

注10) ファシリテーター 活動をしていく上での援助者。

活動振り返りシート

日付： 月 日（ ）

名前： _____

- 私がうれしかったことは、

- 私がおどろいたことは、

- 私が気づいたことは、

- 私ががっかりしたことは、

- 私が学んだことは、

- 私にとって、必要だと思ったことは、

- その他に考えたこと、書いておきたいことは、

資 料

(5) プログラムデザインに生かす事前アンケート

◇ 児 童 編

◇ 保 護 者 編

◇ 教 員 編

教 員 編 (事前アンケート)

※ 自然学校を子どもたちにとってより意義のあるものとするため、目標の設定及び活動のあり方など考える上で参考にしたいと考えます。
アンケートにご協力いただきますようお願いいたします。

- 1 子どもたち（5年生）の実態をどのように把握されていますか？
- 2 子どもたちは自然学校にどのようなことを期待していると思われますか？
- 3 保護者は自然学校にどのようなことを期待されていると思われますか？
- 4 今回の自然学校で子どもたちにどのような力をつけさせたいとお考えですか？
- 5 自然学校に期待することは何ですか？
- 6 自然学校を実施するにあたり、気がかりなことはありますか？

資 料

(6) 自然学校の振り返りや評価に生かす事後アンケート

◇ 児 童 編

◇ 保 護 者 編

◇ 教 員 編

◇ 指 導 補 助 員 編

◇ 技 術 指 導 員 ・ 講 師 編

◇ 施 設 職 員 編

◇ 児 童 編 (事後アンケート)

※ あなたにとって、どのような自然学校になったでしょうか。自然学校を振り返り、アンケートに答えてください。

- 1 自然学校で一番印象に残ったことは何ですか？
()
それはなぜですか？
()
- 2 楽しかったことは何ですか？
()
- 3 しんどかったりつらかったことはなんですか？
()
- 4 ぜひ、またやってみたいと思うことは何ですか？
()
- 5 自分ができたと思うことに、次の中から選んで番号に○印をつけてください。
(いくつでもいいです)
① みんなと協力する ② 自然から多くのことを学ぶ ③ 健康や安全に注意する
④ 何事も最後までやりとげる ⑤ 自然を大切にする ⑥ ルールを守る
⑦ 自然の中で思いっきり遊ぶ ⑧ 何事にも楽しく取り組む
⑨ 自ら考え進んで行動する ⑩ 友だちや自分の新しい面を発見する
⑪ その他 ()
- 6 自然学校を終えて、これからどのようなことに気をつけて生活していこうと思いますか？
()
- 7 その他、自然学校を終えての感想を自由に書いてください。
()

◇ 保護者編 (事後アンケート)

※ 子どもたちの楽しみにしていた自然学校を無事終えることができました。自然学校を終えたお子様の様子はいかがでしょうか。自然学校を振り返ると同時に、今後の学校生活の中で生かしていきたいと思っておりますので、アンケートにご協力いただきますようお願いいたします。

1 子どもにどのような変化がありましたか？ (プラス面・マイナス面)

(プラス面 :)

(マイナス面 :)

2 保護者、家庭に何か変化がありましたか？

① あった ② ない

○ ①あった と回答された方にお尋ねします。それはどんなことですか？

(具体的にお書きください)

()

3 子どもに期待されていた力をついたと思われますか？

① かなりついた ② ややついた ③ どちらともいえない

④ ついていない

4 自然学校で体験したことの中で、今後の生活で生かせると思われることは何ですか？

()

5 今後、子どもたちに体験させてやりたいと思われることは何ですか？

()

それはなぜですか？

()

ご協力ありがとうございました。

教 員 編 (事後アンケート)

※ 自然学校を終え、自然学校の目標やプログラム計画、運営面等を振り返り、今回の自然学校の評価を行う上での参考にしたいと考えます。
アンケートにご協力いただきますようお願いいたします。

1 子どもたち(5年生)にどのような変化がありましたか？

(プラス面 :)

(マイナス面 :)

2 子どもたちの新たな一面を発見できましたか？

① できた ② できなかった

○ ①できた と回答された方にお尋ねします。それはどんな面でしょうか？
具体的にお答えください。

()

○ ②できなかった と回答された方にお尋ねします。それはどんな要因でできなかったとお考えでしょうか？

()

3 自然学校のねらいは達成できたと思えますか？

① 思う ② 少し思う ③ どちらともいえない ④ 思わない

○ ④思わない と回答された方にお尋ねします。その要因はどこにあったとお考えですか？

()

4 今回の自然学校での成果やよかったと思われることはどのようなことですか？

()

5 今回の自然学校での反省点はどのようなことだとお考えですか？

()

指導補助員 編 (事後アンケート)

※ 自然学校を終え、自然学校の目標やプログラム計画、運営面等を振り返り、今回の自然学校の評価を行う上での参考にしたいと考えます。
アンケートにご協力いただきますようお願いいたします。

1 事前に学校と十分な打合せをすることができたと思われますか？

- ① 思う ② どちらともいえない ③ 思わない

2 本校の自然学校のねらいは達成できたと思えますか？

- ① できた ② ややできた ③ どちらともいえない ④ できなかった
- ④できなかった と回答された方にお尋ねします。できなかった要因はどこにあったとお考えですか？
()

3 自然学校実施中、あなたと教員の連携は充分にとれていたと思えますか？

- ① 思う ② どちらともいえない ③ 思わない

4 自然学校を実施した中で子どもたちの変化に何か気づかれたことはありますか？

- ① ある ② ない
- ①ある と回答された方にお尋ねします。それはどんな面でしょうか？
具体的にお答えください
()

5 その他、本校の自然学校に関わっていただいたのご感想を自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

施設職員編（事後アンケート）

※ 自然学校を終え、自然学校の目標やプログラム計画、運営面等を振り返り、今回の自然学校の評価を行う上での参考にしたいと考えます。
アンケートにご協力いただきますようお願いいたします。

※ 自然学校実施校名

※ 自然学校実施期間

- 1 自然学校のプログラムを計画するにあたり、事前打合せ・下見の時期や内容等は適切であったと思われますか？ ご感想をお書きください。
(事前打合せ：)
(下 見：)
- 2 当校の自然学校実施プログラムについてお気づきの点をご自由にお書きください。
- 3 教員及び指導補助員等の子どもたちへの関わり方について、何かお気づきの点がありましたらご自由にお書きください。
- 4 活動していた子どもたちの様子についてご感想をお書きください。
- 5 本校の自然学校での安全管理、危機管理面についてお気づきの点がありましたら、ご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

自然学校振り返りシート

日付： 月 日 ()

名前： _____

- 私がうれしかったことは、

- 私がおどろいたことは、

- 私が気づいたことは、

- 私がかっかりしたことは、

- 私が学んだことは、

- 私にとって、必要だと思ったことは、

- その他に考えたこと、書いておきたいことは、

5 学校教育におけるプログラムデザインの活用（例）

学校教育においてプログラムデザインを活用して実施する小学校のクラブ活動と総合的な学習の時間の活用例を以下に示す。

(1) クラブ活動 編

◇ クラブ活動の意義・目的の理解

○ 小学校学習指導要領第4章第2

クラブ活動においては、学年や学級の所属を離れ、主として第4学年以上の同好の児童をもって組織するクラブにおいて、共通の興味や関心を追求する活動を行うこと。

○ 小学校学習指導要領第4章第3の1(3)

クラブ活動については、学校や地域の実態等を考慮しつつ、児童の興味・関心を踏まえて計画し実施できるようにすること。

○ 小学校特別活動解説書

クラブ活動のねらいは、「同好の児童が所属する集団の生活を楽しく豊かなものにしようとする意図の下に、共通の興味・関心を追求する活動を自発的、自治的に行うことによって、自主性と社会性を養い、個性の伸長を図る」ことにある。

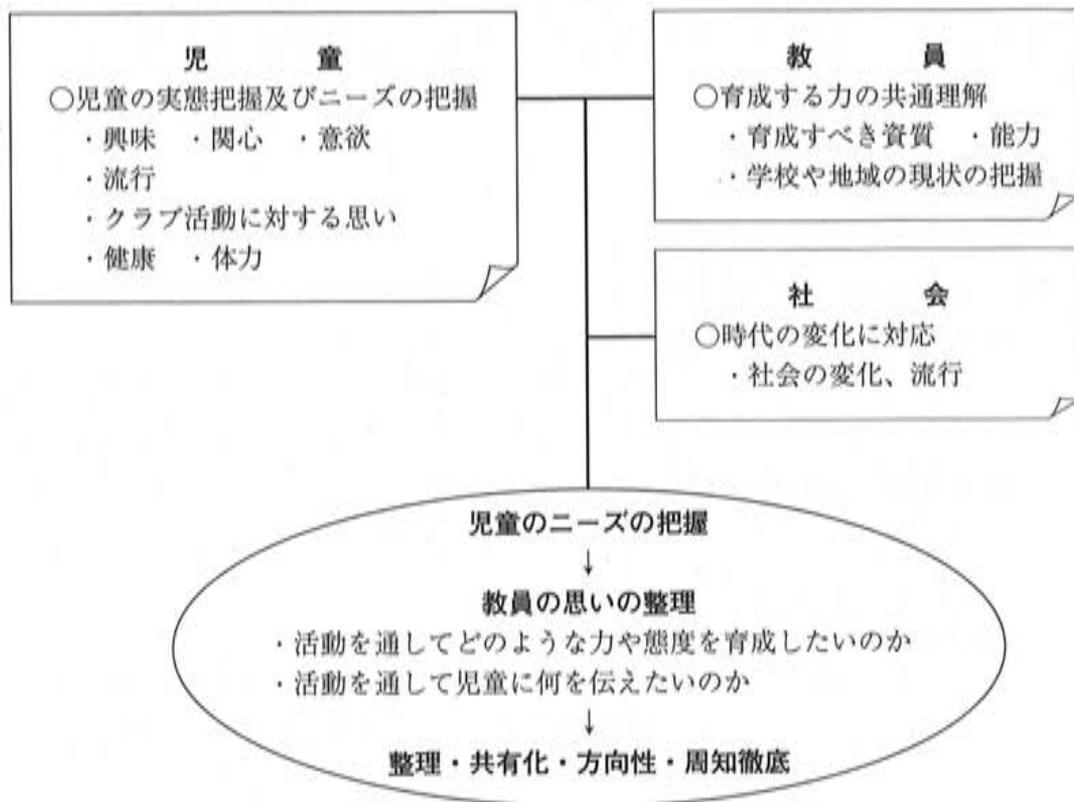
クラブ活動は異なる学年や学級の児童が一緒になって、協力しながら各自の能力や特性を十分に発揮し、伸び伸びと楽しく、豊かな集団活動が自発的に展開できる場である。共通の趣味・関心を追求するクラブ活動は、児童にとって魅力的であり、異年齢の仲間と協力しながらものごとを深く追求していく楽しさや成功したときの満足感は、より充実した新たな活動への動機づけとなる。

また、児童が自らの興味・関心を深く追求することによって、児童が自分の個性を発見し、伸長したりすることが期待できる活動である。

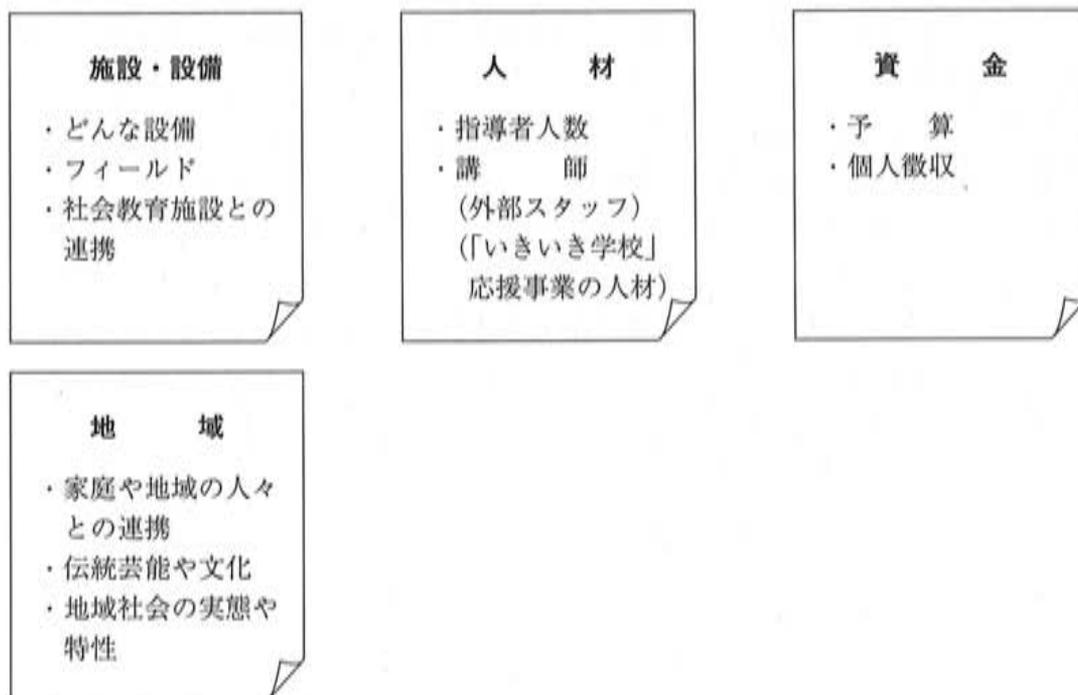
同好の友人と共通の興味・関心を追求する過程で、人間関係を深めることができる活動である。

教科等の学習への関心を高めたり、地域の活動に対しての関心の深まりやさらなる活動の広がりが期待できる。

① コンセプト（ねらい）の明確化



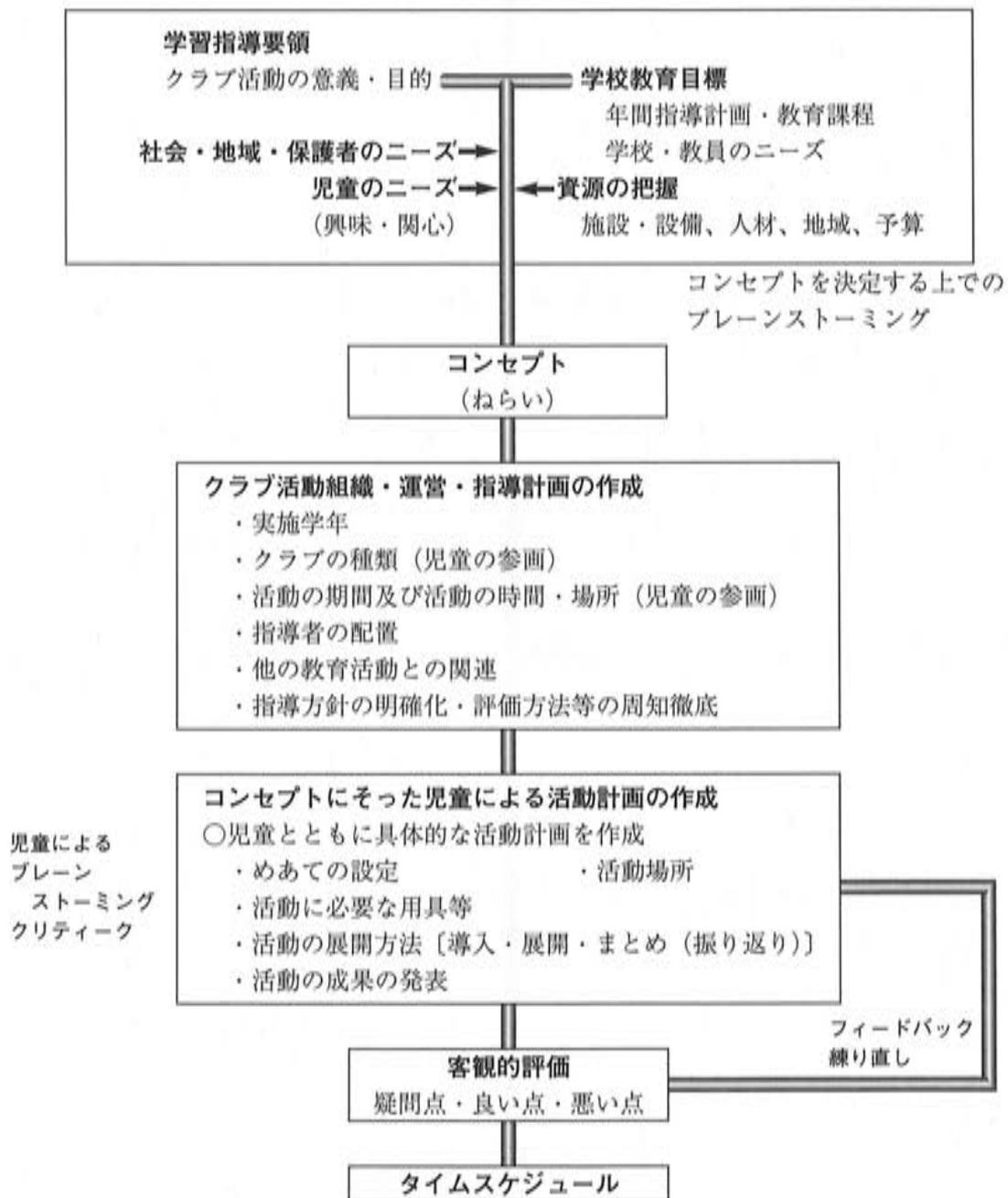
② 資源の整理



③ クラブ活動指導計画の留意点

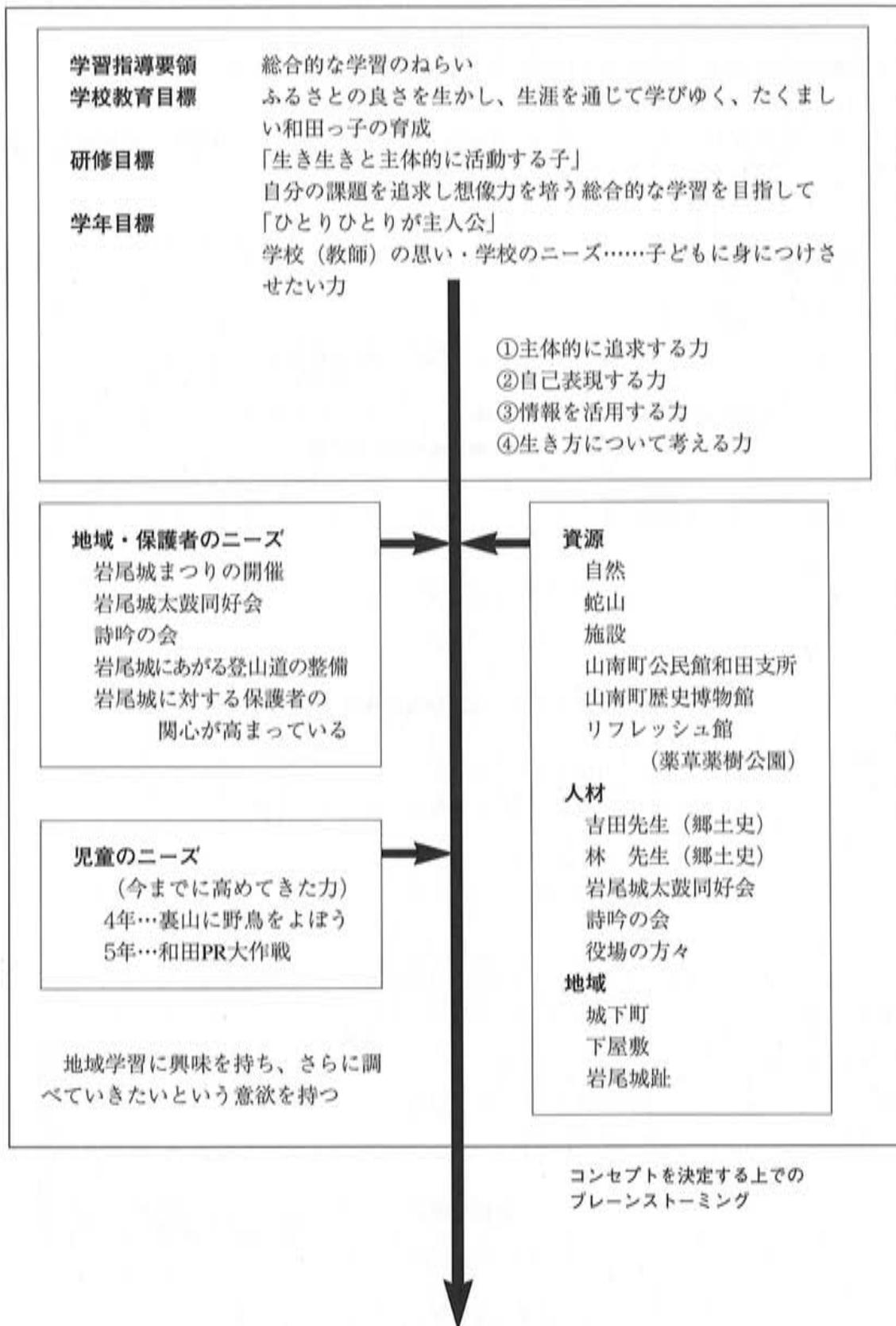
- ・クラブ活動の指導の「ねらい」の明確化
- ・児童の発達段階に即する
- ・教師の適切な指導の下に児童の発意・発想を十分に生かす
- ・活動計画は全校の教師により作成し協力体制の確立を図る
- ・他の教育活動との連携を図る
- ・学校や地域の実態に即し、地域の人材等の活用を図る（「いきいき学校」応援事業の活用）

④ クラブ活動立案構図



(2) 総合的な学習の時間 編

事例：山南町立和田小学校



コンセプト（ねらい）

- 子どもたちの生まれ育った和田地区を探検・調査することにより、和田地区のよいところや、人々の歩んできた歴史を知る。また、調査活動や他校との交流、まとめをすることで、ふるさと和田のよさを再認識し、ふるさとを愛する心を育てる。
- 収集した情報から必要なものを選んでいろいろな方法でまとめ、相手に分かりやすく伝えることができる。
- 課題を決め、その課題について自分の考えをもって意欲的に調査・観察をしたり、まとめたりすることができる。

コンセプトにそったプログラムの流れ・実施手順

- コンセプトを達成するためのアクティビティデザイン（児童の参画）
- | | | |
|------------|-----------------------|----------|
| 岩尾城太鼓で表現する | 古墳を調べる | 城について調べる |
| 城の模型を作る | 裏山再生計画 | 薬草を広める |
| テレビ会議をする | 貴重な生物について調べる（モリアオガエル） | |
| ホームページを作る | | |

フィードバック
練り直し

コンセプトにそったアクティビティデザインの組み合わせ

- つかみ（導入）
 - 城山に登ろう（一斉活動）
 - 城の話を聞こう（一斉活動）
 - 自分のテーマを考えよう（個人活動）
- 本 体（展開）
 - ・伝説を調べて劇や紙芝居にする（小グループ）
 - ・ホームページを作る（小グループ）
 - ・太鼓で表現（小グループ）
 - ・パンフレット作り（小グループ）
 - ・詩吟で城を表現（小グループ）
 - ・城の模型作り（小グループ）
- 振り返り・分かち合い
 - 岩尾城フェスタを開こう（一斉活動）
 - 自分を振り返ろう（個人）

客観的評価（児童の参画・ブレインストーミング・クリティーク）

- 疑問点・・・指導者がどのように指導にあたるか
グループの分け方をどうするか
フェスタの規模をどのようにするか
- 悪い点・・・去年のプログラムとよく似ている
盛りだくさんすぎて児童把握が難しい
山の上に城があるので何度も登れない
- 良い点・・・地域に根ざした学習ができる

体験学習法

はじめに

- 1 体験学習法
- 2 体験学習法の前提条件
- 3 体験学習法の循環過程
- 4 体験学習法のための環境づくり
- 5 ファシリテーターとは
- 6 プログラムの組み立てと流れ
- 7 体験学習法を取り入れた例
- 8 自然学校受入施設の自主事業及び教科学習等の実践事例について

はじめに

1960年代、農業社会から工業社会への転換を含む高度経済成長は、急速な都市化を進行させた。また、子どもたちから自然や遊び場を奪うとともに、核家族化・少子化現象を招き、テレビ、ゲーム、コンピュータが子どもたちの生活に大きな位置を占める結果をもたらした。そのために、子どもたちが野外で群れて遊ぶ姿は極端に減少し、地域社会における人間関係の希薄化や自然と直接ふれあう機会の減少が問題視されてきた。このような中、子どもたちが現在社会で失われつつある心の豊かさを育み、人間としてのあり方や生き方を考え、自主的・自発的能力を育てることを目的として、自然学校が実施されるようになった。

第15期中央教育審議会答申の中でも、「生きる力」を育むためには自然や社会の現実にあふれる実際の体験が必要であるとし、体験活動を一層重視することが指摘された。

しかし、教育現場においては、依然として不登校・いじめ等の課題が克服されておらず、相次いで起きている心痛む青少年の事件も含め、子どもの「生きる力」や「地域の教育力の再生」が重要な課題となっている。

さらに、21世紀を生きる子どもたちの教育にあっては、知識・技能はもちろん重要であるが、それとともに学ぶ意欲、思考力、判断力までを含めた真の意味での「学力」が求められている。しかし、現在の状況は、様々な面において結果や出来事にばかり目がいきがちで、それに至るまでの心の動きや失敗した経験をいかに成功へと繋げていくのかというプロセスが、幾分か軽視されているのではないだろうか。

このような現状を考えても、以下に記述する体験学習法には、今後の学校教育において大いに期待されるものがある。

1 体験学習法

こんな話がある。若い猟師がある日狩りに出かけた。ところがその日は一頭も獲物が捕れず帰ってきた。家にもどる道で歩きながらあれこれ考えた。「弓の張りが弱すぎたかな」「待ち伏せる場所が悪かったかな」と。帰って父親に今日の体験を語り、あれこれアドバイスをもらい、また寝床に入ってからさらに考えた。翌朝、「今日は弓の張りを替え、待ち伏せの場所をもっと高い位置にしよう」と作戦を考え、また狩りに出発した。この日の狩りがうまくいき収穫があれば、彼は失敗から学び知恵を積んだことになる。失敗すれば、また別の手を考えることになる。若い猟師はこのような営みを毎日繰り返しながら、しだいに一人前に成長していくのである。この繰り返しは「体験学習の循環過程」といい、体験学習法について理解するための最も基本的なモデルである。

次に、自然学校指導補助員のAさんの話をしてみる。自然学校に参加していたAさんが、子どもたちを引率してサイクリングにかけた時のことである。最後尾には教員がついていた。帰りの緩やかな上り坂にさしかかったとき、いつのまにか自転車の速さがAさんのペースになっていた。ふと気がつくと、子どもたちや教員が、はあはあ言いながらAさんの後についていた。あわてて

ペースを落として子どもたちにあわせた。後でこのことを振り返りながら、Aさんはともすると相手のことを忘れてしまう自分に気づき、そのことから指導補助員というのは、いつも相手のことを思って行動しなければならないということを学んだという。そして、そのことは後のAさんの対人行動に大きな影響を与えることになった。そのようなことは、私たちの周りでいっぱい起きているが、意識せずに過ごしてしまっていることが多いのではないだろうか。

体験学習法は、このように私たちが日常生活の体験から、あまり意識せずに学んでいる学び方を教育方法として構造化したものである。

何らかの体験をすれば、そのことだけで学習したとするものではない。「今、ここで」の体験によつての気づきを大切に、さらには、共に体験した人と気づいたことや感じたことを分かち合い、その理解から学びを深め、次の行動へと生かしていく循環過程として構造化された教育手法を「体験学習法」と呼んでいる。

知識伝達型の学習方法は、魚を求めている人に魚を与える手法であるのに対して、体験学習法は、魚の釣り方を教える手法であると言える。すなわち、いかに魚を釣るかを学ぶことは、その後魚が欲しいときには自分で釣れるということである。そのような学び方を学習するのも体験学習法である。

2 体験学習法の前提条件

(1) ファシリテーターの存在（詳細は「5 ファシリテーターとは」を参照）

あくまでも参加者主体の学習である。教師の役割をするものは、学習の場の設定、課題の準備・提示などを行うが、指導ではなく学習促進のための援助的な役割を果たす。また、体験の内容そのものにはあまり介入せず、体験したことの明確化や概念化の段階において関わるのが普通である。

(2) 気づきの概念化

体験は、気づきや感じたことの確認や理解に終わるのではなく、理論との統合によって概念化（仮説化あるいは一般化）されて、現場への適応や新しい状況での試みに生かされるものである。

(3) 学び方を学ぶ

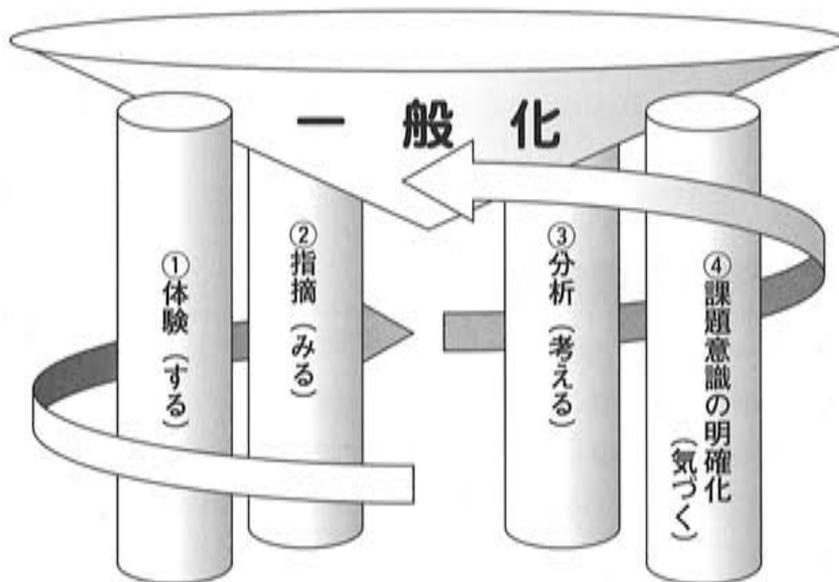
体験学習法は、学ぶことによる知識の習得だけを目的とするものではなく、学び方を学ぶことを目的とする。参加者が、自分自身で主体的な学び方を身につけて、現実の生活の中で体験学習法の構造である循環過程を生かしてこそ、成長の助けとなる。

3 体験学習法の循環過程

体験学習法で大切なのは、体験を学びに結びつける「循環学習のプロセス（過程）」である。

体験学習法は、「体験（する）→指摘（みる）→分析（考える）→課題意識の明確化（気づく）→試みる」を繰り返し、一般化（わかる）を図るものである。このうち「指摘・分析・課題意識の明確化」が「振り返り」にあたる。

体験学習は、グループの話、作業など内容的な側面（コンテンツ）よりも、グループの中に起きている関係的経過（プロセス）に重きを置く。実際に行動したものはとても小さいが、「振り返り」をすることで色々な意見が出てくる。これを実生活で生かすことに意味がある。体験学習法は、学ぶことによって知識の蓄積を目的とするものではなく、「学び方を学ぶ学習」だからである。



- (1) 体験（何かしてみる）・・・自分の具体的な体験

内容

教室・フィールド・生活の場などで行動する



動く・見る・言うなど

- (2) 指摘（何が起こったか、プロセスをみる）・・・体験の分かち合い

内容

そこで起こった事柄について振り返る

- (3) 分析（どのように、なぜ起こったのか、プロセスを考える）・・・事柄の奥にあるもの

内容

事柄の分析

事柄の意味すること、そのようなことが起こった理由、その背景にある流れをつきとめる

(4) 課題意識の明確化・・・体験が私に教えてくれたもの

内容

分析し、考察したことを基にして、自分なりの仮説を立てる



次の機会には、どのような行動をとるか（分からなかったことを明らかにしておくことも必要）

(5) 試みる

内容

仮説（分かったこと）を次の場や機会にどのように適用するのか、具体的に計画を立て積極的に行動し取り組む

具体例1

【体験】

- ・山で基地づくりをした。
- ・5人ずつのグループ単位で実施した。
- ・目的は、「協力して基地をつくろう」

【指摘】

Q：どうだった？

「楽しかった」「あまり協力できなかった」「協力できた」「あまり楽しくなかった」

【分析】

Q：なぜ、そう思ったの？ どんなことを感じたの？

「何もしていない子がいて腹が立った」「何をしているのか分からなかった」「自分の意見を聞いてもらえなかった」「じゃまをする子がいた」「いい基地ができた」「あまり基地づくりができなかった」

【課題意識の明確化】

Q：どうすることが、力を合わせるといことかな？

「困った人がいれば、助けてあげる」「力がある時は、みんなでとりかかる」「一人でできない作業の時は、声をかけてみんなに手伝ってもらおう」「一人一人が自分の役割をがんばって果たす」「自分の役割が決まっている」「自分勝手な行動をしない」「協力する」「声をかけ合う」

【試みる】

明日の野外炊事も、今出たような意見に気をつけながら取り組んでいこうね

具体例2

【体験】

- ・バスケットボールのゲームをした。
- ・3人对3人で、スリー・オン・スリーのルールで行った。
- ・目的は、「クラスの全員（一人一人）が楽しむ」

【指摘】

Q：バスケットボール、どうだった？

「おもしろかった」「すごく楽しかった」「おもしろくなかった」

【分析】

Q：何がおもしろかったの 何がおもしろくなかったの？

「パスがたくさんきた」「シュートがたくさんできた」「シュートがよく決まった」「たくさん動いた」「パスがほとんどこなかった」

【課題意識の明確化】

Q：どういうときに、おもしろいって感じるのかな？

「パスしてもらえると、自分も参加している感じになる」「パスがこないと、自分はそのチームに必要ないんだと感じる」「人からのパスを待っているだけじゃなくて、自分からボールを取りにいたり、シュートをしたりすると楽しくなる」「みんなで立てた作戦が成功すると、協力したという感じがして気持ちがいい」

Q：みんなが楽しむには、どういうことが必要かな？

「人を無視しない。下手だからといってあきらめない」「ルールを守る」「協力する」

【試みる】

Q：みんなで何かをして楽しもうというときには、同じことが言えるかな？

「言える」

じゃあ、もう一度やってみようか

* 基地づくりやバスケットボールの振り返りで得た「人を無視しない」「ルールを守る」「困った人がいれば助けてあげる」などは、他の生活場面にも生かされるようになる。

* 体験を通して学んだり発見したりしたことが、次の新しい場や機会でも積極的に試みられないと、体験学習は完結するものではない。

「振り返り」について

体験学習の循環過程である、「①体験→②指摘（プロセスをみる）→③分析（プロセスを考える）→④課題意識の明確化（気づく）→⑤試みる」の過程を踏まず、体験のみで楽しく終わってしまうことがある。いわゆるゲームである。体験学習とゲームの大きな違いは、必ず「振り返り」という時間があるかないかである。

体験学習は、「気づきの学習」とも言われるように、自分や他者のこと、お互いの関わり、グル

ープのことを気づくことから、ありようを検討し変革することに成長を求めている。そのために、「振り返り」の時間が必要になる。

しかし、それだけでなく、気づいた事柄がなぜ起こったのか、今後の課題としてどのようなことを試みていけばよいかなど、体験学習の循環過程のステップを踏んで、考察を深めていく作業も、全て「振り返り」の作業と言える。

「振り返り」の時間こそ、体験学習の要であり核にあたると言える。

振り返りのしかけについては、下記のようなことが考えられる。

「話し合い」「振り返りシートの活用」：様々な体験後に有効である。

「作文」「詩」「手紙」：感動や満足感など心の高まりが期待できる体験後に活用できる。

「写真」「ビデオ」「録音」「絵」：自然観察などの後、発見や感動を互いに分かち合う場面に活用できる。

「歌」「新聞」：行事終了後や一連の流れある体験のまとめの段階として活用できる。

「発表会」「展示会」「コンテスト」：みんなで力を合わせて取り組んだり物を作る体験後、気持ちを分かち合ったり互いの良さを認め合ったりする場面に活用できる。

「体で表す」「色で表す」「音で表す」：低学年など自分の考えや気持ちを十分に表現できない子どもたちに有効である。

これらのしかけを活動のまとめとして終わらせるのではなく、課題意識の明確化へと発展させていくための手立てとして扱わないと、振り返りとはならない。

4 体験学習法のための環境づくり

「振り返り→分かち合い」の段階において、ただ感想を言い合うだけでなく、「今ここで何を体験して、その体験で自分やグループに何が起こったのかを見つめ、自分及び自分と他者、自然等との関わりについて考え、その結果を自分なりにまとめてみる」ということを参加者自身が感じ考えられることが大切である。

また、体験学習法においては、自由に表現できる場作りが大切である。無理強いしたりしては、かえって学習の効果は薄れてしまう。人前での話や表現が苦手な人が、自由な雰囲気の中で自分の思いを少しでも出せるようになれば、この体験学習法は、コミュニケーションのスキルアップトレーニングにもなっていく。

心が開かれれば、人の意見や考えが自然に吸収しやすくなる。今まで無意識に無視していたり考えないようにしていたことに耳を傾け始める。

人間にはそれぞれ自己防衛という心の壁があると考えられる。この壁は自分自身のイメージや自分の考え方、価値観を守ろうとする砦の壁のようなものである。人は怖がり、自分が傷つきたくないで壁をはりめぐらす。ここで大切なことは、「自分で自分の壁を下げることはできないが、他人の壁は下げてあげることができる。」ということである。この性質を利用して、グループの仲間の各々が他人の壁を下げるように努力することで、自分の壁を下げるができるのである。

それと同時に心が開かれやすい環境をつくり出すためには、プログラム開始前にグループの仲

間全員の同意のもとに簡単な約束をつくる必要もある。具体的には、「自分を含めメンバーをけなしたり軽んじたりしない」「自分に正直であること」「ネガティブなことにこだわらないこと」…などの約束が挙げられる。その約束があつてこそ、人が安心して心を開くことができる環境が作り出され、そこでお互いを感じたことを率直に表現し合い、自分の知らなかった自分への気づきも期待できるのである。

5 ファシリテーターとは

体験学習法では、学習の機会提供者をファシリテーター（促進者、援助者）と呼ぶ。ファシリテーターは、状況に応じ「指導者、先生、トレーナー…」と様々な機能を果たす。しかし、その根本的姿勢は、学習者の学びが促進されるように適切な援助をしながら状況を整えることである。

また、ファシリテーターの役割としては、学習者の「心を開く」ための雰囲気づくりも大いに求められる。例えば、活動前の導入、振り返り前の気分ほぐし、ファシリテーターへの信頼感の醸成が期待される。

ファシリテーターの基本姿勢

*主体的にその場（グループ）に関わっていること

「今、ここで」の状況判断が可能なのは、自分の気持ちや感情、自己内のプロセスにも気づいているからである。

*柔軟性と決断する勇気をもつこと

学習者の状況により、目標や計画に厳密に沿う必要はないという柔軟性を持つことも大切である。

*他者の枠組みで把握する努力ができること

学習者の話を傾聴しようとするとき、物事を常に相手やグループの枠組みでとらえることが大切になる。

*プロセスへの介入を理解し、必要に際し実行できること

ファシリテーターの介入は、グループメンバーの言動の背後にあるプロセスに関して行われることが望ましい。そのためには、グループに起こるプロセスから目を離さず把握して適切な介入が行えなければならない。

*相互理解のための自己開示を率先できる、開放性があること

ファシリテーターは、自分を厳しい目で見つめ、時にはグループメンバーからの批判も認めて受容する必要もある。そのような中で、自分を防衛し「逃げる」ようなことがないよう心がけなければいけない。

ファシリテーターの技術

*積極的に受容する態度

・よく聞く（参加者の発言を受け止める）

- ・発言を引き出す（適切な問いかけをする）
- ・対象に応じた接し方ができる

*** 雰囲気づくり**

- ・グループ全体、個人個人に対して参加しやすい雰囲気をつくる
- ・不必要な不安を取り除く
- ・適切な動機づけをする（興味・関心を高める）
- ・心を開かせる

*** ユーモア**

- ・人々が率直に意見を述べれば述べるほど、時に険悪な状況になるかもしれない。雰囲気を変えるためのユーモアをもつ。ただし、誰かの発言を題材にしてはいけない。

*** はっきりした指示**

- ・言葉の意味を把握している

*** 時間配分**

- ・状況に即した対応

*** 参加者に感動を与える**

|| 6 プログラムの組み立てと流れ

体験学習の具体的なイメージとしては、「アクティビティ」と「プログラム」という言葉で表される。

「アクティビティ」とは、個々の具体的な目標やねらいをもった最小単位の活動のことで、「プログラム」とは、一つ一つのアクティビティを組み合わせて、一連の流れ、つながりをもたせた全体を示す。例えば運動会の場合、運動会の個々の種目（リレー、綱引きなど）が「アクティビティ」、それぞれの種目の流れなどを考えてつくった運動会全体が「プログラム」となる。

「プログラム」を組み立てる場合、体験学習法の重要なポイントである「導入→体験→振り返り→分かち合い→実践へ」の流れを念頭において、アクティビティを組み合わせていく。

・「プログラム」全体の目標やテーマを決める

一連の流れで組み立てをするので、統一の目標やテーマがある方がまとまる。

○○○○を通して○○○に気づく

行為目標

成果



この目標・ねらいが大切

何がどう変われば、このねらいが達成できたと言えるのか



この設定が大切である

・対象者の年齢、レベル、ニーズを考える

より効果的な学びにするために、対象者にあったプログラムを提供する。

・時と場所を選ぶ

同じアクティビティでも、時と場所が変われば展開が異なる。

・アクティビティをもとに、つながりと流れを考える

個々のアクティビティのねらいをもとに、つながり・流れをつくり、全体の目標が達成できるように工夫する。

・プログラム運営に配慮する

運営時に、プログラムのねらいに外れるような行為があっては台無しである。

導入：興味づけ → 展開：プログラムの中心 → 振り返り・分かち合い・実践

*導入では、活動が活発化する雰囲気づくりや、興味が湧く内容にするよう配慮する。この流れは、プログラムだけでなく、アクティビティを実施する際にも活用する。

7 体験学習法を取り入れた例

(1) 自然学校

自然学校においては、「体験だけ学習」になっているという声を聞くことがある。活動をすればそれで終わり、次の活動へと進んでいく。ただ単に自然の中に飛び込み、自然体験をするだけでも学びは大きいと思われるが、「体験学習法」を用いることで、さらにその体験からの学びを深め、さらには日常生活のありようにまで発展させることが期待できる。

様々な体験は、体験の乏しい子どもにとってみると、すごく刺激的であり、感激もする。また、指導者にとってみると、その場では生き生きとした子どもたちの様子を見ることができのかもしれない。しかし、あらかじめ準備しておいた体験をさせただけで終わっては、その体験から子ども自身は何を気づき、何を学んだと言えるだろうか。有効な場面において「体験学習法」を活用し、子どもたちの学びを確実にすることが大切である。

野外炊事やオリエンテーリングなど、グループで協力すべきことが求められる活動において、実施後に振り返りを行い、その過程の中でグループや個人に何が起こったのか、その原因は何なのか、今後このグループはどのようなことに留意し取り組んでいけばよいのか、そして、この話し合いを次の活動に生かし、さらなるステップアップを図っていくということが大切ではないだろうか。

また、自然物クラフトや基地づくりなど技能を要する活動や自然観察・ナイトハイクなど五感を働かせる活動においても、その中で子どもたちは様々なことに気づき新しい発見をし疑問を感じることも多いであろう。そのようなことを個々が振り返られる時間を確保していくことが大切であり、やりっぱなしではただの体験だけ学習に終わってしまうのではないだろうか。

意識的に気づきを深める体験学習法を用いることにより、子どもたちの感受性を高めるだけでなく、自然体験から学んだことをさらに新しい場面にどのように生かすことができるかなど、まさに自然体験を通して子どもたちの日常生活のありようにまで目を向けていくことができる

と考える。
常にこの体験学習法を用いるということではない。効果的かつ状況により必要な場面で活用していくものである。

「自然学校活動プログラム例」

(テーマ：自然に親しむ)

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
午前		自然散策 バード ウォッチング アニマル トラッキング等	施設外 ハイキング	野遊び	自然物クラフト	早朝登山
午後	ネイチャー ゲーム	発表会 (振り返り)	詩をつくる (振り返り)	展示会 (振り返り)	展示会 (振り返り)	
夜	ナイトハイク	テント泊	ボンファイヤー			

1日目：自然を身近に感じ、五感を働かせることの大切さを知ることにより、5泊6日の動機づけを図る。

2日目：五感を働かせ、動物の生息に気づいたり野山の草花や樹木に関心をもつことにより、より自然を身近に感じる。

発表会（振り返り）：自然散策での活動でデジタルカメラを持たせ、撮ってきた草花や動物または痕跡を見せ合い、班ごとに活動の様子や発見を発表する。

3日目：五感を働かせて自然を散策し、新たな発見や疑問を数多く感じる。

詩をつくる（振り返り）：ハイキングを通しての新しい発見や実施後の感想を班ごとに話し合い、そのことを詩で表す。

4日目：自然物を使っの様々な遊びを体験することにより、日常の遊びを考え直す機会とする。

展示会（振り返り）：草花で作った思い思いの作品を鑑賞し、工夫したことなどを話し合う。

5日目：自然物がクラフトの様々な素材となることを理解するとともに、工夫して物を作ることの楽しさを味わう。

展示会（振り返り）：素材集めの楽しさや工夫したり苦勞したことを発表し合いながら作品を鑑賞し、互いの良さを認め合う。

6日目：朝日が昇る様や周りの風景の色の変化を感じるにより、自然からの感動を味わう。

(テーマ：自然で遊ぶ)

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
午前		ロープワーク	基地づくり	基地遊び 山遊び	川遊び	基地片付け
午後	野遊び	基地づくり				
夜	基地づくり計画	班会議 (振り返り)	基地遊び計画 基地泊	川遊び計画	カウンスルフ アイヤー (5日間の振り返り)	

1日目：自然物を使って遊ぶことにより、自然の中で過ごすことの楽しさを味わう。

2・3日目：住を意識し、友だちと協力・創意工夫してつくることによって遊びの楽しさを味わう。

班会議（振り返り）：基地づくりの途中経過について話し合い、さらに素晴らしい基地にしていくための方策や協力について確認し、翌日のめあてを明確にする。

4日目：山での様々な遊びを発見・体験することにより、日常生活の遊びを考える。

5日目：川での様々な遊びを発見・体験することにより、日常生活の遊びを考える。

カウンスルフアイヤー（5日間の振り返り）：火を囲み、全員で5日間の思い出を語り合う。

6日目：片付けと清掃を行うことにより、自然に感謝する気持ちを高める。

(テーマ：自然で作る)

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
午前		竹細工 ・竹食器 ・竹笛	素材・材料集め 自然物クラフト	野遊び 食卓の置物・ 飾り物制作	野外炊事 (食卓には自然を感じる工夫を)	共同制作 (自然物を使って)
午後	自然観察 (竹観察を中心に)	班会議 (振り返り)				
夜		翌日の計画	作品鑑賞会 (振り返り)		カウンスルフ アイヤー (5日間の振り返り)	

1日目：自然とふれあうとともに、竹について知る。

2日目：竹細工を通して、道具の正しい使い方を知る。

班会議（振り返り）：道具や竹について気がついたことや、作業を通しての感想などを話し合い、自然物クラフトへの意欲づけを図る。

3日目：自然物を使って、個々に工夫しながらクラフトを仕上げ、作る喜びと自然物とふ

れあう楽しさを味わう。

作品鑑賞会（振り返り）：素材集めの楽しさや工夫したり苦勞したことを発表し合いながら作品を鑑賞し、互いの良さを認め合う。

4日目：草花などを使っての楽しい遊びを体験し、素材を加工して食卓を飾る置物を作る。

5日目：木を捨てることから野外炊事を実施する。食卓を自然物で飾ることにより、日常の食卓風景をより豊かにする方法や楽しさに気づく。

カウンスルファイヤー（5日間の振り返り）：5日間の感想を班ごとに話し合い、そのことを替え歌にし、みんなの前で発表し合う。

6日目：自然の素材を使っての制作をみんなで工夫して取り組むことにより、協力することの楽しさを感じる。

（テーマ：人とのふれあい）

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
午前		野遊び 班共同制作	共同制作	野外炊事	地域調査	山遊び
午後	イニシアティブゲーム	・森のレストラン ・森の美術館等	森の動物園	班会議 (振り返り)		
夜	ボンファイヤー	グループファイヤー（振り返り）			キャンドルサービス (5日間の振り返り)	

1日目：ゲームやファイヤーを通して信頼関係を深めるとともに、緊張をほぐす。

2日目：野山にある素材を使って作品を班ごとに制作することにより、協力する心を培う。

グループファイヤー（振り返り）：班ごとに火を囲み、活動を通して気づいたり工夫したことなどを話し合い、共同制作「森の動物園」への意欲づけを図る。

3日目：子どもたち全員で一つのものを作ることにより、心を一つにする。

4日目：野外炊事を通して、協力するという気持ちを確かなものにする。

班会議（振り返り）：努力したり困ったりしたことなどを話し合い、自分や班の取組で良かったことや今後気をつけていく必要のあることなどを確認し合い、地域調査にその反省を生かす。

5日目：方言や地域行事の聞き取り調査を通して、地域の人とふれあう。

キャンドルサービス（振り返り）：班ごとに5日間の思い出を絵で表し、説明を加えながら発表し合う。

6日目：友だちとのふれあいを通して、日常生活での遊びを考える。

(2) 教 科

学習指導要領（小学校）では、教科の目標において次のような言葉や文が記載されている。「伝え合う力を高める」「思考力」「想像力」「進んで生活に生かそうとする態度を育てる」「問題解決の能力」「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせる」「生活を工夫しようとする実践的な態度を育てる」等である。生活科の目標は、まさに体験学習の要であり核にあたる「振り返り」の時間を重視しており、他教科のねらいにおいても、体験学習法が目指すところと共通している部分は多く、あらゆる教科学習に体験学習の手法を取り入れることが可能であると考えられる。

(3) 総合的な学習の時間

学習指導要領（小学校）では、「総合的な学習の時間においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとする。①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。②学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。……総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。①自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。……」と記述してある。野外活動や自然体験活動を通して教育を行う野外教育や体験学習法の果たす役割の大きさが見え隠れしている。

(4) 道 徳

学習指導要領（小学校）では、「各学校においては、特に低学年では基本的な生活習慣や善悪の判断、社会生活上のルールを身につけること、中学年では自主性、協力し助け合う態度を育てること、高学年では自立心、国家・社会の一員としての自覚を育てることなどに配慮し、児童や学校の実態に応じた指導を行うよう工夫すること。また、高学年においては、悩みや心の揺れ、かっ藤等の課題を積極的に取り上げ、考えを深められるよう指導を工夫すること。……児童自らが成長を実感でき、これからの課題や目標が見つけれられるよう工夫する必要がある。……道徳教育を進めるに当たっては、学校や学級内の人間関係や環境を整えるとともに、学校の道徳教育の指導内容が児童の日常生活に生かされるようにする必要がある。」と記述されている。「体験（する）→指摘（みる）→分析（考える）→試みる」を繰り返し、一般化（わかる）を図ることにより日常生活に生かしていくというのは、まさに体験学習法の循環過程である。

(5) 特別活動

ア 学級活動

- ・望ましい人間関係の育成

イ 児童会活動

- ・学校生活の充実と向上のために諸問題を話し合い、協力してその解決を図る。

ウ クラブ活動

- ・ 共通の興味・関心を追求する活動

エ 学校行事

- ・ 体育的行事……………安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動
- ・ 遠足、集団宿泊行事……………自然や文化などに親しむとともに、集団生活のあり方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動
- ・ 勤労生産、奉仕的行事……………勤労の尊さや生産の喜びを体得するとともに、ボランティア活動など社会奉仕の精神を涵養する体験が得られる活動

* 児童会活動やクラブ活動、学校行事等、様々な取組が各学校で実施されている。しかし、計画段階や実施することに大半の時間を注ぎ込み、終わった後に個々の子どもたちが何を感じたのかを振り返る時間が設けられていないという場合も多いのではないだろうか。全ての行事に振り返りの時間を設ける必要はないが、素晴らしい体験を今後の日常生活に生かすための手立てなしでは、課題意識の明確化や新しい状況での積極的な試みへと発展させていくことは難しいと考える。

8 自然学校受入施設の自主事業及び教科学習等の実践事例について

「これがキャンプだ！ 原始人」の実施について

県立南但馬自然学校

- 1 目的 ・自然とのふれあいを通して、自然に対する興味や関心を育てる。
 ・異年齢集団の活動を通して、協力や思いやりの心を育てる。

2 期日 平成15年7月22日（火）～7月25日（金） 3泊4日

3 日程

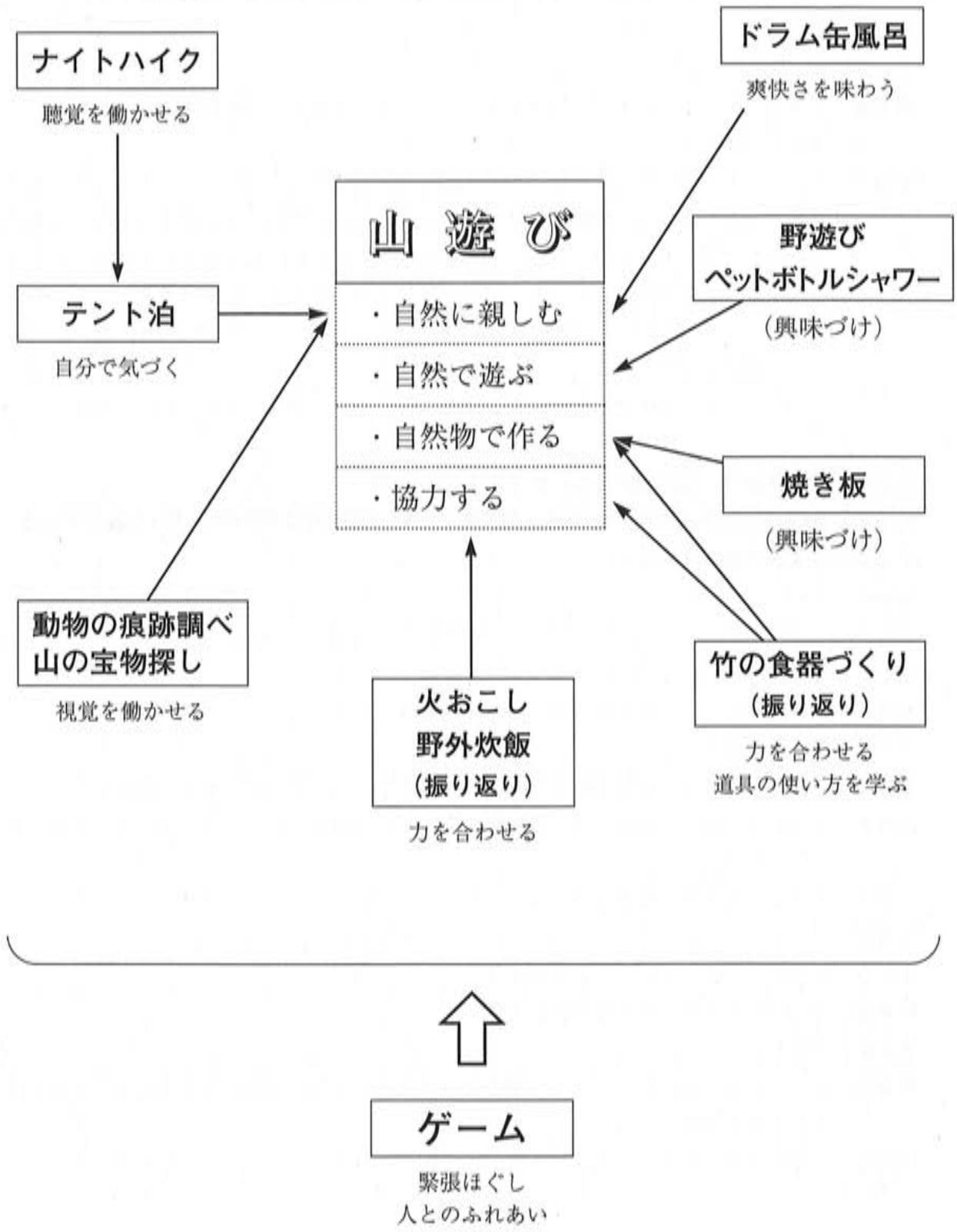
13:30 開校式	6:30 起床	6:30 起床	6:30 起床
14:00 ゲーム 野遊び	7:40 朝食	7:40 朝食	7:40 朝食
16:00 ペットボトルシャワー ドラム缶風呂	9:00 動物のこん跡調べ 山の宝物探し	9:00 火おこし 野外炊事 振り返り	9:00 山遊び 記念撮影
17:30 夕食	12:00 昼食	14:30 焼き板	12:00 昼食
19:00 ナイトハイク	13:00 竹の食器づくり 振り返り	17:30 夕食	13:00 4日間の振り返り
20:30 入浴	16:30 テント泊準備	19:00 入浴	13:40 閉校式
22:30 就寝	17:30 夕食	20:30 清掃・荷物整理	
	19:00 入浴	22:30 就寝	
	21:30 就寝(常設テント泊)		

4 参加者 県内小学生45名（3年生から6年生）

5 実施場所

県立南但馬自然学校

プログラム構成



ナイトハイク

*** 19:30 ナイトハイクにはまだ明るい。生活棟裏に子どもを集めて事前説明をする。**

指導者：ナイトハイクって何だ。

子ども：夜の散歩。肝試し。

指導者：じゃあ、これまでにナイトハイクをやったことがある人。(挙手を促す)

子ども：誰も手を挙げない。

指導者：ナイトハイクは肝試しじゃないよ。「人間は視覚の動物」と言われています。人は他の感覚で情報を得ても、最終的に目で確認している。日が沈み辺りが暗くなると大変不安になる。闇を怖いと感じるのは、勇気がないのでも臆病でもない。それは、人間としてごく当たり前のこと。でも、目が使えない分、耳や目、皮膚の感覚、それに勘が鋭くなる。夜の山は、人間が行くところではない。動物たちの世界だ。「よその家にとっとお邪魔させてもらう」そんな気持ちでおしゃべりはせずに、明るいときには気づかなかったものを感じよう。運がよければ動物たちに出会えるかもしれないよ。

***生活棟エリアを離れ、散策道きつねコースに入る。**

直前まで騒いでいた子どもたちも神妙な面持ちで、様々な物音に耳を傾けている様子だった。

子どもたちをヌタ場に案内した。

指導者：これは何だと思う。

子ども：(一同真剣にヌタ場を見入る。一人が動物の足跡を発見) 足跡や。(他の子どもも次々に足跡を見にやってくる)

指導者：この足跡は誰の足跡かな。犬や猫の足跡と比べてどう。

子ども：堅い蹄がある。

指導者：(蹄をもつ身近な動物である牛と馬を例に出し、ヌタ場に残る足跡の解説をする)

指導者：ここのヌタ場は、動物たちが体に泥を塗っている場所です。じゃあ何故こんなことをするんだろう。

子ども：暑いから水浴び。動物のプール。

指導者：プールじゃないんだ。どちらかというとお風呂かな。

子ども：体に泥をつけてきれいにしている。

指導者：泥をつけるとますます体が汚れるぞ。

子ども：(考え込む)

指導者：ちょっとあの木を見てごらん。(動物がヌタ場からあがった後、体をこすりつけ泥が付着した木を観察)

指導者：(動物が泥浴びをする効能等を解説し、みんなで木に付着した獣毛を観察)

*** ようやく薄暗くなってきた。きつねコースをさらに登っていく。シカに遭遇。シカの甲高い警戒音が聞こえる。一同歩みを止めて耳をそばだてる。その時、散策道の先の方で1頭シカが横切るのを数人の子どもが目撃する。子どもたちは、声を出さずに顔を見合わせる。**

指導者：今の高い声は何だろう。

子ども：今まで聞いたことのない声だ。サル。(みんな不思議な面持ち。表情に恐怖をにじませた子どももいた)

指導者：答はシカの鳴き声です。

子ども：シカってあんな高い声で鳴くの。

指導者：(春と秋に聞こえる男シカの求愛の鳴き声を比較に出し、警戒音の解説をする)

指導者：(警戒音を発したシカは、私たちがシカの存在に気づくずっと前から人間の接近を察知していた。人間が文明と引きかえに失ったシカの鋭い危険予知能力に敬意を表するといった意の解説をする)

*展望の丘で休憩する。

指導者：周りの人の顔を見てごらん。暗くなって見えにくくなってきたね。ここまで歩いてきて何か感じることはありませんか。

子ども：今まで嗅いだことのない匂いがした。暗くなってきたのに鳥の声がまだ聞こえる。セミの声がしなくなった。

指導者：(「夜でもできる耳を使ったバードウォッチング」と題して、生活棟に帰った後も布団に入り眠りにつくまでの時間に、夜行性の野鳥の存在を感じてくれるように提案した。フクロウ、アオバズク、ヨタカ、トラツグミ等の鳴き声を聞かせるとともに、解説を加えた)翌朝、二人の子どもが私に駆け寄り、「布団の中でトラツグミの声が聞こえた。間違いない。」と満面の笑みで話してくれた。

*休憩を終え、散策道りすコースに入る。

指導者：(途中、りすコースを横切る獣道の解説をする。かなり暗い)

*りすコースからくまコースへ入る。

指導者：(ここで歩みを止める)ここまでで何か感じたことがあったかな。

子ども：コンクリートの道がすごく硬く感じる。何か分からないけれどいろんな音が聞こえた。

*スポーツ広場で季節はずれのホタルを観察する。

*生活棟付近まで戻り、まとめに入る。

指導者：みなさん、ご苦労さんでした。ナイトハイクはどうだった。

子ども：楽しかった。おもしろかった。ちょっと怖かった。山から下りてきた時、外灯の光が眩しく感じた。(この外灯は13ワットでかなり暗いものであった)

以上で、1時間程度のナイトハイクを終了した。

山の宝物探し

- ・フィールドビンゴを用い、一つの枠を「私の宝物」として実施した。
- ・子どもたちには、自然の宝物を見つける訓練と称して、ネイチャーゲームの「音いくつ」「カモフラージュ」を行った。
- ・「音いくつ」では、虫や鳥の声の他に、風の音を感じたと発表する子どもがいた。
- ・「カモフラージュ」では、遠くに見える瓦屋根を人工物としてカウントする子どももかなりいた。全員が4巡する程度まで繰り返した。

***答え合わせをして、どれが分かりにくかったか、また分かりやすかったのはどれか、その理由をハンカチの上に並べた人工物を見ながら話し合った。**

子ども：「自然界に存在する色や形に近いものは見つけにくい」

***そこで、樹液に集まるルリタテハを例にとり、保護色や擬態について解説をした。**

指導者：じゃあ、逆に毒を持つ生き物で目立つ配色や模様で周囲に自分の危険を知らせているものって分かる。

子ども：しばらくして「ハチ」

***そこで、スズメバチの写真を見せ解説する。**

指導者：人間もこのような色や模様を使って危険を知らせるのに利用しているものがあるんだけど何か分かる。

子ども：あの、工事中のやつ。

指導者：（工事中のバリケードの写真を見せて）これっ。

子ども：あっ。それぞれ。

指導者：それじゃ他には。

子ども：（返答なし）

指導者：（日本道路公団の道路パトロールカーの写真を見せる）こんなのもあるよ。

子ども：口々に「見たことある。知ってる。」（一同納得した様子）

次に、自然観察館裏の樹液がしみ出すポイントにセットしたCCDカメラから送られる映像を10メートル離れた場所に設置した2台のテレビモニターを使って、リアルタイムでスズメバチやルリタテハを観察し、実際のカモフラージュや危険を知らせる配色等を確認した。子どもたちは、テレビモニターに釘付けの様子であった。特に、スズメバチがカナブンを邪魔者扱いして追い払う様子が楽しかったようだった。その後、フィールドビンゴを行った。子どもたちは、どんぐりマークのスタンプを押してもらうのが楽しいらしく、夢中でいろんな自然物をもってきて、一人一人に対応するのが大変であった。「宝物」の枠では、班の中で宝物の価値観の相違からもめる一幕もあった。「いいにおい」の枠では、アカマツの樹液を枝につけて持ってくる班があったのが印象に残っている。結果は、全ての班でビンゴが成立し、全ての枠を埋めてしまう班もあった。

「竹食器作り」の振り返りについて

(ねらいは「道具の正しい使い方を知る」「力を合わせる」である)

一人一人が振り返りカードに記入後



Q 「竹食器作り」どうでしたか

A ・楽しかった ・どちらとも言えない

Q どうしてそう思ったのですか

A ・良き記念品ができた ・協力できた ・仲良くできた ・楽しくいろいろなものができた ・みんなでがんばった ・いろいろなことが経験できた ・竹食器が上手にできた ・初めての体験だった ・見たことのない道具を使った ・初めて竹を切った ・自分でできた ・のこぎりを使って疲れた ・作品がすぐに壊れた

Q 他に楽しかったという人で意見はありませんか

A ・好きな工作ができた ・友だちが増えた ・難しいスプーンが作れた ・班の人と仲良くできた ・自分の食器が作れた ・困ったとき手伝ってもらった ・班長が優しかった ・自分風の食器が作れた ・上手にできた ・作った食器が使える ・何回も失敗したががんばった ・お土産ができた ・自分で竹が切れた ・班のみんなで協力できた

Q 食器づくりをしてみて、何か気がついたり発見したことはありませんか

A ・いろいろな人と話をした方がよいことが分かった ・竹が食器になることが分かった ・食器作りがとても難しい ・竹を切るのには時間がかかる ・協力し合うことは大切である ・竹と道具だけで食器が作れた ・竹は意外と硬い ・竹には節がある ・竹でいろいろなものが作れる ・のこぎりを使うのは難しい

Q 何人かで作業をする時には、相談したり協力するということが大切ですね。竹という素材についていろいろ気がついた人もいましたね。使った道具について話してくれた人がいましたが、他に道具について思ったことはありませんでしたか

A ・小刀の正しい使い方が分かった ・あなたは怖いけれど竹が割れると気持ちがいい ・道具の使い方が分かった ・道具の片付けも大切だ

Q 竹を切るのは結構大変だったと思います。しかし、切り役や持ち役などを決め協力してできていました。最初に説明した道具の正しい使い方を守っていたから、けがをする子もいませんでした。便利な道具はたくさんありますが、使い方を間違えれば大けがをするものもあります。片付けも大切な活動ですね。次の「野外炊事」やこれからの活動では、自分はどういうことに気をつけて取り組んでいこうと思いますか

- A ・けがをしないようにする ・みんなで協力する ・もっとがんばりたい ・順序を間違えないように気をつけたい ・自分から進んで行動したい ・頼まれたことをがんばる
 ・みんなに積極的に話しかけていく ・みんなと仲良くやっていく ・自分勝手なことをしない ・人に迷惑をかけない ・後始末をしっかりとする ・何事も丁寧にする ・次にすることを考えて取り組む ・みんなの手伝いをいっぱいする

Q 班として気をつけようと思うことはありませんか

- A ・仲良く楽しくする ・がんばる ・班長の言うことを聞く ・積極的にがんばる
 ・役割を決める ・後始末をしっかりとする ・周りの人のことを考える ・自分勝手な行動をしない ・一人一人班のためにがんばる ・協力する ・素早く行動する ・けがに気をつける ・助け合う

明日も、安全面には十分に気をつけて、みんなで協力し、おいしいカレーを作りましょう

「野外炊事」の振り返りについて

(ねらいは「力を合わせる」である)

一人一人が振り返りカードに記入後



Q 「火おこし」「野外炊事」どうでしたか

- A ・作ったカレーがとてもおいしかった ・初めての体験だった ・みんなで協力できた ・火おこしが成功した ・初めて肉を切った ・役割分担を決めてできた ・少しみんなと仲良くなれた ・竹食器で食べられた ・野菜を切るのが楽しかった ・自分もみんなもがんばった
 ・家ではあまり料理をしない ・火の燃える音が楽しかった ・おいしいご飯が作れた
 ・煙で目が痛かった ・あまりすることがなかった

Q 他に感想とか気づいたことはありませんでしたか

- A ・竹食器でカレーが食べられたので嬉しかった ・おこげが落ちにくいことが分かった
 ・がんばったかいがあった ・新しい友だちと出会えた ・カレーの作り方が分かった
 ・火加減が難しかった ・みんながんばっていた ・火おこしはすごく疲れる ・原始人の火のつけ方が分かった ・野菜が煮えてからカレー粉を入れることが分かった ・協力してすると嬉しい楽しい ・家で作ったときよりおいしかった ・みんな料理が上手である
 ・一つのことに一生懸命取り組めた ・火おこし器で火がつくことが分かった

Q 今回の活動の目的は、力を合わそうということでしたが、そのことについてはどうでしたか

A ・協力できた ・あまりできなかった

Q なぜ協力できたと思いましたか

A ・みんながんばっていた ・大きい子が手伝ってくれた ・大きい子がいろんなことを教えてくれた ・遊んでいる子がいなかった ・自分で仕事をみつけてがんばれた ・みんな楽しく取り組めた ・仲良くできた ・一人でいる子がいたら誘ってあげた ・小さい子が言うことを聞いてくれた ・大きい子が優しかった

Q 次の「山遊び」では、自分はどのようなことに気をつけたりしていこうと思いますか

A ・けがをしないようにする ・しっかりとみんなを手伝っていきたい ・ふざけないようにしたい ・みんなともっと仲良くしていききたい ・みんなともっと協力していききたい ・全体的に良くしていききたい ・もっとがんばりたい ・もっと積極的に活動していききたい ・いろんな子と仲良くしていききたい ・山で迷子にならないようにする ・みんなに迷惑をかけないようにしたい ・みんなでもっと楽しく取り組んでいききたい ・山でいけないようにする ・班のみんなで行動を一つにする ・ゴミを落とさないようにする ・班長としてがんばりたい ・役割を見つけて素早く行動したい ・人の話をしっかり聞く

「火おこし」は、全ての班が成功しました。カレー作りも、班長を中心にみんなで協力しながら楽しくがんばれたと思います。みんなで協力すると、作業もスムーズに進むし楽しく活動できますね。明日の「山遊び」は最後の活動です。遊びを考えたり、物を作ったり、自然を観察したり、班で協力して山遊びの楽しさを十分に味わってほしいと思います。

「山遊び」の様子について

- ・班で考えて様々な活動を行っていた。
 - ・のこぎりや小刀、なたなどを上手に使って、竹笛や木を削って杖を作ったりしている子どももいた。
 - ・協力して木にロープを結び、ターザンごっこやブランコ遊びをしている子どももいた。
 - ・笹を使ってオリジナル作品を作っている子どももいた。
 - ・仲良く遊んでいる姿があちこちで見られた。
 - ・鳥の巣や鹿の足跡を見つけている子どももいた。
- *3日間の様々な活動で学んだり気づいたことが生かされ、子どもたちは工夫し話し合い、遊びのバリエーションも広がり、協力しながら取り組んでいた。

「4日間」の振り返りについて

一人一人が思い出作文を書いた後

Q 「これがキャンプだ！ 原始人」に参加してどうでしたか。どんなことが思い出に残っていますか

A **感情**

・ドラム缶風呂が気持ちよかった ・ペットボトルシャワーが気持ちよかった ・焼き板工作がおもしろかった ・竹食器作りが楽しかった ・女子全員と友だちになれてよかった ・野外炊事は、自然学校で作ったよりも上手にできたのでうれしかった ・ゲームで、いろんな子といっぱいしゃべれてうれしかった ・テント泊は、暗くてドキドキした



・友だちがたくさんできて、よかった ・山の中で人工物を見つけたり、鳥の声や水の音などのビンゴゲームがとても楽しかった ・山遊びで、ブランコのひもを木にくくるのが難しかったけれど、出来たのでうれしかったし楽しかった ・野外活動は楽しい ・ナイトハイクは、少し危ないがとても楽しい

発見・気づき

・山での宝物探しは、山でしか見られないものばかりで、いろいろなものを発見できた。一位にはなれなかったが、みんなで協力できたことがよかった ・ミツバチはスズメバチと違ってかわいかった ・竹で食器なんか作れるのかと思っていたが、本当に作れてすごいと思った ・野外炊飯はとても楽しかったが、使った道具を洗うのは大変だった ・火おこしは、難しいけれど、あまり力を入れなくてもできることが分かった ・セミが殻から出てきたところを夜に見た。羽が透き通って体が白くてきれいだった ・テントで寝ようとした時、フクロウかアオバズクの鳴き声したが、どちらか分かりにくかったので残念だった。でも、水の音は、とてもいい音だった ・初めて鹿の鳴き声を聞いたのがうれしかった

原始人

・原始人のことがよく分かった ・昔の人がどのようにして火をおこしたのかが分かってよかった ・4日間、原始人になりきった ・原始人は力があつたんだろうなと思った

今後

・家でもドラム缶風呂に入りたい ・南但馬自然学校で学んだことをこれから役立てていきたい ・野外炊事では、班長として役割を果たしていなかったが、料理が得意だったのでみんなをひっぱっていけて自信がついた。少し人見知り直りそうだ ・山遊びでは、笛を作ったり木を削って遊んだりして、とても楽しかった。家でもこのような遊びをしたい

Q 最後に、南但馬自然学校で学んだことをこれから役立てていきたいという意見が出ましたが、みんなはどうですか

A ・思う

Q これからどのようにしていこうと思いますか

A ・学校でも、もっとみんなと仲良くしていきたい ・これからも、いろんなことでみんなと協力していきたい ・自然があるところへ行けば、いろんなことを発見したい ・生き物を見たら、よく観察したい ・いろんな遊びを考え、みんなで楽しんでいきたい ・後片付けや食器洗いの大変さがよく分かったので、できることは手伝っていきたい ・これからは、もっと様々なことに自信をもって取り組んでいきたい

これからもみんなは様々な体験や学習をしていきます。しかし、それだけに終わるのではなく何に気づき何を感じたのかを振り返り、そのことを今後の生活にどう生かしていくのかを考え実践していくことが大切であり、そのことによって人は成長していくのです。4日間、ご苦労様でした。これからも自然大好きなみんなでいてください。

おわりに

今回のキャンプでは、子どもたちに自然観察のポイントを伝えるとともに、協力することの大切さを感じてくれることを大きな目的として実施した。

そして、振り返りを取り入れ、次の活動がより充実したものとなり、体験したことが後の生活に生きていくよう配慮しながら取り組んだ。

その結果、体験して学んだことが次の活動に生かされる子どもたちの姿や言葉が多く見聞きできた。体験したことを家でも行ってみたいとか、学んだことをこれからの生活に役立てたいという意見も最終日に多く出された。

参加した子どもたちが、今後の生活においてプロセスを大切に、振り返りを繰り返しながら大きく成長していってくれることを期待する。

「自分・新発見！～夏山にチャレンジ～」

県立兎和野高原野外教育センター

1 はじめに

当センターでは、毎年ひょうごユースセミナー事業の中で10泊11日のチャレンジキャンプを行っている。内容は、前半の5日間でセンター内を拠点に野外炊飯実習やソロ活動を中心に野外生活での知識や技能を身につけ、2日かけて当センターから氷ノ山東尾根登山口まで徒歩で移動し、3日目で山頂を目指すものである。また、次の日は溪谷で野営し清流とふれあい、最終日はセンターにてクラフト等思い出づくりをするものである。

日程の中で夕食～朝食～昼食を一人で作り、夜は一人用テントで過ごすソロ活動に焦点を当て体験学習法を取り入れた。

2 ねらい

- ①一人生活を通して自然を体と心で感じ生命の存在に気づく。
- ②一人生活を通して責任感を養う。
- ③一人生活を通して食事のありがたさ、仲間のありがたさ、家族のありがたさなど社会生活をする上で重要な要素に気づき、日常に帰ってからでも生きて働く力を育む。

個人装備



活動エリア

・森の工作館周辺、第4キャンプ場周辺



ひとり生活のスタート！

<センターからもらう物>

- 金マット ○ひとり用テント ○はんごう1つ
○新聞紙・マッチの入ったふくろ ○食材料のふくろ

<ひとり生活を楽しもう！>

生きるということ！ 自然と友だち！ 新しい自分の発見！

ひとり生活のおきて

- ☆さみしくてもできるだけチャレンジ！ ひとり用テントでねよう！
- ☆ひとりで食事を作ろう！
(自分以外の人の力ばかりません) (もらった道具や食材料で工夫しよう)
- ☆自分の使った場所の後かたづけ、食器あらいはきちんとする！
- ☆昼間は、危険のない生活をしよう！
(ひとりきりでないしょで森の奥へ入らないなど)
- ☆トイレ、歯みがき、顔あらいなど人間らしい生活をしよう！

集合は、明日の午後2時

ここへ！

ひとりひとりのけんとうをいのる！

3 活動の流れ

生活の中で自分一人の力で食事を作ることが強られる。一人で米を炊き限られた食材の中からメニューを決め三食食する。そういった技能を身につけることを前提に最初の2日間は、全ての食事を野外炊飯とし徐々にグループ内の人数を少なくしていった。

1日目：夕食12人（カレーライス）



2日目：朝食11人（棒焼きパン）→昼食11人（手打ちうどん）→夕食5人（冷トンサラダ、炊き込みご飯）



3日目：朝食3人（ウインナー、ご飯、みそ汁）



3人での炊飯

炊飯全般を通して班での役割分担を固定するのではなく、炊飯の中のどの活動でもできる力をつけていく。最終的に一人で炊飯をできる力を養う。

3日目の午後2時から翌日の午後2時までは一人の時間である。

一人用の釜を用意し火をたける環境を用意する。以後、スタッフは口を出さず見守るだけである。

初日は12名でのカレー作り。火のつけ方、火床の管理、飯ごうを使っての米の炊き方、鉈の使い方、包丁の使い方など安全面での注意事項は事前に説明したが、後は自分たちで考えまはやってみよう指導した。一人1合の計算で12合の米を炊き、ご飯が余った班があった。次からは米の量も考え少な目にした。参加者は、食事の量を体験によって抑制し、できるだけ食材が余らない工夫をこの班別の炊飯で仲間と共に学んでいった。

薪割りも初めは心配していたが、仲間同士でお互いに教え合う姿も見られ、けがをする参加者はいなかった。

班の中での自分の役割が確立したところで、人数を5人に絞る。更に3人に絞る。そうすると班の大人数でやっていた時よりも時間がかかるという現象が起きる。要するに多人数で作るとどうしても手持ちぶさたな子が出てくるということである。いざ少人数でやると火がなかなかつかなかったり、食材の量が分からなかったりと困った子が出てくるのである。時間をかけてようやく3人での朝食が終わったのが10時頃であった。

この体験は、後の一人生活で生かされることとなる。要するに一人で全てのことをするということは、気楽な反面食事にもありつけない結果となりうるから気合いが入るのである。このように班の人数を減らすという段階は、自分の力というものを見つめ直す機会となり一人生活への準備段階としてははずしてはならないものである。

一人生活の三食分の食材であるが、米2合、そうめん2束、キュウリ1本、バナナ1本、シーチキンの缶詰、さんまの缶詰、味噌、トマト1個、梅干し3個、味付けのり、塩昆布、牛乳、めざし3匹、わかめ、ごま、ねぎである。この中の組み合わせで三食分を自炊し空いた時間は、昼寝なり、散歩なり自由なのである。24時間自分の時間を与えられたのである。

4 体験学習法事例

体験（まずしてみる）

- ・食材・寝具を持って自分の寝床確保
- ・一人で寝た。
- ・一人で夕食を作った。



指摘（何が起こったか、プロセスをみる）

指導者：一人生活どうだった？

子ども：食事が難しい。なかなか火がつかない。1日分の新聞紙、マッチ一箱、太い薪はどんどんなくなる。

：すぐ火が消えた。

：アスレチックで遊んだ。たき付けに使う新聞を読んだ。

昼寝した。

：すぐに友だちと話をした。テントも友だちの近くに張った。



分析（どのように、なぜ起こったのか、プロセスを考える）

指導者：なぜ火がつかなかったのかな？ 友だちの近くにテントを張ったのかな？

子ども：新聞紙が多く、たき付けが少ない。薪が太い。詰め込みすぎ。班での活動の時に話を聞かず分かったつもりになっていた。質問もしなかった。人に任せっきりだった。

：一人では心細い。怖さもあった。

：すごく不安だった。

課題意識の明確化（分析し、考察したことをもとにして自分なりの仮説を立てる）

指導者：みんなで活動するとき大事なことはどんなことかな？

子ども：班に帰ったら、自分からもっと積極的に動こう。

：友だちを大切にしよう。

：人の話をよく聞こう。

：自分から仕事を探し責任をもって取り組もう。



試みる（仮説を次の場や機会にどのように適用するのか具体的に計画を立て積極的に行動し取り組む）

指導者：明日から移動キャンプだ。みんなでがんばろう。

子ども：あの子は、班活動の最中でも、一人ぼっちだったな。声をかけてあげよう。

：班のメンバーとして自分の役割をしっかりと果たそう。



5 一言日記より（一人生活編）

①のねらいに対して

- ・一人用テントに帰るまでは楽しかったけれど、テントに入るといきなり怖くなってシュラフに潜り込んだ。自然の夜の音が聞こえて驚いた。
- ・一人生活の時、少し怖かったです。

②のねらいに対して

- ・テントに入ったらすごく不安でした。でもすぐ寝れました。
- ・一人生活は大変だと思った。ご飯を作るのが難しかった。
- ・自分で作ったおみそ汁はおいしかった。
- ・初めの方は、やっぱり内心びくびくどきどき緊張していてチャレンジできないことがあったけれど、移動キャンプの前の一人生活が終わった頃には自信がつきはじめていろいろなことにチャレンジできるようになりました。
- ・料理をする時、私は家で料理なんてあんまりしないからできないことがたくさんあった。けれどやっているうちにできるようになってきた。一人生活で火をおこすのに最初は全然つかなかったけれど昼食の時(3回目の一人食事作り)にはすぐに火がついた。
- ・今までは家の人がやっていたことも今では自分一人でできそう。
- ・なたで初めて木をわって最初はすごく怖かったです。でも勇気を振り絞ってがんばればできました。
- ・一人生活が楽しかった。ご飯をつくるとき水の量を間違えておかゆになったり、火をつけるときに薪につかないうちに火が消えてしまったりした。でも火がついたりご飯ができたりしたらうれしかったよ。
- ・料理は一人生活の時が大変だった。おかゆになった。

③のねらいに対して

- ・一人でいると学校の事を言えないししゃべれないのでさみしいな。
- ・終わった日は、午後からみんなと一緒にさみしくなかった。
- ・友だちのことを考えよく眠れた。
- ・一人テントは狭くて大変だった。一人一人の役割の大切さがよく分かりました。
- ・初めて一人でご飯をつくったけれどまずかったし大変だった。いつもお母さんが作ってお母さんはいつも大変なんだと分かった。
- ・一人生活の時、火をおこすことが大変でした。もちろん一人で寝ることも怖くて悲しくて大変でした。

6 10泊11日を終えての児童の感想から

(1) 新しい自分を発見できたかどうかの観点で

・10日間で私の中で変わったのは、やっぱり何でも本当に何でもできちゃうのかもしれない……と自信がついたことです。実際に試してみてもできない事なんてまだまだたくさんあります。でも自信がついて他のことに色々チャレンジできるようになったと思います。私はその自信を生かして学校でも家でもいろんな事にどんどんチャレンジしていきたいです。



・6年生として自分より年下の学年の面倒をみるということができるようになりました。でも他人のことばかりしないで自分のことも完璧にできるようにしていきたいです。

・僕は、前までは難しそうな事はできなかったらすぐあきらめたけれど、このキャンプでできなかったもまたやり直したらできることが分かった。

(2) チャレンジできたかどうかの観点で

・自分に負けそうになった。でも友だちがいたからいろんなことにチャレンジできた。

・リタイアできない気持ちでやったので、どこまでもチャレンジできたと思います。



(3) その他自由に思い出を

・私はこのキャンプで、自信だけでなく他の友だちのことに気を配りながら生活することや弱音をはかないということも覚えました。楽な生活になれてしまって本当に「生きる」ということを知ることができた良い機会だったと思いました。これからこのキャンプのことをいろいろな所で生かしていきたいです。

・最初は自分から行動しなかったけれど、みんなとなじんでから自分から行動するようになった。

・このキャンプに来て悲しいこともあったし楽しいこともあった。私はみんなにもたくさんのことを教えてもらいとても楽しかった。11日目になってみると友だちと離れるのがとても悲しくなってきた。みんなどうもありがとう。

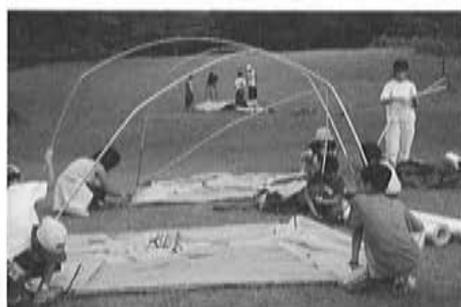
・一日目みんなの顔を見たらわくわくしていて顔が楽しそうでした。実はというと私は緊張していたので知らない友だちとなかなかしゃべれなかったんです。でもいろんな子がしゃべりかけてきてくれたので安心しちゃいました。「ナンバー1」もいつもなれなくて6年生なのにしっかりしないとだめっていうお母さんの姿が出てきました。次の日からやる気が出てきて、ついに「ナンバー1」になることができました。友だちもいるし妹もいるので情けない顔は見せたくなかったのが最後の最後までがんばりました。

・料理の時、指を切ったりしたけれど、最初来たときよりもうまくなりました。それでもまだ6年生には負けるけれど。でも自分なりにできました。

・このキャンプをやってからなんか楽しくなりました。また普通の生活になるのもいいけれど、すごく楽しかったです。

・最初は班の中での行き違いがありましたが、最後はみんなの意見がまとまり強い絆でつながった最高の班になったとリーダーが言っていました。実際僕もそう思います。全く違った土地から来た人間同士が短期間で友だちになれるのはすごいことだと思います。

・一人生活を終えて移動キャンプからは、2つめの家族ができました。お母さんや妹、前からほしかったお姉ちゃんなどできました。



テント設営実習



登山道



静川山頂



鉢伏山山頂

(4) 保護者の感想から

・長い間それぞれ違った育ちをした子どもたちを指導するリーダーや先生方のご苦労はいかばかりかと思わずにはられません。作られた食事をさせる方が野外炊飯より何倍も楽なのに、このような企画で子どもたちの体験と成長を中心に考えられたセンターの方々に心より感謝いたします。今年で2度目の参加でしたが、重ねて参加することで何倍もの成長を与えていただいたような気がします。笑顔と思いやりの心遣いができるようになったことは、集団生活と孤独と苦しい体験があったからこそ得られたものだと思います。帰ってきてからもずっと“おかあさん”をしてきています。本当にありがとうございました。(6年生女子の母)

・長い夏休みにキャンプに参加し、家とは違った環境に慣れるか心配でしたが無事帰ってきてくれたのでほっとしています。いつもは家族や知人とのキャンプばかりでしたが、家族と離れ家族の大切さ自然のありがたさ、TVゲームのない時間を過ごして少しでも自分のためにこのキャンプが役立ってくればなあとずっと祈っていました。キャンプに申し込むときは、まさか氷ノ山に登るなんて思ってなかったようです。でも氷ノ山に登頂し感動したようです。お迎えは神崎郡に住んでいる祖父が迎えにいってくれ、みんなが泣いているのにジーンときたそうです。その涙でこのキャンプがどれほど良かったかが分かったと言っていました。お盆に市川町でキャンプのお友だちに会ったと喜んでいました。これから伊丹でも偶然出会うのでしょうか。兵庫県の各地にお友だちができたということは、すごく素晴らしいことです。10日間も長い間ご指導いただきありがとうございました。職員の皆様お疲れさまでした。来年も是非行きたいと申しております。また、案内をいただけるとありがたいです。写真もありがとうございました。(4年生男子の母)

7 おわりに

日常から離れて11日間、寂しさや不安の中で参加者が頼りにしたのが友だちやリーダーの存在である。参加者は、個人差はあるものの一人生活を体験してさらに友だちの良さや家族のありがたさ、文明のありがたさを学び取っていた。一人生活の後には、2泊3日移動キャンプで歩いて瀨川山頂、鉢伏山頂、氷ノ山山頂と3つの山頂に立つが、山頂での達成感は一人で感じるものでなく、仲間と分かち合い喜びと自信に満ちあふれる顔がそこにあった。その感動の深さは、一人生活を体験してこそ味わえるものであると感じる。ひとりぼっちで自分を見つめる、しかも三食作り食べるということで失敗を成功につなげる体験をし、成長していく姿が数多く見られた。日常に戻ったとき、このキャンプでの体験が必ず生かされることを願う。



氷ノ山山頂

実践「試しのゲーム後の『分かち合いタイム』」より

養父町立建屋小学校 山根伸治

（この単元の指導計画の概要）

1 単元名 ゲーム（サッカー型）『グルグルラインサッカー』

2 単元目標

- 仲間と励まし合ったり認め合ったりしながらゲームを楽しむ。（関心・意欲・態度）
- 仲間と協力し合って攻防の作戦を立て、練習やゲームを楽しむ。（思考・判断・運動の仕方）
- ルールを理解し、ける、止める、攻める、守るなど基礎的な技能を身につけ、ボールを追いかけたりパスしたりしてゲームを楽しむ。（技能）

3 運動の特性

一般的特性

二つのチームが入りまじり、足や手を使ってパスやドリブルをして、相手の守りをくずしながらシュートをして得点を競い合うことが楽しい運動である。

中学年の児童から見た運動の特性

- ・シュートした時、得点した時、勝った時に楽しい。
- ・力一杯けったり動いたりするのが好き。
- ・ボールを足で操作することに慣れていないため、けったり止めたりする基本的な技能がうまくできない。
- ・経験の差によりルールが分からない。

4 指導にあたって

次の2点に特に焦点を当てて指導をする。

(1) 作戦タイムの重視 (2) ルールの工夫

キーパー、内野、外野の3つのポジションをローテーションするのは、どの子もそれぞれの役割を知り、ポジション別の基礎技能、知識を身につけることができるようにするためである。

また、この学習の第1～3時の導入時にPA（プロジェクト・アドベンチャー）のイニシアティブ活動である「みんなでポーン」を組み入れた。これは限られた時間内に、風船を落とさずにけり続けるという課題解決を図る活動である。試合では勝敗へのこだわりも出てくるため、このPAを取り入れることで仲間とふれ合うことや、課題に対して協力してチャレンジさせることをねらった。

*ゲームについて

- ・試合時間15分（前半5分・中5分・後半5分） 事前に作戦タイムをとる。
- ・ローテーションは、内野→外野→キーパー（キ→内→外・外→キ→内）とする。
- ・欠席、見学者がいる場合、外野の人数で調整する。キーパー、内野はいつも同数とする。

○学習計画（全9時間）

めざせ！Jリーガー			ボール運動「グルグルラインサッカー」3・4年生					
（めあて）うまく（速くに 正確に）ける、止める力をつけながら、ゲームを楽しもう 安全に気をつけて、仲よくゲームをしよう								
1	2	3	4	5	6	7	8	9
オリエンテーション ゲームを知る			ミニテストシリーズ 赤VS青 黄VS赤 青VS黄 (技術オリエンテーション①) 青VS黄 赤VS青 黄VS赤 (技術オリエンテーション① の内容) めあて① うまくける、止める力をつ けよう (インサイドキック・トゥー キック) ゲームに慣れながら、楽しむ			レベルアップシリーズ 赤VS青 黄VS赤 青VS黄 (技術オリエンテーション②) 青VS黄 赤VS青 黄VS赤 (技術オリエンテーション② の内容) めあて② シュート、パスの技をみがき ながらゲームを楽しむ		
学習の 約 束	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と教え合い、助け合いをしながら、自分の技をみがこう ・友達のピカリ（いいところ）を見つけよう ・すばやく行動しよう 							

○指導観

「どんなゲームかを知り、より工夫したルール作りをする」ため、第1～3時の指導において、「体験学習法」が有効であると考え、取り入れた。

「試しのゲーム」を体験した後の「分かち合いタイム」の中で、自分自身の動きや気持ちについて振り返ったり、仲間のよい動きを認め合う中で、自分はどうのようにチームの中で関わったらよいか、またどのようなルールを作ればより楽しくなるかを考えさせ、その

ことをこのゲームだけでなく他の生活場面にも生かせるように支援していきたい。



↑PA「風船でポーン」より

○ねらい

「試しのゲーム」での振り返り活動（分かち合いタイム）を通して、みんなで何かをして楽しむ時には、力を合わせたり進んでルールを守ろうとする気持ちを育てる。

○活動の実際（本時2/9 実施場所 体育館 児童数 21人）

*この時間は、試しのゲームが2試合（赤VS青・青VS黄）あり、赤が1勝、青が2敗、黄が1勝という結果であった。

*全員集合し一つの輪の形になり、みんなの顔が見えるように座る。

指導者「それではまず、今日の試しのゲームでの自分の気持ちを振り返ってみましょう。みんな、目をつぶってください。『楽しかった』『楽しくなかった』『どちらとも言えない』の3つで聞きます。(間をおいて) 楽しかった人？(16人挙手) それでは楽しくなかった人？(2人挙手) どちらとも言えない人？(3人挙手) それでは目を開けてください。」

「今日のゲームではたくさんの人が楽しかったという振り返りをしているけれど、理由もつけて言える人どうぞ。」

子ども「ぼくは、自分でゴールを2回もできて楽しかったです。」

「ぼくは、Cくんの強いシュートを受けることができてうれしかったです。」

「わたしは、今日はいっぱいけることができて楽しかったです。」

指導者「楽しくなかったという人も何人かいたけれど、理由をつけて言える人どうぞ。(しばらく待つが発言がないので) それでは、楽しくなかったという人の気持ちを思いやってみて言える人はいませんか？」

子ども「わたしは、一人の人ばかりボールをずっとけていたらそのチームの人は楽しくないと思う。」

「黄チームはAくんとHくんばかりボールをけていた気がする。」

「うん、黄チームにはボールを全然けていない人もいると思う。」

指導者「それじゃあ聞くよ。今日の試しのゲームで一回もボールをさわっていない人いますか？」(2人が挙手。ZとV)

「Zさんは正直どんな気持ちですか？」

子ども「私は、……チームが勝ったのはうれしかったけど、ボールをけれなかったのはいやだった。だから、普通くらいの気持ち。」

指導者「なるほど。……他にいやな気持ちになったことってない？」

子ども「私はけるのもへただし、どこにけていいか分からなかった。だから、いやになった。」

「私は、Lくんのけた強いボールが顔に当たっていやだった。」

「私も、Hくんのボールが強くて怖かった。」

指導者「なるほど。……今、楽しくなかったことやいやだったことがいろいろ出てきたけど、次のゲームをみんなが楽しむためにどうしたらいいと思う？しばらく考えてみてよ。(しばらく待つ) それではどうぞ。」

子ども「ぼくは得意な人ばかりボールをけらないで、みんなに回したらいいと思う。」

「私は黄チームのみんながAくんやHくんに頼っていて、あまり動いていなかったから、みんなも頼らないでもっと動くようにしたらいいと思う。」

「Mさんみたいにどこにけていいか分からない人には、サッカーの得意な人が声をかけたり、チーム練習の時に教えてあげたりしたらいいと思う。」

指導者「なるほど。……それじゃあ、サッカーが苦手な人のためにもさっきの試しのゲー

ムでどんな動きがいい動きだと思ったのか出し合ってみてよ。」

子ども「(キーパーの) Fくんが横にとんでボールをとってすごかったです。」

「外野のPさんがボールをとってすぐに内野にパスしていたのでよかったです。」

指導者「うんうん。………すぐ相手のゴールに向かって転がしていたから味方の内野の人はゴールのチャンスはいっぱいあったね。」

(中 略)

子ども「Jくんが何回も速いゴールを入れていたからすごかったです。」

「(キーパーの) Dさんがよくボールを止めていたのよかったです。」

指導者「Dさんがよくボールを止めることができたのはなんでだと思う？」

子ども「両手でしっかり止めた。」

「体の正面で低い姿勢で取っていた。」

(中 略)

指導者「いいところをいっぱい見つけることができたね。特に青チームのBさんとYさんは負けてくやしい気持ちがあったらうけどちゃんと相手チームのいいところを言えるってすごいと思う。今度は逆に赤や黄組の人から青チームがもっと強くなるっていうヒミツはありませんか？ 教えてあげてよ。」

子ども「みんな、かたまらないで、少し広がってパスしたらいいと思う。」

指導者「うん、なるほど。そうしたらシュートしやすくなるね。」

子ども「内野で取られそうになったら、味方の外野にボールをパスしたらいいと思う。」

(中 略)

指導者「試しのゲームだったけれど、今のルールで困ったこととか変えたらいいと思うことはありますか？」

子ども「黄組の試合の時、外野の人がボールをとったら、そこから赤組のゴールのそばまで走っていて、黄組の内野の人にボールを転がしてすぐシュートしてた。なんかずるいと思う。」

「うん、それでいっぱい点を入れられた。」

「外野はボールをとった場所から動かないで、そこからパスするようにしたらいいと思う。」

「うん、その方がいい。」

指導者「なるほど。それでは今度の試しのゲームでは『外野はボールをとった場所からしか内野にボールを入れられない』というルールにしてみようか。」

(多数がうなずく)

指導者「他にありませんか？」

子ども「ゴールの広さをせまくしたらいいと思う。今は端から端までゴールだから点数が入りすぎると思う。」

「ええ～っ！！」

(不得手な子どもを中心にブーイング)

「Hくんはうまいからええわいや。」

「それじゃあ、ゴールは今のままにして、真ん中の方に2つコーンを置いて、その間にシュートが入ったら2点とかにしたらおもしろいと思う。」

「おもしろいやん。」

「前のゴールの広さは同じだからいいと思う。」

「それだったらいい。」

指導者「それでは、前のゴールはそのままで赤いコーンを2個置いて、その中に入ったら2点というルールを付け加えてもいいですか？」

(多数がうなずく)

～ 以下略 ～

結局、次の試しのゲームをよりみんなが楽しめるようにするため、新しいルールが2つ作られた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①外野はボールをとった場所からしか内野にボールを入れられない②2点のシュートゾーンを作る |
|---|

〇まとめ

基本的にゲームは「勝ち負けにこだわらせる」ことがそのチームの作戦を向上させるためにも大切な要素であると考えている。しかしながら、「勝ち負け」にこだわらせ過ぎると険悪な雰囲気になり、楽しいはずのゲームがつまらなくなることもある。

そのこともふまえて行った第1～3時の試しのゲームの段階での「分かち合いタイム」は、勝ったチームも負けたチームもお互いのよい動きを素直に認め合うことができ、明るい雰囲気での学習を進めることができた。また、集団の中での「私」の関わり方に気づかせ、そのことは次時の試しのゲームのみならず、日常生活にも波及できたと願っている。また、「チームの中での私」に気づくことで、よりよい動きづくり、作戦づくりの有効な手だてにもなったと感じる。



この活動は体験学習法の循環過程に基づき行っており、整理すると以下のようになる。

- | | |
|----------------|--|
| ①体験（する） | 簡単なルールで試しのゲームをする |
| ②指摘（みる） | 「分かち合いタイム」 |
| ③分析（考える） | ・試しのゲームの振り返りと分かち合い
(前記の『活動の実際』参照) |
| ④課題意識の明確化（気づく） | ・次の試しのゲームを楽しくするには一人一人がどうしたらいいだろうか、またルールをさらに工夫できないだろうか
↓
次時の試しのゲームで試みる
また、日常のグループ活動でも積極的に試みる |

体験学習法の循環過程に基づいた上記の活動は「自分自身の再発見」「お互いを認め合う優しさ」「自分たちでルールを工夫し、ゲームを作っているという主体性」を高めるのに非常に有効であったと感じる。今後は、体育科に限らず、学級活動や総合的な学習における話し合い活動にも効果的に取り入れることができそうなので、模索しながら実践していきたい。

実践「アイマスク体験後の『分かち合いタイム』より

養父町立建屋小学校 山根伸治

○アイマスク体験にいたる経過および指導観

本校の5年生は総合的な学習として「福祉」を重点領域として取り組んでいる。そして一学期は、上記をテーマに取り組んだ。

近年、「福祉教育」として「アイマスク体験」「車椅子体験」など、障害のある人の器具を使った体験がもてはやされている。私も8年前、当時6年生担任だった時に「福祉教育」の一つとして「アイマスク体験」を実践したことがある。

大きなけがのないように誘導の仕方を事前に十分指導してから、2人組を作らせた。うまくできたかと思った実践だったが、多くの子どもたちがその体験を通じてもらった事後の感想を読んで、私は愕然としたことを今もよく覚えている。

「楽しかった。」「おもしろかった。」という障害者の方の気持ちを思いやるにはあまりにほど遠いものだった。

その後、ある人にこんな話を伺ったことがある。「そんな体験をさせるのは、中学生以上になってからの方がいい。小学生の段階では、車椅子やアイマスクをただのおもちゃにしまって、本当に障害のある人の気持ちを知ることなどできない。」と。

しかしながら、本校5年生の子どもたちになんとか「アイマスク体験を通して自分の感じたことを出し合い、自分のことに置き換えて目の不自由な人を思いやる」ことができないかと、体験を学びに結びつける「体験学習法」を取り入れた実践を試みた。

○ねらい

- ・二人組になりアイマスクをした一人を目的地まで誘導することを通して、どういう誘導の仕方が目の不自由な人にとって安心できるかについて、みんなで自分の気持ちを振り返る中で気づき、実践できる。
- ・目の見えない状況の中で一人手探りで歩くことで、目の不自由な人の不安感に気づく。

○活動の実際（実施場所 体育館 児童数10人）

*子どもたちへは何の予告もせずに集合させる。

①すわったまま目を閉じてみよう。（約1分間）



②みんなで輪になって振り返り、分かち合う。

指導者「どんな気持ちだった？」

子ども「これから何が始まるのか、考えた。」

指導者「Aさんと同じような気持ちになった人、いる？」

(数人挙手)

「他にはないですか？」

子ども「ポーッとした感じがした。」



③今度は目を閉じて、少し歩いてみる。(約2分間)

*走ったりふざけたりしないこと

*どうしてもこわくて歩けない場合は、立ち止まってもよいことも伝える。

④みんなで輪になって振り返り、分かち合う。

指導者「今度は実際に歩いてみたけれど、どんな気持ちになった？」

子ども「楽しかった。いつも歩いている体育館だから、この辺にこれがあるとかが分かった。」

「私は、どこも見えなくてどこに何があるかも分からないし、すごくこわかった。」

指導者「Cさんみたいにこわかったって感じた人、いる？(3人、挙手) Dさんはどう？」

子ども「どこに何があるかないかが分からなくて、少しこわかった。でも楽しいのもあった。半分こわくて、半分楽しい感じ。」

「うん、ほくもそんな感じだった。」

「ほくはどこにいるか分からないし、人や周りの物にぶつかったらあぶないと思った。」



⑤2人組を作り、『体育館入り口→廊下→階段→5年生教室』の経路をアイマスク体験する。

*この際に教師は誘導方法を指導せずに、誘導する児童は「どう誘導したらアイマスク児童が安心して歩けるか」を考え、アイマスク児童は「不安になった時にどう誘導してほしいか」を話すことを伝える。

*大きなけがのないよう間隔をとらせ、無理のないようにゆっくり歩かせる。

⑥「分かち合いタイム」でお互いの児童の気持ちを振り返り、分かち合う。

指導者「アイマスクした人はどんな気持ちでした？」

子ども「真っ暗でこわかった。」

「私も。どこか分からない感じ。」

「いつも歩いている廊下でも、違ったところのような気がした。」

「壁にぶつかったりしていやだった。」

指導者「そうだね。大変だったね。それじゃあどんなことをしてくれたら安心できた？」

子ども「言葉がけをていねいにしてくれたら、場所がよく分かった。」

指導者「Hさんと同じように感じた人、手を挙げてみて。(4人、挙手)へえ～、けっこういるね。言葉って大事なんだねえ。……他に安心できたことってないですか？」

子ども「さわってくれてたらホッとした。」

「うん、私も。」

指導者「それでは逆に誘導した人はどんな気持ちだった？」

子ども「難しかった。」

「うん、ほくも。」

「私も自分は見えるから、逆に難しかった。歩くスピードとか。」

「私ももっとふつうに歩けるんじゃないかと思っていた。けっこうおそかった。」

「ほくもどうしたら(アイマスクの人が)怖くないか、いろいろ考えながらやっていた。(Aを)かべにぶつけちゃったけど。」

～ 以下略 ～

*お互いの気持ちを出し合う中で、この次のアイマスク体験で注意したらよいことが概ね次のように集約された。

○言葉がけを分かりやすく、丁寧にしてみる。

○アイマスクをしている人のどこかを誘導する人がさわって歩く。

⑦今度は役割を交替し、⑥での気づきをもとに2度目のアイマスク体験をする。

*1回目と比べ、相手の体に触れることや丁寧な言葉がけを意識している様子を感じ取ることができた。



⑧アイマスク体験のまとめの振り返り（ワークシートより）

「(問い) 目の不自由な人をゆう導する時に大切なことはなんだろう。」

- ・ちゃんと手でささえてあげたり、ここに何があるとか今ここを歩いているとか声かけしたら目の不自由な人もちょっとは安心してくれると思いました。(T・K)
- ・相手を落ち着かせて、どこに何があるのかを教えてあげて、変な方向にいったら、相手をこんらんさせないでいどうしてあげる。(K・M)
- ・目が見えないから少しのだんでもあると言って分かりやすくせつ明することが大切だと思った。かたや服をもってもらおうと自分も安心だし、目の不自由な人も安心だと思った。(M・N)
- ・目が見えない人がかべにぶつからず、「かいだんとかは、あと何だん。」というふうによびかける。物がある時はストップとか言ってちょっとまがってもぶつからないようにする。(H・Y)

(児童の感想より一部抜粋)

〇まとめ

この学習で子どもたちは目の不自由な人の誘導方法を全く知らない状態から始めた。子どもたちは、1度目のアイマスク体験後の「分かち合いタイム」の中で、アイマスクをつけた人は「真っ暗で怖い。」「不安になった。」「どこか分からない感じだった。」という気持ちを実感できた。それは誘導する人が何の予備知識もない素人で「本当に誘導を任せていいのだろうか。」という不安感を持っていたことにもよる。

また逆に誘導する場合、「分かりやすい言葉がけ」「体に触れること」が大切であることに気づき、2度目の体験の時に生かすことができた。

ただし、目の不自由な人の誘導の基本は、『目の不自由な人が主体』であり、「目の不自由な人が誘導する人に触れる」「どうしたいか尋ねる」などの方法は今回の学習で見つけることができなかった。

それゆえ、今後の学習の見通しとしては、この体験を生かし町内にある社会福祉協議会の協力をお願いして、目の不自由な方に対してどのような誘導方法がよいのかを聞き、さらにレベルアップした3回目のアイマスク体験を考えている。

また、この活動は体験学習法の循環過程に基づき行っており、整理すると次のようになる。



- ①体験（する） アイマスク体験をする
- ②指摘（みる） 「分かち合いタイム」
- ③分析（考える） ・アイマスク体験の振り返りと分かち合い
（前記の『活動の実際』参照）
- ④課題意識の明確化（気づく）
・次のアイマスク体験でアイマスクをしている人が安心して歩けるようにどんなことに気をつけたらいいだろうか。
（前記の 内参照）
- ↓
- 交替してアイマスク体験をし、試してみる

今回、誘導する人が何の予備知識もないということが、子どもたちが目の不自由な人の不安な気持ちを知る上でプラスに作用したとを感じる。しかしながら、アイマスクをつけた人の「周りが真っ暗で見えない」「本当に誘導を任せていいのだろうか」という不安感是指導者の予想以上に大きかった。そのためこの実践を行う際は、大きなけがをさせないよう「階段の場合は下から上へ移動させる」などの安全面の十分な配慮が大切だと感じた。



（2回目のアイマスク体験の様子より）

実践「養護老人ホーム訪問後の『分かち合いタイム』より

養父町立建屋小学校 山根伸治

○老人ホーム訪問までの子どもたちの学習の経過

2学期、子どもたちは1学期の「アイマスク体験」学習などをきっかけにして、養父町が「高齢者（お年寄り）や障害者の方たちが大切にされ、優しさを感じてもらえる町づくり」を目指していることを知った。

そして、高齢者の福祉について詳しく学習したい子どもは養護老人ホーム「あじさい」、障害者の福祉について詳しく学習したい子どもは養父町小規模通所作業所「さわらび」を訪問し交流する計画を立てることになった。（2施設とも訪問は全員で行うが、計画は関心のある子を中心に少人数で分担し合う方がよいと考えた。）そして高齢者の福祉グループにおいて、10月17日（金）「あじさい」に電話をして、交流日時を決めた。それから以下のような交流計画を立てた。

○「あじさい」のおじいさん、おばあさんとの交流

（日時） 10月27日（月） 10：00～11：30

（場所） 養護老人ホーム「あじさい」

（内容） 5年生児童の歌「もみじ」とリコーダー「ます」の発表
ぞうきん作りをしながらの交流

今回交流のお願いの手紙を書くことをはじめ、歌う予定の「もみじ」の歌詞を家庭で50枚印刷して「お年寄りと一緒に歌う」ことを考えるなど、子どもたちは交流までの計画を非常に意欲的に取り組んだ。

○指導観

この学習の見通しとしては、一度きりの交流に終わらせず、年間3～4回の交流を積み重ねる中で、交流の仕方を工夫し、またそこから見えてくる「福祉」の大切さと課題をつかませたいと考えた。そしてその次回の交流をよりよくする手段として「体験学習法」が有効であると考え、取り入れた。

○ねらい

- ・養護老人ホームの高齢者と初めて交流した後、その交流の仕方やその時の自分の気持ちを振り返る中で、次回の交流の時に具体的に試みてみたい行動を考える。

○活動の実際（実施場所 5年生教室 児童数9人）

①みんなで輪になって振り返り、分かち合う。

指導者「昨日、『あじさい』に行って初めて交流したね。お年寄りが座っているあのホールに入った時どんな気持ちだった？ 思い出す時間を少しとるから。（約30秒たってから）それでは、どうぞ。」

子ども「おじいさんやおばあさんたちがいっぱいいて、きんちょうした。」

指導者「Aさんと同じような気持ちになった人、いる？（数人が挙手）Hくんの気持ちももう少し詳しく教えて。」

子ども「リコーダーの発表でまちがえないかときんちょうしてきた。」

指導者「うん、分かる、分かる。……他にはないですか？」

子ども「なんか暗い感じがした。」

「そうそうなんか雰囲気が暗かった。」

「おじいさんはあまり話さないで、おばあさんばかりがしゃべっていたなあ。」

「怒ったような顔をしていたおじいさんもいたし。」

「やさしいおばあさんもいたけどね。」

指導者「ふーん、ホールに入った時、暗い感じがしたと思った人、手を挙げてみて。」
（7人が挙手）

*はじめはかたい感じだった子どもたちも率直なBの発言をきっかけに打ち解けてきた。

指導者「リコーダーや歌を発表した感想を聞かせて。」

子ども「ドキドキした。」

「笑って聞いてくれている人もいたけど、にらんでいたり、途中で帰ったりする人がいていやだった。」

「そうそう、みんな楽しんでないって感じ。ぼくらが何をやっているかも分からないって感じだった。」

指導者「Jさんはどう？」

子ども「わたしも、リコーダーやっている時、すぐ帰ったりあまり笑ってくれなくてちょっといやだった。」

「なんかムカついた。わたしらあのは楽しくもおもしろくもないんかいって感じだった。」

指導者「Gさんはどう？」



子ども「わたしもちょっといやだった。」

「せっかくGちゃんが作ってきた『もみじ』のプリントを配ってみんなで歌おうと思っていたのに、あまり歌ってくれないし、そのプリントはみんながいらんってすぐに職員の人に返してるんだから。」

指導者「分かる、分かる。記念に持っていてくれてもいいのにね。」

子ども「怒っているような感じで聞いてた。」

指導者「みんな、楽しんでくれていない感じがしたんだね。」

子ども「でも、中にはあたしらあのを楽しそうに聞いてくれた人もいたからうれしかったけど。」

「うん、ニコニコしてくれる人もいてうれしかった。」

指導者「ぞうきん作りの時はどうだった？ あじさいの職員の人と一緒に話をしながらしたらいいって言ってたね。」

子ども「隣りのおじいさんがすごい器用だった！」

「ぼくの横のおじいさんはぜんぜんやらしてくれなくて、どうしようかと思った。」

「ぞうきん作りの時は話しかけてもらって、とてもうれしかったし、もっとしゃべりたいなあって思った。」

指導者「Fさんみたいに話しかけてもらってうれしかった人、どれくらいいる？」

(5人挙手。Gも挙手。)

「Gさんも聞かせて。」

子ども「わたしも話しかけてもらって、とてもうれしかった。」

「でも、話しづらかった。」

「うん、ぼくも。」

「聞こえているか、聞こえていないか、分からない感じだった。」

指導者「Jさんはさっき手を挙げていたけど、うれしかった理由を教えて。」

子ども「私の横のおばあさんが『私の名前は〇〇てる子です。また老人ホームに来た時、あじさいの仕事場の人に私の名前を言って、私の部屋に来てね。』とか話してくれてすごくやさしかった。」



指導者「来月も『あじさい』に行って交流してみようと思う？ 正直な気持ちを言ってみてよ。」

子ども「先生、本当に本当のこと言っている？ ほくは楽しくなかったし、もう行きたくない。」

「わたしも行きたくない。」

「わたしも昨日みたいな交流だったら、したくない。」

「ほくは次も行ったらいいと思う。今回はあまり楽しくなかったけど。」

「交流の仕方がよくなかったと思う。ほくらだけの発表だったからお年寄りの方々も楽しめなかったと思う。やり方を変えるんだったらまた交流してもいいかなあって感じ。」

「結局、一人も名前を聞けないで終わったもんなあ。」

～以下、略～

*話し合う中で、『来月も交流する』という結論が出たが、今回の交流が楽しくなかったというD、Bの2人の男子の意見を参考にしながら、次回の交流で「やりたいこと」「自分たちが工夫したらよいこと」を出し合った。

(次回の交流で心がけることで出たのは、概ね次のような意見である。)

- 自分たちが発表したりするより、ゲームっぽい感じでみんなで楽しめることをする。(ゲームや手遊び、目が見えにくい人、聞こえにくい人でも、どんな人でもできる遊びや昔の遊びをしたらいい。)
- 名前を自分たちから聞いて、一人以上の名前を覚える。
(お年寄りの方にも自己紹介をしてもらったら……。)
- 自分から「あじさい」の人に話しかけたらいいと思う。

○まとめ

子どもたちが養護老人ホーム「あじさい」を訪問したのは、実は初めてではない。3年生の時に町内社会見学で訪問している。しかし交流後、一人の子どもからこんなつぶやきがあった。「あの時は、30分程度で『あじさい』の中の部屋とか器具とか説明されただけだった。『見学』はしているけど『交流』はしていないから、今日が初めてみたいもんだった。」

そして今回の交流では、質問やインタビュー



お茶配りの様子

などの事前準備はせず、「本当に交流（体験）だけしよう」ということが子どもたちのねらいになった。老人ホームでは、子どもの発表に対しても無反応なお年寄りや不快な感情を露わにするお年寄りもいて、戸惑いの表情を見せたり話ができず沈黙の中ぎこちない様子でぞうきんをぬう子どもの姿が実に印象的だった。

正直、交流後老人ホームを出た時の子どもたちの表情は複雑であった。

「思ったより気持ちが充実しなかったなあ。」

「楽しめなかった。」

「おもしろくなかったわ。」

「疲れたあ。」という表情が伺えた。しかしながら「お年寄りの方に対しては優しく接するのが当然だし、交流が楽しくなくても口に出したらダメ。」と思う優しい気遣いからだろうか、その日、「交流がつまらなかった」と口にする子どもは一人もいなかった。そして、事後に「分かち合いタイム」を設定しなければ、おそらく疲



れただけの交流で終わった子どもたちも多かったと思う。

そして次の日、「分かち合いタイム」の中で、一人の男児Bの本音の言葉をきっかけに子どもたちからあふれるように活発な分かち合いが始まった。輪になって座っている子どもたちから次々と本音が飛び出し、それに共感するあるいは違う感じ方も引き出すことができた。「分かち合いタイム」が終わった後、子どもたちの表情は充実感を取り戻しているように感じた。そして、次回作業所「さわらび」で障害を持つ方との交流後もまた同じように「分かち合いタイム」を設定すると言った時、ある女の子が次のように言ったのが印象的だった。

「また、したい！ だってグチが言えてすっきりするもん。」

確かに今回、子どもたちが輪になってお互いの気持ち（しかもほとんど本音に近いもの）を出し合い、分かち合うことができ、しかもそのことは次回の交流をよりよくするために非常に有効な手段となった。次回の交流をよりよくする手立てを三つ、自分たちで導き出すことができたのだから……。

この活動は体験学習法の循環過程に基づき行っており、整理すると以下ようになる。

- | | |
|----------------|---|
| ①体験（する） | 養護老人ホーム「あじさい」での交流
（子どもたちの歌などの発表とぞうきん作り） |
| ②指摘（みる） | 「分かち合いタイム」 |
| ③分析（考える） | ・「あじさい」での交流の振り返りと分かち合い
（前記の『活動の実際』参照） |
| ④課題意識の明確化（気づく） | ・次回の交流は、どうしたらよりよい交流になるだろうか。
↓
次時の「あじさい」での交流で試みる |

今回、体験学習法の循環過程がこの学習にピッタリとはまった感がある。と同時に、自己表出に消極的な子ども（GさんやJさん）の意見を引き出すことはまだ不十分で「本当の全員での分かち合い」にはなり得ていなかったと痛感している。ファシリテーター（援助者）としてどの子の気持ちもうまく引き出していけるよう、今後も実践を積み重ねていきたい。



（「あじさい」でのぞうきん作りの様子より）

参考・引用文献

	監修者・著者・編者	発行所
今こそ学校にアドベンチャー教育を	二宮孝・中山正秀 諸澄敏之	学事出版
アドベンチャー教育で特色ある学校づくり	林寿夫・川口博行 新井浅浩	学事出版
野外教育入門	星野敏男・川嶋直・平野吉直 佐藤初雄	小学館
人間関係トレーニング	津村俊充・山口真人	株式会社ナカニシヤ出版
体験学習実践研究 volume 1	津村俊充・楠本和彦	体験学習実践研究会
体験学習実践研究 volume 2	津村俊充・楠本和彦	体験学習実践研究会
人間関係トレーニングの実際	星野欣生・津村俊充	株式会社プレスタイム
コミュニケーション	星野欣生・津村俊充	株式会社プレスタイム
人間関係トレーニングにおける体験学習	星野欣生・津村俊充	株式会社プレスタイム
個人の気づき	星野欣生・津村俊充	株式会社プレスタイム
プロジェクトアドベンチャージャパン提供資料		
アウトドアエデュケーションセンター提供資料		
自然体験活動の方法	土井浩信・野口和行 平野吉直・鶴川高司	日本教育科学研究所
エンカウンターで学級が変わる小学校編	國分康孝・岡田弘	図書文化
体験活動事例集—豊かな体験活動の推進のために— 文部科学省		
教職研修 奉仕活動・体験活動の充実		教育開発研究所
青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申） 中央教育審議会		
自然体験活動指導者評価ハンドブック ～力を知って、自ら育てる～	NPO法人 自然体験活動推進協議会（CONE）	
自然体験活動安全対策ハンドブック	NPO法人 国際自然大学校	
新小学校教育課程講座（特別活動）	宮川八岐	株式会社ぎょうせい

平成14・15年度県立南但馬自然学校プログラム研究委員会委員名簿

(順不同)

分野	氏名	所属・職名
学識経験者	山田 誠	神戸市外国語大学 教授
	高見 彰	関西国際大学 教授
	一色 元	兵庫教育文化研究所 事務局長
野外活動施設関係者	株本 治夫	県立兎和野高原野外教育センター 自然学校専門指導員 (駐在指導担当)
	岩佐 直彦	県立嬉野台生涯教育センター 自然学校専門指導員 (駐在指導担当)
自然学校専門指導員	加藤 義弘	但馬教育事務所 自然学校専門指導員
	畑中 啓太	丹波教育事務所 自然学校専門指導員
	小西 博泰	北播磨教育事務所 自然学校専門指導員
関係行政機関関係者	中田 直人	県教育委員会義務教育課 指導主事 (平成14年度)
	横山 一郎	県教育委員会義務教育課 指導主事 (平成15年度)
公立学校教員	山根 伸治	養父町立建屋小学校 教諭
	西山 修	青垣町立遠阪小学校 教諭
	平形 淳朗	一宮町立下三方小学校 教諭
	喜多 英雄	一宮町立一宮北中学校教諭
	南 克伸	県立伊和高等学校 教諭
県立南但馬自然学校	足立 純	現県立嬉野台生涯教育センター 指導主事 (平成14年度)
	西村 一範	県立南但馬自然学校 指導主事
	芦田 哲	県立南但馬自然学校 指導主事
	森本 良孝	県立南但馬自然学校 指導主事

平成14・15年度

自然・人・地域に学ぶ

平成16年3月発行

発行 兵庫県立南但馬自然学校
〒669-5134
兵庫県朝来郡山東町迫間字原189
☎079-676-4730
印刷 北星社

<http://www.hyogo-c.ed.jp/shizen-bo>
Eメール shizen-bo@hyogo-c.ed.jp

